

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

2025年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、桂川大下津地区他掘削工事に伴う長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和7年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎



川船3 検出状況（北から）



1 調査地遠景（北から）

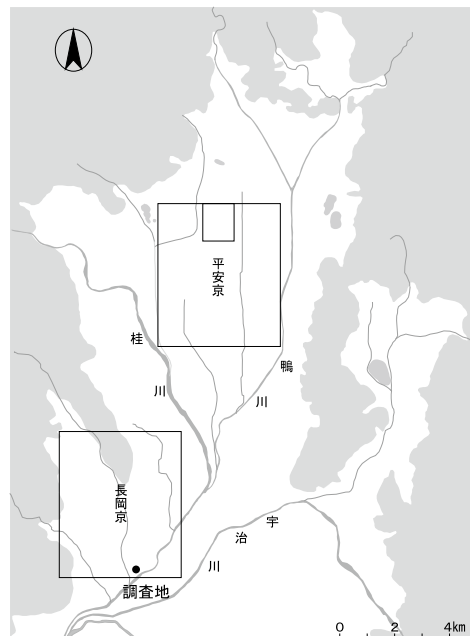


2 川船検出状況（北から）

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡（京都市番号 21 N G 269）
長岡京跡左京第679・692次調査（7 A N - Y M M - 4 ・ 5）
- 2 調査所在地 京都市伏見区淀水垂町地先
- 3 委 託 者 国土交通省 近畿地方整備局
淀川河川事務所長 谷川知実
- 4 調査期間 2023年11月6日～2024年5月28日
- 5 調査面積 1,900㎡
- 6 調査担当者 中谷俊哉・三好孝一・中谷正和・谷野誠也・布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「納所」・「淀」・「神足」・「円明寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 遺構の種類（土坑など）+調査区番号（6）+通し番号（001～）とした。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、土製品は「土」、石製品は「石」、ガラス製品は「ガ」、木製品は「木」、川船は「川船」、金属製品は「金」、銭貨は「銭」をそれぞれ頭に付した。
- 13 本書作成 中谷俊哉・中谷正和
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	5
(1) 地理的環境	5
(2) 歴史的環境	5
(3) 周辺調査	9
3. 遺 構	13
(1) 基本層序と調査区の地形区分	13
(2) IV期（室町時代中葉から後葉）の遺構	17
(3) III期（室町時代後葉から安土桃山時代）の遺構	18
(4) II期（江戸時代前半）の遺構	20
(5) I期（江戸時代後半から明治時代）の遺構	25
4. 遺 物	29
(1) 出土遺物の概要	29
(2) 土器類	29
(3) 瓦類	36
(4) 土製品	37
(5) 石製品	38
(6) ガラス製品	39
(7) 木製品	39
(8) 川船	40
(9) 金属製品	46
(10) 銭貨	51
(11) 貝類	51
5. ま と め	53
(1) 遺構の変遷	53
(2) 護岸について	57
(3) 川船について	58
付章1 出土した川船の接合技法について	62

図 版 目 次

- 巻頭図版1 遺構 川船3検出状況(北から)
- 巻頭図版2 遺構 1 調査地遠景(北から)
2 川船検出状況(北から)
- 図版1 遺構 第4面〔Ⅳ期〕、第3面〔Ⅲ期〕平面図(1:400)
- 図版2 遺構 第2面〔Ⅱ期〕平面図(1:400)
- 図版3 遺構 第1面〔Ⅰ期〕平面図(1:400)
- 図版4 遺構 調査区西壁断面図1(1:100)
- 図版5 遺構 調査区西壁断面図2(1:100)
- 図版6 遺構 調査区西壁断面図3(土色名1)
- 図版7 遺構 調査区西壁断面図4(土色名2)
- 図版8 遺構 調査区北壁断面図(1:100)
- 図版9 遺構 溝6394・6130-Ⅱ断面図(1:50)
- 図版10 遺構 建物6277実測図(1:50)
- 図版11 遺構 礎石列6131、柱穴列6203・6332実測図(1:50)
- 図版12 遺構 柱穴列6411、石列6250・6280、石組遺構6180、土坑6292実測図(1:50)
- 図版13 遺構 建物6209実測図(1:80)
- 図版14 遺構 建物6184、柱穴列6098実測図(1:50)
- 図版15 遺構 礫敷6075、礎石列6125実測図(1:50)
- 図版16 遺構 Ⅱ期護岸関連遺構平面図1(1:150)
- 図版17 遺構 Ⅱ期護岸関連遺構平面図2(1:150)
- 図版18 遺構 Ⅱ期護岸関連遺構平面図3(1:150)
- 図版19 遺構 土留6301平面図1(1:50)
- 図版20 遺構 土留6301平面図2(1:50)
- 図版21 遺構 土留6300実測図1(1:50)
- 図版22 遺構 土留6300実測図2(1:50)
- 図版23 遺構 土留6300実測図3(1:50)
- 図版24 遺構 石組遺構6004実測図(1:50)
- 図版25 遺構 石組遺構6010、護岸6651実測図(1:80)
- 図版26 遺構 石組遺構6100実測図(1:100)
- 図版27 遺構 石組遺構6385実測図(1:50)
- 図版28 遺構 建物6051、礎石列6057実測図(1:50)
- 図版29 遺構 柱穴列6039・6078・6181・6208実測図(1:50)

- 図版30 遺構 粗朶沈床状遺構6036、溝6037実測図（1：100、溝断面図のみ1：20）
- 図版31 遺構 I期護岸関連遺構実測図1（1：150）
- 図版32 遺構 I期護岸関連遺構実測図2（1：150）
- 図版33 遺構 I期護岸関連遺構実測図3（1：150）
- 図版34 遺構 I期護岸関連下層遺構実測図1（1：150）
- 図版35 遺構 I期護岸関連下層遺構実測図2（1：150）
- 図版36 遺構 I期護岸関連下層遺構実測図3（1：150）
- 図版37 遺構 A-A' セクション断面図（1：100）
- 図版38 遺構 B-B' セクション断面図（1：100）
- 図版39 遺構 C-C' セクション断面図（1：100）
- 図版40 遺構 D-D'・E-E' セクション断面図（1：100）
- 図版41 遺構 F-F' セクション断面図（1：100）
- 図版42 遺物 溝6130-II（古段階）・6394（古段階）・6130-II（新段階）、溝状遺構6550出土土器実測図（1：4）
- 図版43 遺物 溝6394（新段階）出土土器実測図（1：4）
- 図版44 遺物 溝6582・6130-I・6225出土土器実測図、河川堆積6656出土土器実測図1（1：4）
- 図版45 遺物 河川堆積6656出土土器実測図2（1：4）
- 図版46 遺物 河川堆積6656出土土器実測図3、土留6300・6301出土土器実測図（1：4）
- 図版47 遺物 石組遺構6010・6100・6385出土土器実測図（1：4）
- 図版48 遺物 護岸6136・6102、高まり6002、石積6001、護岸6005、水制6101出土土器実測図（1：4）
- 図版49 遺物 瓦拓影及び実測図1（1：4）
- 図版50 遺物 瓦拓影及び実測図2（1：4）
- 図版51 遺物 瓦拓影及び実測図3（1：4）
- 図版52 遺物 木製品実測図（1：2、木10・11のみ1：5）
- 図版53 遺物 川船1実測図（1：30）
- 図版54 遺物 川船2実測図（1：30）
- 図版55 遺物 川船3実測図（1：30）
- 図版56 遺物 川船4・5実測図（1：30）
- 図版57 遺物 川船6実測図（1：30）
- 図版58 遺物 金属製品実測図1（1：2）
- 図版59 遺物 金属製品実測図2（1：2）
- 図版60 遺物 金属製品実測図3（1：2）
- 図版61 遺物 金属製品実測図4（1：2）
- 図版62 遺物 銭貨拓影（2：3）

- 図版63 遺構 1 第4面全景(南から)
2 溝状遺構6550(北東から)
3 溝状遺構6550 土器出土状況(南東から)
- 図版64 遺構 1 溝6394・6130-II(東から)
2 溝6394 堆積状況(東から)
3 溝6130 堆積状況(東から)
- 図版65 遺構 1 第3面全景(北から)
2 石列6250・6280(東から)
- 図版66 遺構 1 石組遺構6180(西から)
2 土坑6292(北西から)
- 図版67 遺構 1 溝6130-I(東から)
2 溝6130-I 西肩(西から)
3 溝6225(東から)
4 溝6582 土器出土状況(東から)
- 図版68 遺構 1 第2面全景(北東から)
2 建物6184(北から)
3 水溜6046(北から)
4 礫敷6075(西から)
- 図版69 遺構 1 石組遺構6004、土留6301(南東から)
2 土留6301掘り下げ後の川船2検出状況(南東から)
- 図版70 遺構 1 石組遺構6010(北東から)
2 A-A'セクション 川船3の船底検出状況(南東から)
3 A-A'セクション 川船3の舷側痕跡(南から)
4 石組遺構6010 南辺土坑 タイロッド基部の検出状況(南東から)
5 石組遺構6010 南辺土坑 タイロッド基部の礎石検出状況(南東から)
- 図版71 遺構 1 石組遺構6010掘り下げ後の川船3検出状況(南西から)
2 川船3細部1(北から)
3 川船3細部2(南西から)
4 川船3細部3(北西から)
- 図版72 遺構 1 土留6300(南東から)
2 土留6300 川船6、基礎石列(北から)
3 川船6細部1(南東から)
4 川船6細部2(南東から)
- 図版73 遺構 1 石組遺構6100(南東から)
2 石組遺構6100断割後の土留6300検出状況(南東から)

- 3 川船7細部(東から)
- 4 石組遺構6100北側増築部(東から)
- 図版74 遺構
 - 1 石組遺構6385(南東から)
 - 2 石組遺構6385東面(東から)
- 図版75 遺構
 - 1 A-A' セクション 河川堆積6656・6657、集石6003(南東から)
 - 2 A-A' セクション 噴砂(南から)
 - 3 河川堆積6656 漆器椀出土状況(東から)
 - 4 石組遺構6010前面・河川堆積6656 土器出土状況(北東から)
- 図版76 遺構
 - 1 第1面全景(北東から)
 - 2 粗朶沈床状遺構6036、溝6037(北から)
- 図版77 遺構
 - 1 石列6045、柱穴列6078(東から)
 - 2 石列6041(西から)
 - 3 石組遺構6070(北東から)
 - 4 井戸6025(北から)
- 図版78 遺構
 - 1 護岸6005、高まり6002、集石6003(東から)
 - 2 石積6001西面(北西から)
 - 3 高まり6002、石積6001(北西から)
- 図版79 遺構
 - 1 B-B' セクション 護岸6005・6102、高まり6002、石積6001(南西から)
 - 2 B-B' セクション 高まり6002法肩打設杭の破断状況(南から)
- 図版80 遺構
 - 1 水制6101 杭列検出状況1(北西から)
 - 2 水制6101 杭列検出状況2(北東から)
 - 3 水制6101 杭打設状況(北東から)
 - 4 水制6101 竹蛇籠検出状況(南西から)
- 図版81 遺物 溝状遺構6550・6130-II(新段階)・6394(新段階)出土土器
- 図版82 遺物 溝6582・6225出土土器
- 図版83 遺物 河川堆積6656出土土器1
- 図版84 遺物 河川堆積6656出土土器2
- 図版85 遺物 土留6301、石組遺構6010・6100・6385出土土器
- 図版86 遺物 出土瓦
- 図版87 遺物 出土土製品・石製品
- 図版88 遺物 出土木製品
- 図版89 遺物 出土金属製品1
- 図版90 遺物 出土金属製品2
- 図版91 遺物 出土銭貨
- 図版92 遺物 出土滓

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,500）	2
図3	調査前全景（南から）	3
図4	重機掘削状況（北から）	3
図5	作業状況（北から）	3
図6	ドローン撮影状況（北西から）	3
図7	オルソ測量全景（北から）	3
図8	地元向け説明会風景（南西から）	3
図9	報道発表風景（南から）	3
図10	埋め戻し終了状況（北から）	3
図11	近世淀とその周辺（1：250,000）	7
図12	近世・近代の淀（1：10,000）	8
図13	周辺調査位置図（1：5,000）	9
図14	基本層序柱状図（1：50）	14
図15	6区地形区分図（1：600）	15
図16	河岸模式図（1：120）	16
図17	溝6225・6130-I・6582断面図（1：50）	19
図18	水溜6046・6047実測図（1：50）	21
図19	石組遺構6010構築過程（1：60）	22
図20	石列6041・6045、石組遺構6070実測図（1：50）	26
図21	古墳時代の土器実測図（1：4）	30
図22	土器1出土状況図（1：10）	30
図23	墨書土器・輸入磁器実測図（1：4）	35
図24	土製品実測図（1：4）	38
図25	石製品・ガラス製品・木製品実測図（1：4）	38
図26	出土川船模式図（1：50）	40
図27	川船2の死節（船内側）と材10	42
図28	川船2の死節（船外側）	42
図29	川船3船底通釘結合部の断面模式図（1：1）	42
図30	川船3通釘の方形彫り込み（船内側）	43
図31	川船3通釘の台形彫り込み（船外側）	43
図32	川船6オモキ様の刳材断面（写真上が船内側）	44

図33	川船6 工具痕跡（材5 船外側）	44
図34	川船6 通釘の方形彫り込み（船外側）	44
図35	川船6 通釘の台形彫り込み（船内側）	44
図36	川船6 縫釘の台形彫り込み（船外側）	44
図37	川船6 マキハダとアイバスリ痕（材1の小端、材2との結合面。写真下が船内側）	44
図38	川船6 材4の埋木（船外側）	44
図39	川船6 アイバスリ痕（材5、敷板との接合面）	44
図40	銭貨出土分布図（1：800）	49
図41	貝類出土分布図（1：500）	50
図42	遺構変遷図1 室町時代中葉～安土桃山時代（1：1,000）	54
図43	遺構変遷図2 江戸時代前半（1：1,200）	55
図44	遺構変遷図3 江戸時代後半～明治時代（1：1,200）	56
図45	南山城地域の現存川船 表細部（八幡市ふるさと学習館展示、中谷俊哉撮影）	59
図46	釘の種類と打ち込み方法分類図	62
図47	部材と釘の配置 [川船1～3]（1：50）	64
図48	部材と釘の配置 [川船4～6]（1：50）	72
図49	釘穴間隔度数分布	78
図50	川船断面復元図（1：15）	82

表 目 次

表1	遺構概要表	13
表2	遺物概要表	29
表3	出土銭貨一覧表	48
表4	川船1・2釘穴間隔計測表	66
表5	川船3釘穴間隔計測表	67
表6	川船1～3釘穴列一覧表	68
表7	川船4～6釘穴間隔計測表	74
表8	川船4～6釘穴列一覧表	75

付 表 目 次

付表1	土器類一覧表	84
付表2	土製品一覧表	91
付表3	石製品一覧表	92
付表4	木製品一覧表	92
付表5	川船一覧表	93
付表6	金属製品一覧表	94
付表7	銭貨一覧表	96

付 図 目 次

付図1	川船1・2・4・5実測図（1：15）
付図2	川船3・6実測図（1：15）

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

1. 調査経過

本調査は、国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所（以下、「淀川河川事務所」という。）による桂川大下津地区他掘削工事に伴う埋蔵文化財調査である。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という。）による試掘調査が行われ、事業計画地の一部（約15,000㎡）に遺構の存在が確認された。そのため、淀川河川事務所から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施した。なお、発掘調査の指導範囲が広大であること、調査期間が非出水期に限定されることから、複数年にわたって調査を実施する計画であり、今回の調査は、令和3・4年度に実施した1・2次調査に続く3次調査にあたる。令和3年度の1次調査では、弥生時代から明治時代までの11時期の遺構面を確認し、各時期の遺構・遺物が存在することが明らかとなった。令和4年度の2次調査では、調査予定範囲の北端および南西端の調査を実施したことにより、調査予定範囲の全域に各時期の遺構・遺物が存在することが明らかとなった。

今回の調査では、2次調査3区の北側に6区を設定した。調査面積は1,900㎡である（図1・2）。調査は、令和5年11月6日から開始した。まず、重機を用いて現代盛土および河川堆積層を

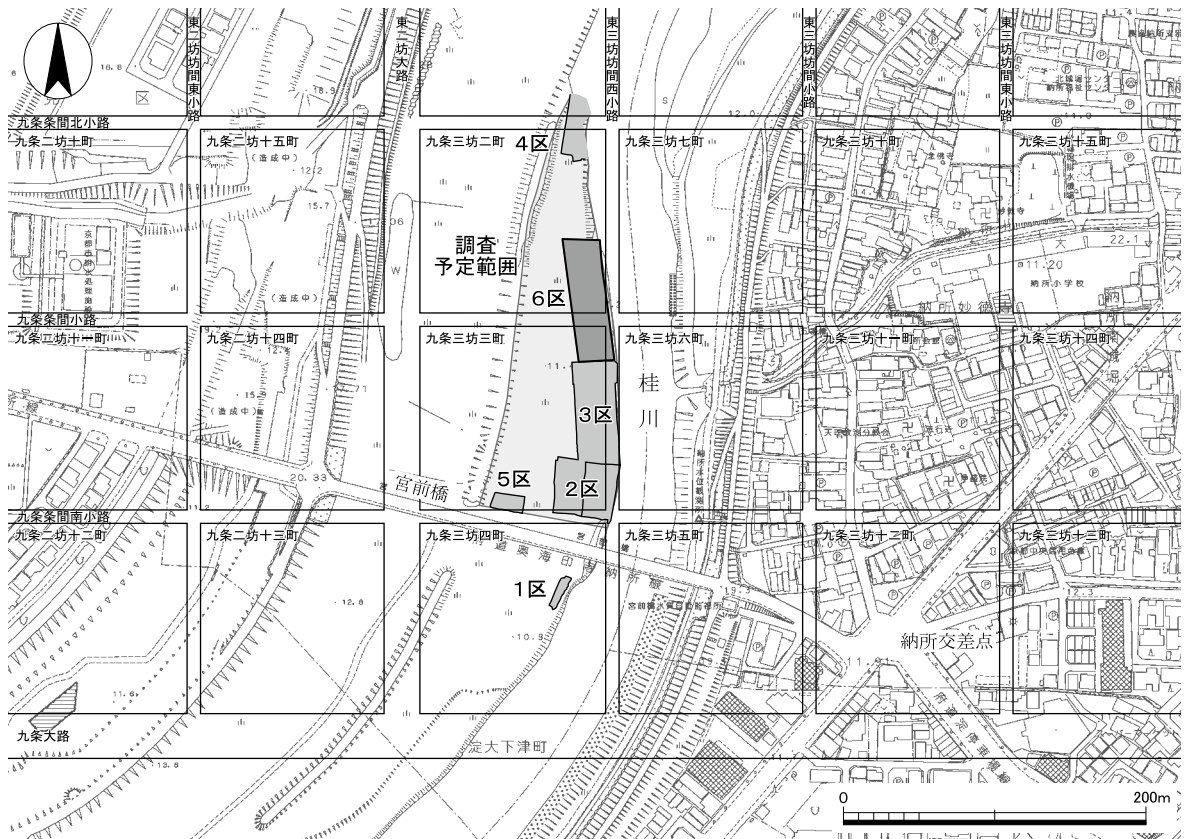


図1 調査地位置図（1：5,000）

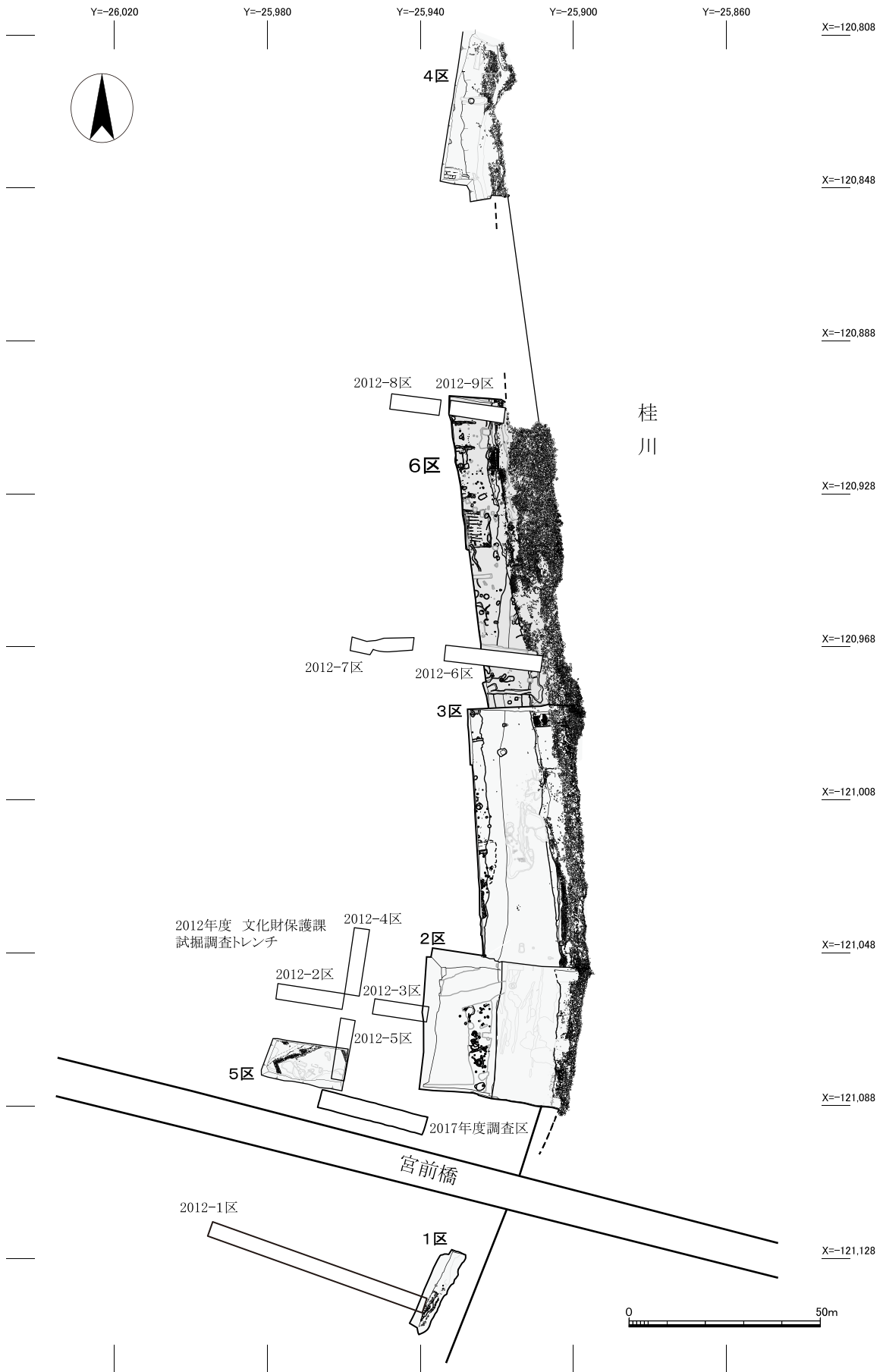


図2 調査区配置図 (1 : 1,500)



図3 調査前全景（南から）



図4 重機掘削状況（北から）



図5 作業状況（北から）



図6 ドローン撮影状況（北西から）



図7 オルソ測量全景（北から）



図8 地元向け説明会風景（南西から）



図9 報道発表風景（南から）



図10 埋め戻し終了状況（北から）

除去した後、人力で遺構の検出・掘り下げを行った。

6区では室町時代中葉（Ⅳ期）から明治時代（Ⅰ期）までの6面4時期の調査を行った。検出した遺構は、実測・写真・オルソ測量による記録を行った。記録作業の終了後、事業地内の安全対策として溝や井戸などの深い遺構の埋め戻しを行い、令和6年5月28日をもって調査で計画されていたすべての発掘作業を終了した。調査成果の公表は、令和6年3月2日に地元向け説明会、令和6年6月25日には報道機関に広報発表を実施した。

調査中は、適宜、文化財保護課の検査を受け、また検証委員である京都女子大学の梶川敏夫氏の検証を受けた。

調査中および報告書作成にあたり、以下の方々から御指導・御教示を得ました。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）

浅井猛宏、安達裕之、石川康紀、内田信行、大滝裕一、大塚朋世、大坪洲一郎、大庭重信、小川智彦、小野映介、織野英史、影山和則、加藤雄太、金井千紘、金田章裕、川崎文子、小池 寛、小山田宏一、西庄英晴、杉本厚典、鈴木康久、竹中友里代、趙 哲濟、辻 長治、辻 康男、辻本裕也、常松隆嗣、出口晶子、中川和哉、中条武司、西山良平、野地秀俊、畑 大介、廣瀬直樹、福山博章、別所秀高、前田仁暉、松井哲洋、松浦智博、南秀雄、母利美和、森岡秀人、森下 衛、八十島豊成、山船晃太郎、吉田芽依、旧山田家住宅

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

調査地は、京都市伏見区淀水垂町地先に位置する。現在は桂川右岸堤外地の河川敷であり、調査地の下流約2.5km付近で、北東から流れる桂川、東から流れる宇治川、南東から流れる木津川が合流し、淀川となって大阪湾へと流れる。しかし、こうした現在の地勢は、明治時代以降に行われた複数回の河川の付け替え・引堤工事により形成されたものであり、それ以前は、調査地付近で桂川・宇治川・木津川が合流していた。また調査地の南東には、昭和時代の干拓事業で消滅した巨椋池が水を湛えて広がっており、その池の水もここに流入していた。このように調査地付近は、京都盆地では最低部に位置する遊水地・後背湿地であったため、水害の頻発地となっていた¹⁾。

(2) 歴史的環境

平安京遷都から鳥羽殿造営まで(794～1086年) 当地の地名でもある「淀」が史料において初出するのは、桓武天皇が与等津(淀津)に行幸した記事である²⁾。平安時代初頭にはすでに津(湊)が置かれており、山陽道や南海道諸国から船で運ばれた米や塩などの租税が一旦ここで荷下ろされ、陸路を使って平安京まで運ばれている³⁾。また播磨国をはじめ諸国からの木材が集積し、清涼殿・木工寮など京内の施設や大安寺などの寺社の造営に利用されている⁴⁾。そのため淀津には、租税を備蓄・管理する施設として、内蔵寮の倉庫や内膳司付属の淀御贄所・供御所が置かれ、四衛府の番長以下が交替で詰めていた。この内膳司付属の淀供御所や四衛府の下に編成されていたのが、狩取といわれる漁労・船運従事者であり淀津に居住していた⁵⁾。また、租税の管理・運送を取り仕切る西国受領層は、淀津に倉庫などの拠点を置くなどして、綱丁・梶取・納所預を編成していたと考えられている。のちに発生する「問」という船運業者は、この綱丁・梶取・納所預の中から発生したことが指摘されている⁶⁾。このほか、淀津には貴族の別荘も置かれていた⁷⁾。こうした貴族に隷属する散所も淀津に居住しており、船の手配をするなどして貴族に交通上の便宜を供与していた⁸⁾。平安時代中・後期には、行幸や参詣を目的とした院や摂関家が、頻繁に淀を中継点として利用している⁹⁾。

一方で、淀津は平安京の南西外に位置することから、有事の際の要地としても重視されていた。平城太上天皇の変(藤原薬子の变)の際には頓兵が置かれ、また京内に盗人や反逆者が出た場合は逃亡を防ぐために検非違使が警固に向かった¹⁰⁾。このほか平常時でも、治安維持のために検非違使が巡検を行い、淀津に居住して津を管理する刀祢を勘問している¹¹⁾。なお検非違使は、淀津において、刀祢だけでなく貴族に隷属する散所も指揮して船の手配を行うなどしていた¹²⁾。さらには、四衛府の権限を吸収し、その下に編成されていた狩取をも支配していったと考えられている¹³⁾。

このように、平安時代の淀津には多様な利権のもとに編成された多様な身分を持つ人々が集住しており、その中には船運に従事する者が少なくなかった。

鳥羽殿造営から淀城築城まで（1086～1623年）平安時代後期になると、鳥羽殿の造営（応徳三年（1086））によって淀川交通が再編される。これにより、検非違使の管轄は京内に縮小することとなり、淀津への勘問は行われなくなった。そのため、検非違使の下に編成されていた刀祢は淀津から姿を消し、狩取は鳥羽殿領の淀魚市に再編成されたことが想定されている。¹⁴⁾

淀魚市は、この時期に度々発せられた殺生禁断政策を契機として、京内から離れた淀の地に設置されたことが指摘されており、京内に卸される魚介類の管理が行われたと考えられている。¹⁶⁾この淀魚市には、西国受領層に組織された納所預などを前身とする、「問」という業者が居住しており、彼らははじめ荘園から運上される年貢を領家へと納めていたが、¹⁷⁾しだいに貴族や寺社からの隷属的な立場を脱して、自由契約のもと水上輸送業や商業、さらには替銭業を行うようになっていった。¹⁸⁾とくに商業では、淀魚市に着岸した塩や塩合物を京内に所有する問屋へと運び、卸売も行っていた。¹⁹⁾しかし、彼らの拠点であった淀魚市は16世紀半ばを最後に史料上から姿を消す。²⁰⁾

一方、淀津でも「問」の存在が確認でき、同じく荘園から運上された年貢を領家へと納めていた。²¹⁾また淀魚市とは異なる販売ルートで塩を卸していたことが知られる。²²⁾このほか、建築資材が中継・売買されていたことも知られる。²³⁾しかし、16世紀後半に豊臣秀吉が伏見城建設に伴って港湾機能を伏見港に移したことにより、淀津は史料上から姿を消す。以降、淀に物資が公的に集積したり、租税を備蓄・管理する施設が設置されたりすることは無くなったとみられる。ただし、港湾機能が移転する直前、淀二十石船に運上銀の免除や、淀川水上交通を独占的に支配できる権利が与えられていたこともあり、淀の水上輸送業や中継機能が衰退することはなかった。また、港湾機能移転後には過書船（淀二十石船および、三十石以上の大船）の公用免除と、過書船の代表者（河村与三右衛門・木村宗右衛門）に対する淀川水上交通を支配する権利が付加されるという優遇があった。²⁶⁾さらに徳川期になると、河村・木村を過書奉行として過書座が成立し、幕府からの認めを受けた。²⁷⁾こうして淀は水上輸送業の町として生き延びていくことになる。

なお、中世には寺社造営を名目に下津（現在の淀大下津町）や納所に水上関が設置され、これを通過する売買船から徴税が行われた。²⁸⁾ただし、年貢運上船については免税の対象であった。²⁹⁾また、淀津に居住する石清水神人11人が所有する船11艘は「淀十一艘」とよばれ、売買船であったが免税の対象で、過書が発給されることで河川における自由通行権が与えられていた。³⁰⁾この、過書という特権を有した「淀十一艘」は、のちに石清水神人からの支配を離れて独立し、16世紀後半以降の史料に現れる過書船（淀二十石船および、三十石以上の大船）につながるものとみられている。³¹⁾

このように淀は、平安時代から形を変えながらも物流の拠点としてあり続けるが、一方で有事の際の要地としても重視され続けていた。承久の乱（承久三年（1221））の際には坊門忠信が淀に陣を置き、³²⁾観応の擾乱（観応元～三年（1350～52））の際には高師泰が足利直冬討伐のために淀辺に向かい、³³⁾山城守護代三方範忠は淀納所に守護所を置いた。³⁴⁾応仁・文明の乱（応仁元～文明九年（1467～77））の際には淀の橋が撤去され、³⁵⁾神保与三左衛門は淀古城に入城し、³⁶⁾薬師寺元一は赤沢朝経と共に細川政元を廃して細川澄元を擁立しようと企図して淀古城へ立てこもった。³⁷⁾本能寺の変の際には明智光秀軍は淀周辺まで撤退し、³⁸⁾大坂の陣の際には淀の過書船が軍用船として徴用された。³⁹⁾

淀城築城から船運の衰退まで（1623年～1960年代）元和九年（1623）に淀城の築城が始まると、水上輸送を生業としていた納所村と水垂村の一区画に、城下町である納所町と水垂町が置かれた。江戸時代以降はこの2村が淀二十石船の拠点となった。淀二十石船は、三十石船とともに、中世末以来、運上銀の免除と、淀川水上交通を独占的に支配できる権利を付加され、隆盛を極めていたが、17世紀後半以降、その特権を脅かす事態が次々に起こる。まず、寛文十年（1670）に新興の三十石船が20石積の船を約100艘新造したことで、伏見－大坂間の業務が脅かされた。また、天和三年（1683）までに六ヶ浜上荷船が出現し、木津川流域の6つの浜から出る荷物を取り扱ううえで競合となった。さらに、元禄十二年（1699）には新たに伏見船が荷物・旅客運送に従事する許認可を得て、十五石船200艘が新造された。これにより、桂・宇治・木津川および淀川流域における業務が脅かされた。それら船運業者とはたびたび訴訟沙汰となったが、結局、淀二十石船の意見は認められず、以後は競合に脅かされながら船運業を続けることになった。⁴⁰⁾とはいえ、幕府にとって淀とその船運は重要であり続けた。江戸時代を通して計12回、朝鮮通信使が来日しているが、そのうち10回は、瀬戸内から船で淀川を遡上して納所町の唐人雁木で船を降り、陸上交通に切り替えて江戸へと向かった。淀城下では、朝鮮通信使が通過するたびに迎接が行われており、幕府から重視されていた場所であることがわかる。⁴¹⁾

しかし、近代に入ると、淀の船運はますます苦境に立たされていく。まず明治元年（1868）に川船の特権制度が廃止された。同年には木津川の流路が大きく付け替えられ、船業を脅かした。明治四年（1871）には淀藩が廃藩となり、船の管轄が京都府に移管された。明治二十九年（1896）から

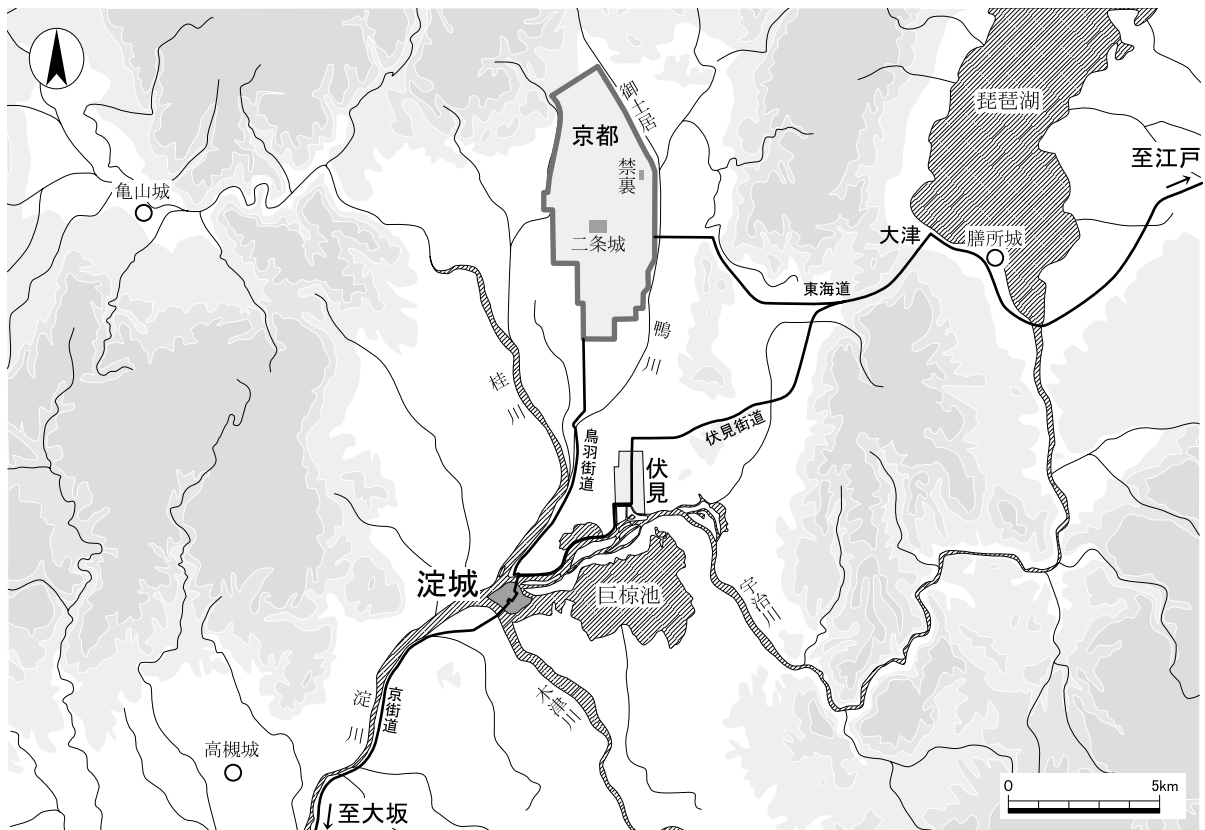


図11 近世淀とその周辺（1：250,000）

は桂川の河川改修工事が始まり、水垂村は大下津村とともに約200m西の新堤防上へ全面移転、船業に大打撃を与えたことが想定される。明治四十三年（1910）には宇治川の付け替えが行われ、納所町と旧淀城内が地続きとなった。同年には納所から旧淀城内を縦断するように京阪電車が開通し、水上輸送業に打撃を与えた。昭和八年（1933）からは巨椋池の干拓事業が始まり、同十六年（1941）に完了する。こうした中でも、水垂では船業を続けている人がまだ少なからず存在した。戦後になると、埋立地、建設現場、公園などで使用するバラス（川砂）の需要が高まり、桂川や木津川で採取が行われたが、過度の採取によって川の水位が下がり、周辺の田などに引水できなくなったため、昭和三十六年（1961）に桂川で、昭和四十年（1965）に木津川で採取が禁止された。それが最終的な引き金となり、納所・水垂での船業は終焉を迎えた。⁴²⁾

平成十八年（2006）には、国土交通省による桂川引堤事業に伴い、淀水垂村（旧水垂村）は淀大下津町（旧大下津村）とともに約100m西の新堤防上へ2度目の全面移転を行い、現在に至る。

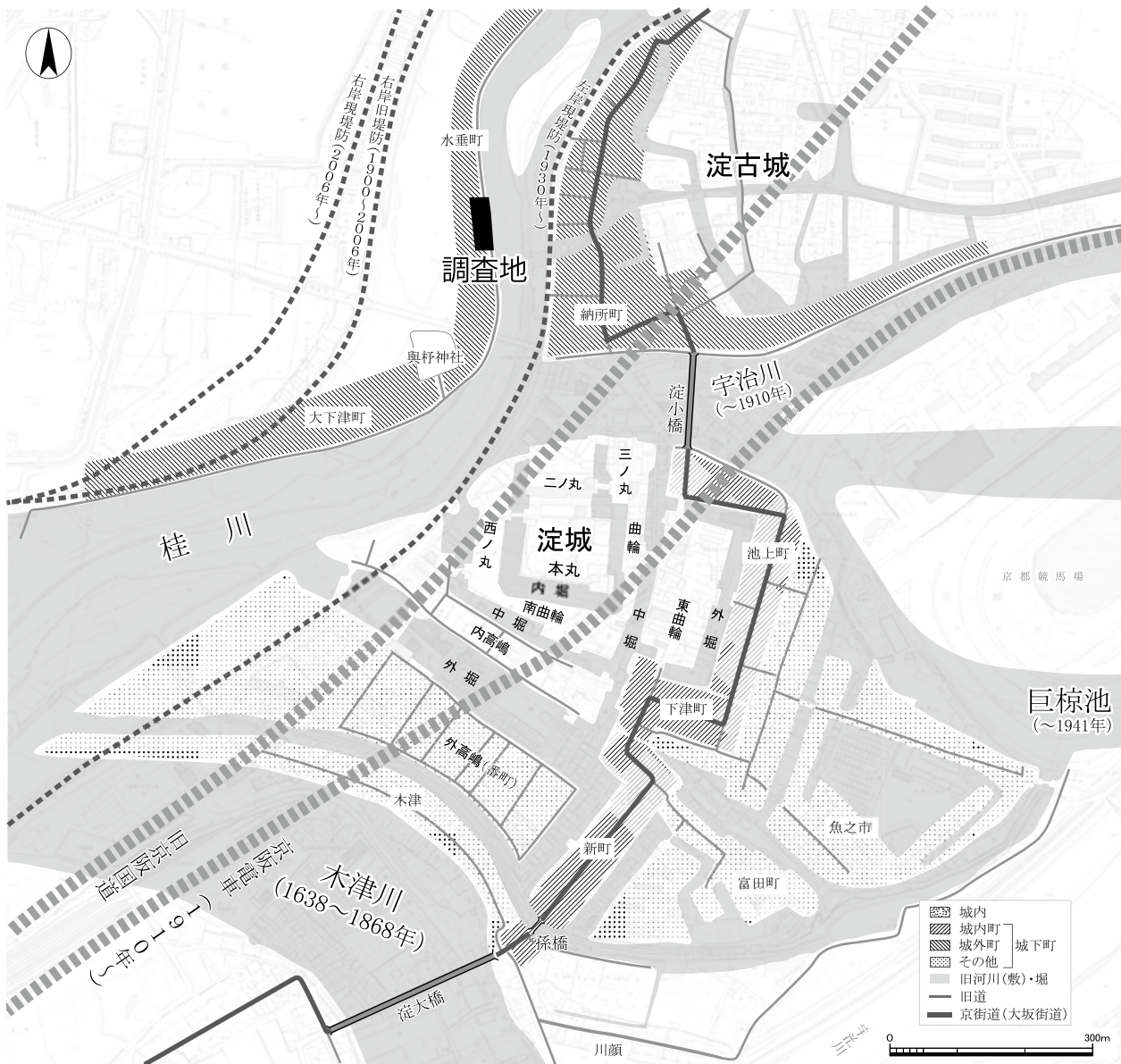


図12 近世・近代の淀（1：10,000）

(3) 周辺調査 (図13)

今回の調査地周辺で、遺構が検出された調査について、その概要を述べる。

桂川右岸 (淀水垂町・淀大下津町) の調査

平成24年(2012)の試掘調査では、近世以降の石組遺構(2012-3区)や石列(2012-5・7区)、護岸(2012-9区)などを検出した。⁴³⁾

平成26年(2014)の詳細分布調査では、明治時代以前の石積や護岸捨石、杭列を確認した。⁴⁴⁾

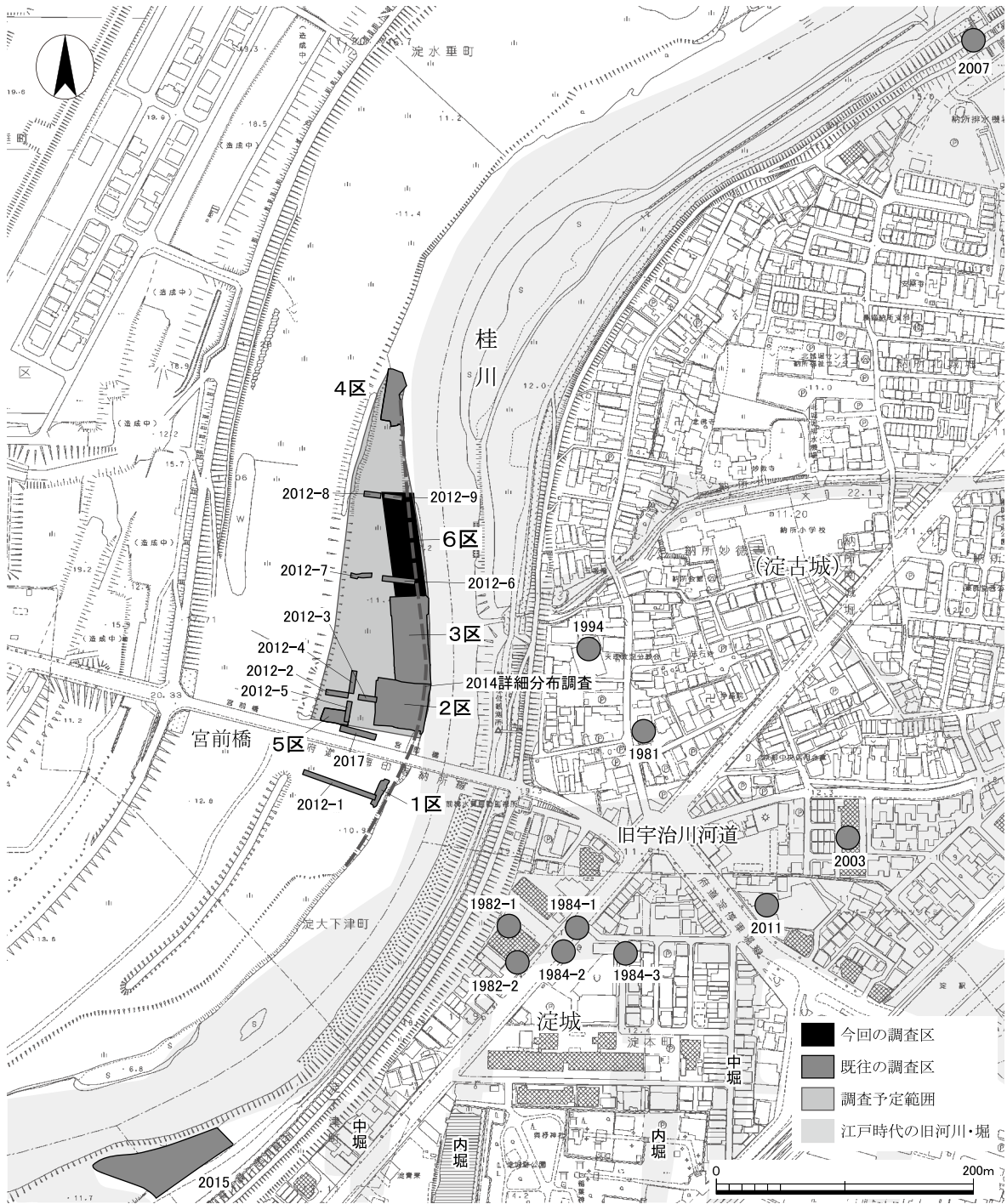


図13 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

平成29年(2017)の発掘調査では、江戸時代前期の溝と道路を検出した。⁴⁵⁾

令和3・4年(2021・2022)の発掘調査は、今回調査の契機となった淀川河川事務所による桂川大下津地区他掘削工事に伴う調査であり、本事業の1・2次調査にあたる。この一連の調査によって、調査地に弥生時代から明治時代に至る遺跡が存在することが初めて明らかとなった。⁴⁶⁾

旧宇治川右岸(納所町)の調査

昭和56年(1981)の試掘立会調査では、江戸時代の包含層を確認した。⁴⁷⁾

平成6年(1994)の試掘調査では、北面する東西方向の石垣を検出した。石垣の北側には青灰色泥土が堆積しており、池や堀の可能性が指摘されている。⁴⁸⁾

平成15年(2003)の試掘調査では、旧宇治川の河川敷を確認した。⁴⁹⁾

平成19年(2007)の立会調査では、時期不明の石垣と飛鳥時代(7世紀中頃)の竪穴建物を検出した。⁵⁰⁾

旧宇治川左岸(淀本町～淀木津町)の調査

昭和57年(1982)の試掘調査では、旧宇治川に関連するとみられる堆積土を確認した。⁵¹⁾

昭和59年(1984)の立会調査では、淀城二ノ丸北端石垣(1984-3)と、その北側に広がる旧宇治川堆積土(1984-1・2)を確認した。⁵²⁾

平成23年(2011)の試掘調査では、旧宇治川の堆積土を確認した。⁵³⁾

平成27年(2015)の発掘調査では、淀城内高嶋に築かれた池、暗渠、石垣を確認した。⁵⁴⁾

註

- 1) 浅井良亮・大邑順三・植村善博「京都市淀、水垂・大下津地域における治水・水害氏と淀川改良工事」『京都歴史災害研究』第14号 立命館大学歴史都市防災研究所 2013年 29～39頁
- 2) 『日本後記』延暦二十三年(804)七月二十四日条
- 3) 『延喜式』主税項
- 4) 『小右記』長和二年(1015)六月十二日条、治安三年(1023)七月二十日・八月五日・八月九日条
- 5) 「衛府番長等上日並注進」『北山抄紙背文書』長保元年(999)四月十四日、『権記』長保二年(1000)九月二十六・二十八日条、「右衛門府解」『九条家本延喜式卷12裏文書』長元四年(1031)一月二十三日
- 6) 『権記』寛弘四年(1007)十一月十日条、『高野御幸記』永承三年(1048)十月十一日条
大村拓生『中世京都首都論』吉川弘文館 2006年 pp163-164
- 7) 「淀相模窪領在家所課注文案」『愚昧記紙背文書』長承三年(1134)四月条、『愚昧記』治承元年(1179)九月二十六日条
- 8) 『兵範記』保元三年(1158)三月二十二日条
- 9) 『帥記』承暦五年(1080)三月条、『本朝世紀』久安三年(1147)二月二十二日条ほか
- 10) 『日本紀略』大同五年(810)九月十一日条、『本朝世紀』天慶二年(839)四月二十九日条、『師守記』貞和三年(1347)十二月十七日条が引用する某史料の天慶三(840)年八月二十七日条
- 11) 『日本三代実録』貞観十六年(874)十二月二十六日条、『平信親記』天延二年(974)閏十月二十五・二十六日条ほか

- 12) 『高野御幸記』永承三年（1048）十月十一日条
- 13) 『兵範記』仁安三年（1168）八月十五日条、『玉葉』治承二年（1178）十月二十八日～十一月四日条
大村前掲書 p.164
- 14) 大村前掲書 p.167・172
- 15) 『吾妻鑑』建久元年（1090）六月九日条、『中右記』永久二年（1114）九月十四日条ほか
- 16) 網野善彦『日本中世非農業民と天皇』岩波書店 1984年
- 17) 「伊予国弓削島庄年貢大塩支配状」『東寺百合文書』と函42 永仁四年（1296）三月四日ほか
- 18) 「明仏かゑせに状」『安芸巖島神社反古経裏文書』応長元年（1311）七月十二日、「碓井封梶取起請文」
『東大寺文書』暦応四年（1341）五月二十四日、「淀問皆阿弥借用状」『東大寺文書』4-75 観応二年
（1351）三月ほか
- 19) 『親元日記別録』文明十四年（1482）条
- 20) 「安居頭差符」『石清水八幡宮記録』28 天文十三年（1544）七月六日条
- 21) 「筑前国金生封年貢米結解状」『東大寺文書』4-44 大治四年（1129）三月二十八日
- 22) 「伊予弓削嶋莊問丸申詞」『東寺百合文書』と函36 正応五年（1292）十月十四日
- 23) 『高神社文書』文永八年（1271）二月、「尋常大僧正記」『大乘院寺社雜事記』文明十八年（1486）十
月二十八日条
- 24) 『駒井日記』文禄三年（1594）三月条
- 25) 泉雄照正「淀船史考」『地方史研究』第15巻第4号 地方史研究協議会 1965年 p.10
- 26) 『納所村役場文書』慶長三年（1598）八月十九日、「過書座二十石船由緒書」慶長三年（1598）条
- 27) 泉雄前掲書 pp11-12
- 28) 『妙槐記』弘長元年（1264）七月九日条が引用する某史料の建長元年（1249）二月二十五日条ほか
- 29) 「東寺十八口供僧評定事書」『東寺百合文書』ル函 嘉元四年（1306）九月
- 30) 『建内記』文安元年（1444）十二月十五日条
- 31) 泉雄前掲書 p.10
- 32) 『吾妻鏡』承久三年（1221）六月十二日条
- 33) 『祇園執行日記』2 貞和六年（1350）六月二十一日条
- 34) 『看聞日記』応永二十五年（1418）十一月一日条
- 35) 『大乘院寺社雜事記』応仁元年（1467）六月八日条
- 36) 『東院年中行事記』文明十年（1478）八月十一日条
- 37) 『長享年後畿内兵乱記』永正元年（1504）九月四日条
- 38) 『多聞院日記』3 天正十年（1582）六月十二日条
- 39) 「淀城普請并船役之儀覚書」『稻葉神社文書』寛永七年（1630）十二月二十三日（淀温故会『淀領引継
文書集』1990年 p.138）
- 40) 泉雄前掲書
泉雄照正「伏見船考」『地方史研究』第16巻第5号 地方史研究協議会 1966年
田中淳一郎「江戸時代前期の木津川水運」『山城郷土資料館報』第9号 山城郷土資料館 1991年
古瀬誠三「宇治屋」文書から見た木津川舟運」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 財団法人京都府埋
蔵文化財調査研究センター 1996年
- 41) 小林大祐「朝鮮通信使と淀城下町」『淀の歴史と文化』西川幸治編 1994年 pp56-63

- 42) 塩見嘉久・大塚活美「聞き取り；京都府内の河川水運」『京都文化博物館研究紀要第3集 朱雀』京都文化博物館 1990年 pp125-128
 佛教大学歴史学部『伏見区水垂・納所の環境と歴史・民俗 2013年度歴史学部地域調査演習報告書』2014年
- 43) 「Ⅵ 試掘調査一覧 No.125・126」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局 2013年
- 44) 馬瀬智光「Ⅳ-7 長岡京左京九条三坊三・四・六町跡・淀水垂大下津町遺跡(14A00 4)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年
- 45) 金島恵一『長岡京左京九条三坊四町・淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2017-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 46) 松永修平・柏田有香・中谷正和『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2021-16 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年
 松永修平・柏田有香・三好孝一『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2023-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2025年
- 47) 『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化市民局 1982年
- 48) 長谷川行孝「Ⅷ 長岡京左京九条三坊跡 No.19」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成6年度』京都市文化市民局 1995年
- 49) 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 50) 『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
- 51) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化市民局 1983年
- 52) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化市民局 1985年
 久世康博「長岡京左京九条四坊,淀城跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 53) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 54) 鈴木久史「Ⅹ 長岡京跡第583次・淀城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 2016年

3. 遺 構

(1) 基本層序と調査区の地形区分（図14～16）

既往の調査によって、調査地では弥生時代中期から明治時代に至る複数の遺構面が確認されている。調査区ごとに各遺構面と時期の対応関係が異なるため、調査地の時期をⅠ期からⅪ期に区分した。以下の報告では遺構面と時期を第○面〔△期〕と表記する。

時期区分は2次調査報告の設定に従い、Ⅰ期が江戸時代後半から明治時代、Ⅱ期が江戸時代前半、Ⅲ期が室町時代末から安土桃山時代、Ⅳ期が室町時代後葉、Ⅴ期が室町時代中葉、Ⅵ期が平安時代後期から鎌倉時代、Ⅶ期が平安時代前期から中期、Ⅷ期が奈良時代、Ⅸ期が古墳時代後期から飛鳥時代、Ⅹ期が古墳時代初頭、Ⅺ期が弥生時代中期から後期とする。

各調査区の層序との対応は、図14の柱状図に記した。

今回調査した6区は、南北約81m、東西約24mの調査区である。調査区の東側が現在の桂川の低水路に接しており、敷地内の地形が東西方向で異なる（図15）。西部は現在の桂川の高水敷にあたり、桂川による浸食の影響が小さく各時期の遺構面が遺存している。東部は現在の桂川低水路側の河岸部に位置しており、桂川による浸食の影響によってⅢ期以前の遺構面が削平されている。以下、この地形区分に従い、それぞれの基本層序を記す。

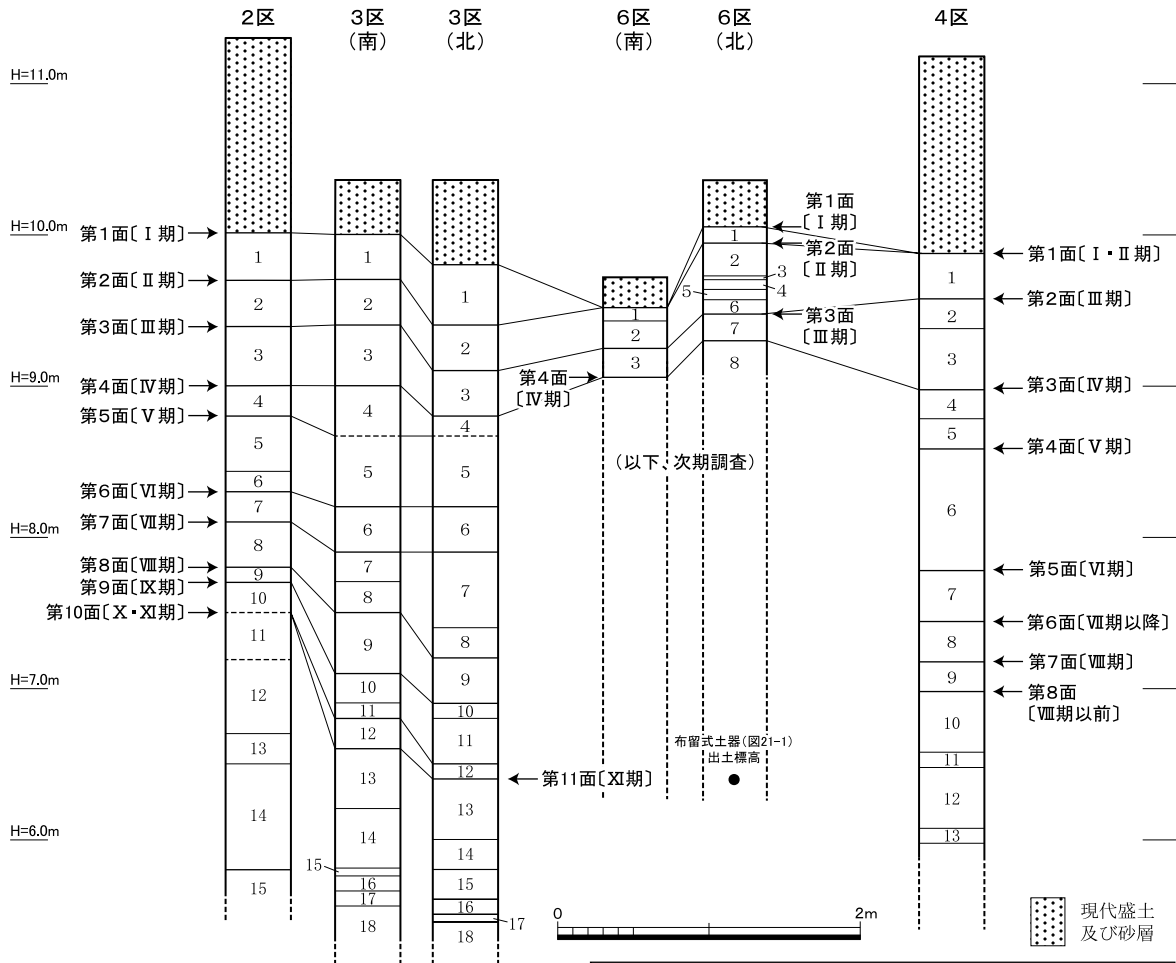
〔調査区西部〕

現在の桂川の高水敷にあたる。現地表面の標高は北端が約10.2m、南端が9.8mである。全体として、北西から南東に向かって降る勾配をもつ。調査区の北半は2・3区の上段に相当する平坦部がある。調査区の南半は、2・3区の下段に相当する近現代の削平部があり、その部分の遺構面や河岸法面は大きく削り取られている。

確認された遺構は、室町時代中葉から後葉（Ⅳ期）は溝6130-Ⅱ・6394などがある。室町時代後葉から安土桃山時代（Ⅲ期）では、溝6225・6130-Ⅰ・6582による区画内に、建物6277、礎石列

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
室町時代中葉～後葉 (Ⅳ期)	溝6130-Ⅱ(古段階・新段階)・6394、溝状遺構6550	
室町時代後葉～ 安土桃山時代 (Ⅲ期)	建物6277、礎石列6131、柱穴列6203・6332・6411、 石列6250・6280、石組遺構6180、土坑6292、 溝6225・6130-Ⅰ・6582	
江戸時代前半 (Ⅱ期)	建物6184・6209、礎石列6125、柱穴列6098、礫敷6075、 水溜6046・6047、畦状高まり6044、溝6167・6657、 土留6300・6301、石組遺構6004・6010・6100・6385、 護岸6650～6652、河川堆積6656	石組遺構・土留から 川船が出土
江戸時代後半～ 明治時代 (Ⅰ期)	建物6051、礎石列6057、柱穴列6039・6078・6181・6208、 石列6041・6045、粗朶沈床状遺構6036、石組遺構6070、 溝6037、集石6003・6653、護岸6005・6102・6136、 高まり6002、石積6001、水制6101、河川堆積4654・4655	



2区

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭・土師器片含(第1面整地層)
- 2 2.5Y5/4黄褐色シルト 炭・土師器片含(第2面整地層)
- 3 10YR4/6褐色シルト 炭・土師器片含(第3面整地層)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 炭・土師器片含(第4面整地層)
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色シルト(第5面整地層)
- 6 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 土師器片含
- 7 2.5Y5/4黄褐色シルト 奈良時代頃の土師器出土(第6面基盤層)
- 8 2.5Y4/6オリーブ褐色粘土(第7面基盤層)
- 9 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 炭中量含(第8面基盤層)
- 10 5Y4/1灰色粘土(第9面基盤層)
- 11 5Y2灰オリーブ色シルト~粘土(第10面基盤層)
- 12 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 炭少量含
- 13 5Y4/2灰オリーブ色シルト 炭少量含
- 14 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト
- 15 5Y4/1灰色シルト 土壌化層

3区

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(第1面整地層)
- 2 10YR5/3黄褐色シルト(第2面整地層)
- 3 2.5Y5/4黄褐色シルト(第3面整地層)
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色シルト など(第4面整地層)
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質 など(第5面整地層)
- 6 5Y4/2灰オリーブ色シルト(第6面基盤層)
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 粘質(第7面基盤層)
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色シルト混じり極細砂 鉄分沈着
- 9 5Y3/2オリーブ黒色粘土(第8面基盤層)
- 10 10Y4/1灰色粘土混じりシルト 上位鉄分沈着 など(第9面基盤層)
- 11 7.5Y4/1灰色極細砂混じりシルト
- 12 10Y3/1オリーブ黒色シルト(第10面基盤層)
- 13 10Y2/1黒色シルト混じり粘土 土壌化進行(第11面基盤層)
- 14 10Y4/1黒色シルト混じり粘土
- 15 10Y3/1黒色粘土混じりシルト
- 16 10Y4/1黒色シルト混じり粘土 植物遺体からなるラミナ
- 17 5GY4/1暗オリーブ色シルト混じり粘土 部分的に植物遺体からなるラミナ
- 18 10Y4/1黒色粘土混じりシルト 植物遺体からなるラミナ

時期区分

I期: 江戸時代後半~明治時代	VI期: 平安時代後期~鎌倉時代
II期: 江戸時代前半	VII期: 平安時代前期~中期
III期: 安土桃山時代	VIII期: 奈良時代
IV期: 室町時代後葉	IX期: 古墳時代中期~飛鳥時代
V期: 室町時代中葉	X期: 古墳時代初頭
	XI期: 弥生時代中期~後期

4区

- 1 10YR5/2灰黄褐色シルト~細砂 炭・焼土・粗砂含(第1面整地層)
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト~極細砂 炭・焼土多量、φ1~3cmの礫含(第2面整地層)
- 3 10YR4/1褐灰色シルト 炭少量、φ1~5cmの礫少量含(第2面整地層)
- 4 10YR4/1褐灰色シルト~極細砂 炭少量含(第3面整地層)
- 5 10YR3/1黒褐色シルト 炭少量含(第3面整地層)
- 6 2.5Y3/2黒褐色シルト~極細砂(第4面整地層)
- 7 2.5Y5/1黄灰色シルト~極細砂(第5面基盤層)
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色シルト~極細砂(第6面基盤層)
- 9 2.5Y4/1黄灰色シルト~極細砂(第7面基盤層)
- 10 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト 最上部鉄分多量含(第8面基盤層)
- 11 2.5Y3/1黒褐色粘質シルト 炭化植物多量含 ラミナあり
- 12 7.5Y4/1灰色粘質シルト 炭化植物層あり ラミナあり
- 13 2.5Y3/1黒褐色粘土~シルト 炭多量含

6区(南)

- 1 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト 極細砂混 全体に小さなマンガン凝結核あり(第2面整地層)
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 極細砂混 小礫少量含 炭化物含 団粒状構造あり(第2面整地層)
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト 極細砂混(第3面整地層)

6区(北)

- 1 2.5Y5/2暗灰黄色極細砂 シルト混 固く締まる(第1面整地層)
- 2 2.5Y5/3黄褐色極細砂 シルト混 固く締まる(第2面整地層)
- 3 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 極細砂混 焼土・灰多量含(第2面整地層)
- 4 2.5Y5/3黄褐色シルト 極細砂混 固く締まる(第2面整地層)
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 極細砂混(第2面整地層)
- 6 2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 極細砂混 北部貝層あり(第2面整地層)
- 7 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 極細砂混(第3面整地層)
- 8 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土 シルト混 粘性あり(第4面)

図14 基本層序柱状図 (1:50)

6131、柱穴列6203・6332・6411、石列6250・6280などを確認した。江戸時代前半（Ⅱ期）では大規模な区画溝は確認できず、礫敷6075や畔状高まり6044などで区画された敷地（宅地）内に、建物6184・6209、礎石列6125、柱穴列6098、水溜6046・6047を確認した。江戸時代後半から明治時代（Ⅰ期）でも、Ⅱ期と同様の土地利用があり、石列6041・6045などで区画された敷地（宅地）内に、建物6051、礎石列6057、柱穴列6039・6078・6181・6208、井戸6020・6025などを確認した。なお、粗朶沈床状遺構6036は明治時代以降の遺構であり、居住域が廃絶した後に構築された可能性がある。

遺構面を良好に残す調査区西端の基本層序は、北側では現地表面から約0.4mまでが現代盛土および現代の河川堆積物の砂層が堆積する。これ以下約0.9m、標高約8.9mまではシルトを主体とし炭や土器片が混じる人為的な盛土による整地層である。

一方、調査区西部の南側では、現地表面から約0.2mまで現代盛土および現代の河川堆積物が堆

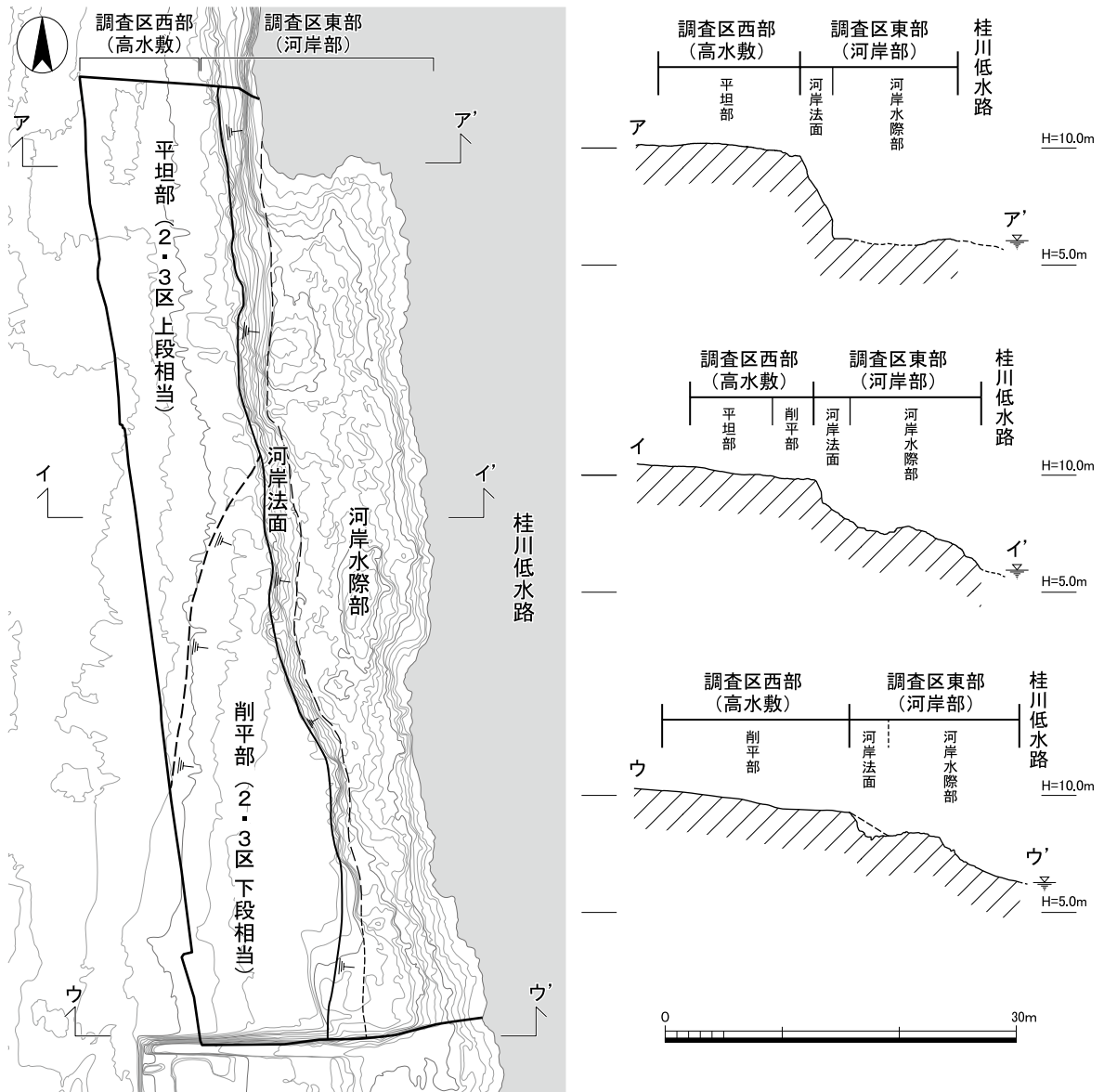


図15 6区地形区分図（1：600）

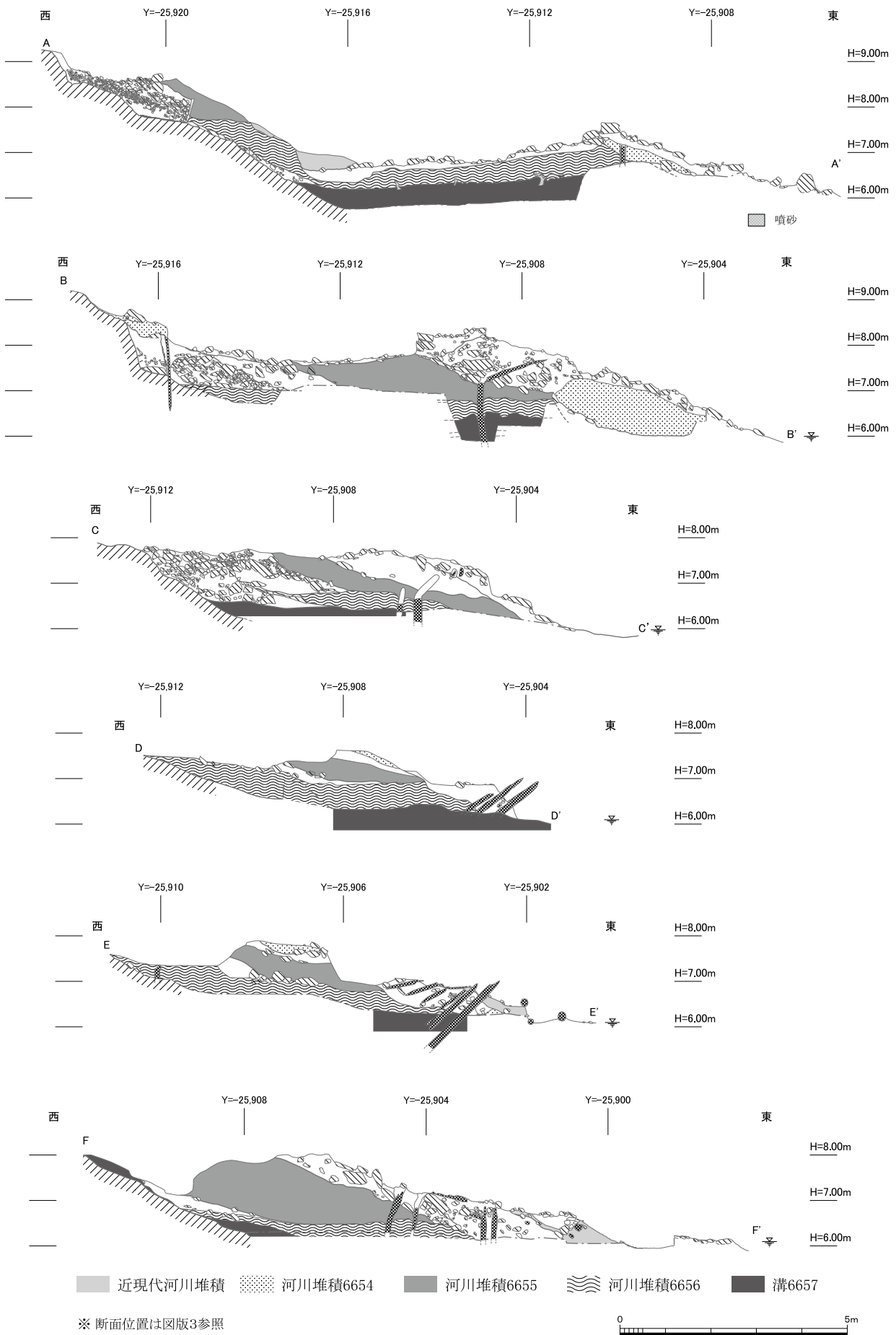


图16 河岸模式图 (1 : 120)

積する。これ以下標高約9.1mまではシルトを主体とし炭や土器片が混じる人為的な盛土による数層の整地層によって複数面の遺構面が形成される。

調査では標高約9.9mで第1面〔Ⅰ期〕、標高約9.7mで第2面〔Ⅱ期〕、標高約9.5mで第3面〔Ⅲ期〕、標高約9.2mで第4面〔Ⅳ期〕とした。なお、調査区南側の削平部では、第1面〔Ⅰ期〕は確認できず、第2面〔Ⅱ期〕も上部が削平されていた。また、調査区北側の平坦面では、第1面〔Ⅰ期〕から第2面〔Ⅱ期〕では複数の整地層が累重しており、同時期であっても区画毎に遺構面の標高が異なっていた可能性が高い。

第5面〔Ⅴ期〕以下は令和6年10月からの次期調査で行う予定である。

〔調査区東部〕

現在の桂川河岸部にあたる。各遺構面の基盤となる整地層やシルト層を、桂川による浸食または溝の掘削に伴う削平などで形成された河岸法面と、桂川から供給された砂利や石、溝の埋土が堆積して護岸・水制の基盤層となる河岸水際部からなる。

確認された遺構は、江戸時代前半（Ⅱ期）では溝6657、石組遺構6004・6010・6100・6385、土留6300・6301、護岸6650～6652がある。江戸時代後半から明治時代（Ⅰ期）は、護岸6005・6102・6136、石積6001、集石6003・6653、水制6101などがある。

河岸法面の天端から河岸水際部までの現在の比高は約3mある（図16）。基本層序は、現地表面から標高約6.3mまで、近現代の護岸構築土および河川堆積層、河川堆積6654〔Ⅰ期〕、河川堆積6655〔Ⅰ～Ⅱ期〕、河川堆積6656〔Ⅱ期〕と区分できる。いずれも桂川から供給されたシルト～粗砂を主体とする河川堆積物であり、ラミナを確認した（図版75-1）。河川堆積6655では一部土壌化している箇所があることから、今回の報告で一つのまとまりとした河川堆積層であっても、一定の時間幅をもって形成された可能性が高い。また、A-A'セクションの河川堆積6656では、噴砂の貫入を確認した（図版37・75-2）。

標高約6.3m以下は溝6657〔Ⅱ期〕の埋土である。グライ化したシルト～細砂を主体とする閉鎖環境下の堆積物であり、ラミナは確認できない。

調査では標高約6.6mを第1面、標高約6.5mを第2面とした。部分的に断割調査を実施して堆積環境の把握に努めたが、標高約5.6m以下は湧水のため調査は行っていない。

（2）Ⅳ期（室町時代中葉から後葉）の遺構（図版1・63・64）

〔調査区西部〕

溝や柱穴、土坑を確認した。溝はいずれも掘り直されている。柱穴から建物を復元することはできなかった。

溝6394（図版9・64）削平部の南側で検出した東西方向の溝である。東側は攪乱で失われており、西側は調査区外に続く。掘り直しがあり、古・新段階に分かれる。

古段階の検出規模は、長さ約12.6m、幅約2.6m、深さ約1.6mある。底面の標高は、西側で7.3mある。方位は西に対し約1.1度北に振る。新段階の検出規模は、長さ約11.7m、幅約2.4m、深さ約

1.0 mある。底面の標高は、西側で7.6 mある。方位は西に対し約9.2度北に振る。

溝6130- II (図版9・64) 削平部の中央で検出した東西方向の溝である。上面は溝6130- Iに、東側および南肩は攪乱で失われており、西側は調査区外に続く。掘り直しがあり、古・新段階に分かれる。

古段階の検出規模は、検出長約11.4 m、幅約5.2 m、深さ約2.1 mある。底面の標高は西側で6.9 mある。方位は西に対し約1.1度北に振る。新段階の検出規模は、長さ約10.0 m、幅約2.2 m、深さ約1.1 mある。底面の標高は西側で7.7 mある。方位は西に対し約1.1度北に振る。

溝状遺構6550 (図版4～8・63) 平坦部の北側から中央にかけて検出した南北方向の溝状遺構である。北側・南側は調査区外に続く。調査では貝殻や礫混じりの埋土が帯状に分布していたため溝状遺構としたが、掘形が不明瞭であり、整地層の一部となる可能性がある。検出規模は長さ約47.5 m、幅4.8～7.0 m、深さ約1.0 mある。底面の標高は、北側・南側ともに約8.4 mある。方位は北に対し約5.2度東に振る。

(3) Ⅲ期 (室町時代後葉から安土桃山時代) の遺構 (図版1・65～67)

[調査区西部]

溝や掘立柱建物、礎石列、柱穴列、石組遺構、土坑を確認した。

建物6277 (図版10) 平坦部の南側で検出した2間×1間以上の掘立柱建物である。規模は東西約5.2 m、南北約4.5 mある。方位は西に対し北に約6.0度北に振る。柱穴の掘形は、平面形が円形で検出規模は直径0.3～0.5 m、深さ0.15～0.25 mある。柱穴6277・6384・6397の掘形底面には幅0.2～0.3 m、厚さ約0.1 mの礎石を据える。

礎石列6131 (図版11) 削平部の北側で検出した東西方向の礎石列である。柱間は約2.8 mある。方位は西に対し約2.0度北に振る。掘形は、平面形が円形で検出規模は直径0.25～0.5 m、深さ0.1～0.15 mある。礎石の大きさは、幅0.15～0.5 m、厚さ0.1～0.15 mある。

柱穴列6203 (図版11) 平坦部の中央で検出した東西方向の柱穴列である。柱間は2.5～2.8 mと等間隔ではない。方位は西に対し約8.0度北に振る。掘形は、平面形が円形で、検出規模が直径0.3～0.45 m、深さ0.15～0.25 mある。掘形底面には幅0.2～0.35 m、厚さ0.1～0.25 mの根石を据える。

柱穴列6332 (図版11) 削平部の北側で検出した東西方向の柱穴列である。柱間は2.0～3.4 mと等間隔ではない。方位は西に対し約4.5度北に振る。掘形は、平面形が円形で検出規模は直径0.35～0.55 m、深さ0.05～0.1 mある。柱穴6332・6353の掘形底面には幅0.1～0.3 m、厚さ約0.1 mの根石を据える。

柱穴列6411 (図版12) 削平部の北側で検出した東西方向の柱穴列である。柱間は0.3～1.8 mと等間隔でない。方位は西に対し約1.0度北に振る。掘形は、平面形が円形で、検出規模が直径0.25～0.35 m、深さ0.15～0.25 mある。掘形底面には幅0.2～0.3 m、厚さ約0.1 mの根石を据える。

石列6250 (図版12・65) 削平部の北側で検出した東西方向の石列である。方位は西に対し約0.3度北に振る。掘形はなく、幅0.1～0.3 m、厚さ0.1～0.2 mの石材を並べる。

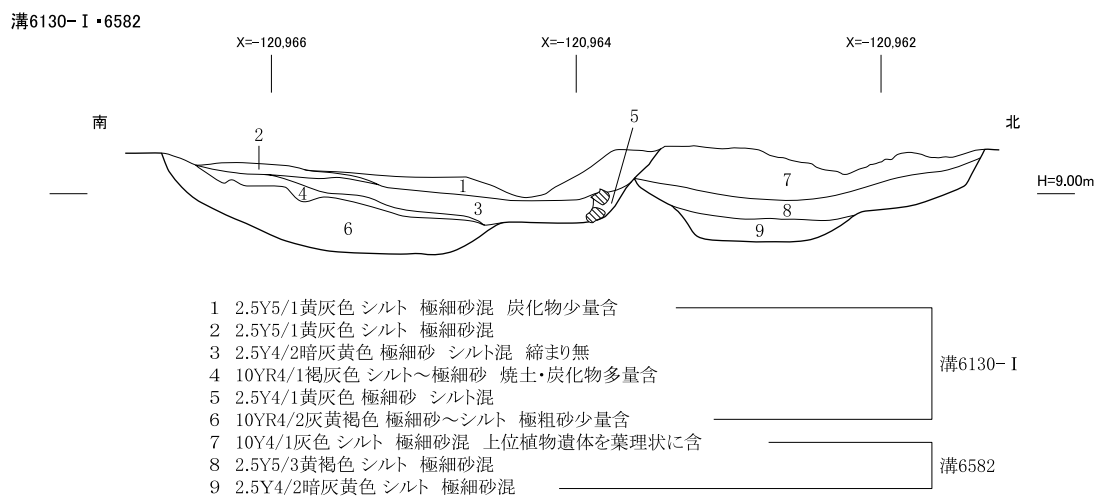
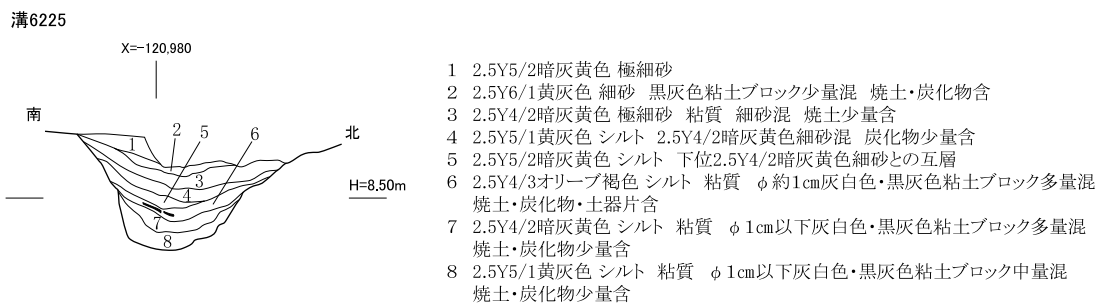
石列6280（図版12・65） 削平部の北側で検出した東西方向の石列である。方位は西に対し約1.3度北に振る。掘形はなく、幅0.1～0.3m、厚さ0.1～0.2mの石材を並べる。

石組遺構6180（図版12・66） 平坦部の中央で検出した。西側の水溜部と東側の樋部で構成される。平面規模は東西約1.8m、南北約1.1mある。水溜部は、直径約0.9m、深さ約0.5mの皿状に掘り窪めた落込の肩口に沿って、幅0.15～0.3mの石材を並べる。樋部は、幅0.15～0.3mの石材を東西方向に並べた石列2条で構成される。石列の西端は、水溜部の東端肩口と接する。2つの石列には約0.1mの間隔があり、その最東端には凹面を上に向けた丸瓦を設置する。標高は丸瓦東端が9.60m、同西端が9.56m、樋部と水溜部の接点が9.50m、水溜部底面が9.43mあり、東から西に降る傾斜をもつ。遺構は、樋部に流した水を水溜部に一時的に溜める施設と考えられる。

土坑6292（図版12・66） 平坦部の中央で検出した集石土坑である。平面形は円形で、検出規模は直径約1.2m、深さ0.25mある。土坑内部に直径5～25cmの礫を多量に充填する。

溝6225（図17、図版67） 削平部の南側で検出した東西方向の溝である。河岸法面より東側は削平されており、西側は調査区外に続く。検出規模は長さ約11.3m、幅約1.4m、深さ約0.8mある。底面西側の標高は8.2mである。方位は西に対し約0.2度北に振る。

溝6130- I（図17、図版67） 削平部の中央で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外に続き、東側は後世の攪乱で失われている。検出規模は長さ約10.7m、幅3.3m、深さ約0.7mある。



※ 断面位置は図版4参照



図17 溝6225・6130- I・6582断面図（1：50）

底面の標高は西側で約8.6mある。方位は西に対し約1.4度北に振る。北肩中位の平坦部分で、溝に沿う石列を確認した。石列は検出長3.5mあり、西側は調査区外に続く。径0.1～0.2mの石材を並べて構築する。

溝6582 (図17、図版67) 削平部の中央で検出した東西方向の溝である。河岸法面より東側は削平されており、西側は調査区外に続く。検出規模は長さ約9.2m、幅約2.3m、深さ約0.6mある。底面の標高は、西側で8.7mある。方位は西に対し約1.4度北に振る。

(4) II期(江戸時代前半)の遺構(図版2・68～75)

[調査区西部]

溝や礫敷、畦状高まりによる敷地(宅地)区画と、その内部に掘立柱建物や礎石列、柱穴列、水溜を確認した。なお、区画毎に整地が繰り返されているため、それぞれの敷地区画における遺構面では、標高に若干の高低差がある。

建物6209 (図版13) 平坦部の北側で検出した掘立柱建物である。西側は調査区外に続く。平面規模は東西6.4m以上、南北5.2mある。方位は正方位である。柱間は0.5～2.9mと等間隔ではない。柱穴の掘形は、平面形が円形または隅丸方形で、検出規模は直径0.3～0.7m、深さ0.2～0.7mある。柱穴6212を除く、すべての柱穴の掘形底面には幅0.1～0.4m、厚さ0.1～0.2mの礎石を据える。

建物6184 (図版14・68) 平坦部の中央で検出した1間×1間の掘立柱建物である。調査区西側に建物が延長する可能性がある。平面規模は東西約2.1m、南北約2.6mあり、方位は正方位である。柱穴の掘形は、平面形が円形または隅丸方形で、検出規模が直径0.4～0.5m、深さ0.1～0.3mである。柱穴6184の掘形底面には幅0.2～0.3m、厚さ約0.1mの礎石を据える。

柱穴列6098 (図版14) 平坦部の中央で検出した東西方向の柱穴列である。柱間は1.3～1.7mと等間隔ではない。方位は西に対し約2.5度北に振る。掘形は、平面形が円形で、検出規模が直径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mある。掘形底面には幅0.2～0.3m、厚さ約0.15mの根石を据える。

礎石列6125 (図版15) 平坦部の中央で検出した、布掘り掘形を持つ東西方向の礎石列である。西側は調査区外に続き、東側は削平により失われる。礎石の大きさは幅0.1～0.5m、厚さ0.1～0.2mある。間隔は0.35～0.6mである。方位は西に対し約4.1度北に振る。布掘り掘形は、長さ約3.4m、幅約0.9m、深さ約0.1mある。礎石掘形は平面形が円形を呈する。検出規模は、直径0.2～0.5m、深さ0.05～0.1mある。礎石掘形および布掘り掘形の埋土は黄灰色シルトで、礎石の周囲にはオリーブ褐色シルトを敷き固めた化粧が認められた。

礫敷6075 (図版15・68) 平坦部の中央で検出した。礎石列6125を改築した遺構である。検出規模は長さ約3.4m、幅約1.3m、深さ約0.2mある。直径0.05～0.15mの円礫を敷き詰めている。方位は西に対し約1.9度北に振る。礫敷の南端に石列を配する。石材は長軸0.2～0.3m、短軸0.15～0.2m、厚さ約0.2mある。改築の際には南側の敷地に約0.1m厚の整地を施す。なお、礫敷6075南端の石列はI期整地層によって完全に埋没しておらず、江戸時代後半でも敷地境界として機能したと考えられる。

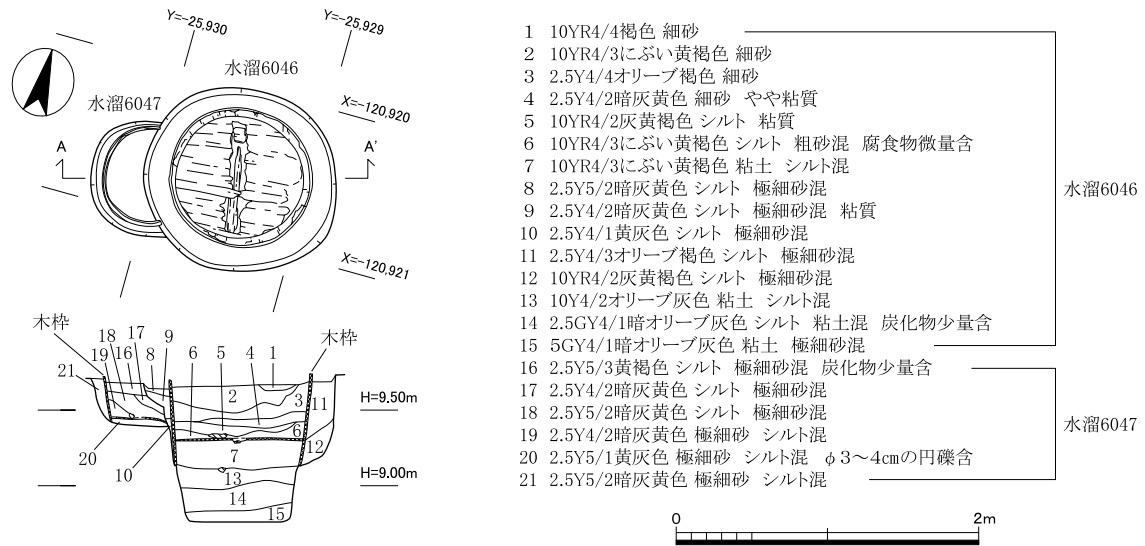


図18 水溜6046・6047実測図（1：50）

水溜6046・6047（図18、図版68）平坦部の中央で検出した。水溜6046が、水溜6047の一部を削平している。水溜6046は、桶の大きさが直径約0.95m、残存高約0.6mで、掘形の規模が直径約1.3m、深さ約0.9mある。水溜6047は、桶の大きさが直径約0.65m、残存高約0.3mで、掘形の規模が直径約0.75m、深さ約0.3mある。

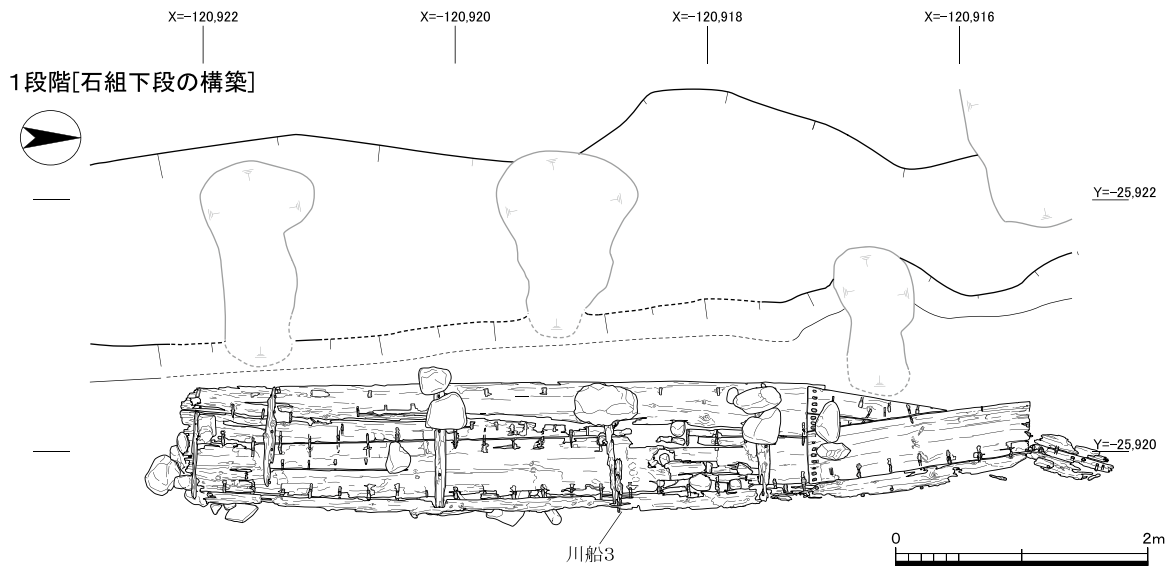
畦状高まり6044（図版5・6）平坦部の北側で検出した東西方向の高まりである。検出規模は、長さ約5.3m、幅約2.2m、高さ約0.35mある。方位は西に対し約2度北に振る。宅地境界とみられる。当遺構はI期整地層によって完全に埋没しておらず、江戸時代後半でも機能し続けていた可能性がある。

溝6167（図版5・6）平坦部の中央で検出した東西方向の溝である。検出規模は、長さ約6.8m、幅約1.0m、深さ約0.8mある。検出時に板材を杭で留めた痕跡を確認した。北肩が護岸されていた可能性がある。

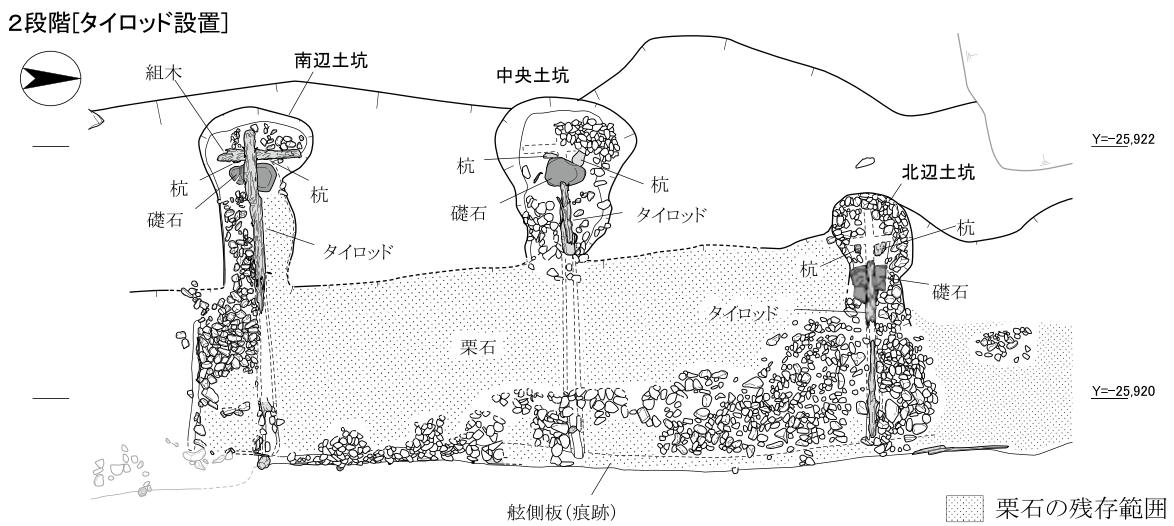
【調査区東部】

河岸水際部で溝、河岸法面で土留と護岸、石組遺構を検出した。石組遺構は雁木や簡易な建物施の基礎となる可能性がある。土留と護岸、石組遺構は、溝6657上で構築される護岸6651や石組遺構6385と、河川堆積6656上で構築される護岸6650・6652、石組遺構6004・6100がある。また、北から順に並ぶ土留6301・石組遺構6010・土留6300は構築状況から一連の構造物と考えられ、河川堆積6656によって被覆されている。

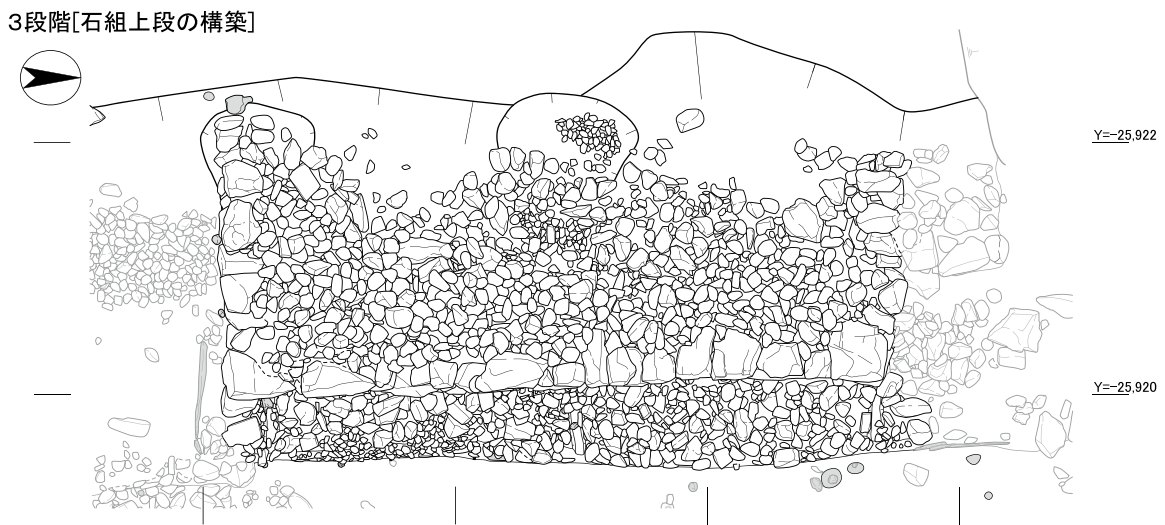
溝6657（図版37～41）河岸水際部の断割調査で確認した。A-A'セクションで西肩部を検出したが、他の個所では埋土の存在を確認したにとどまる。A-A'セクションの堆積状況から、東肩部は削平されたと考えられる。全体の規模は不明であるが、検出規模は幅9.1m以上、深さ0.5m以上ある。標高約5.6m以下は湧水が激しく調査できなかった。埋土は主にグライ化したシルトや細砂が堆積する。明瞭なラミナや河川堆積物の砂層は認められず、河川とは切り離された閉鎖的な環境で堆積したと推測される。遺物は出土していない。4区で確認した溝4030の南延長部とな



①石組下段解体後の状況



②石組上段解体後(タイロッド検出)の状況



③石組検出時の状況

図19 石組遺構6010構築過程 (1:60)

る可能性がある。

石組遺構6004（図版16・24・69） 河岸法面の北端で検出した。上部は近代攪乱の、東側は現桂川の浸食により失われ、北側は調査区外に続く。土留6301・河川堆積6656の直上に構築されている。検出規模は、東西長約6.6m、南北幅約2.6m、高さ約1.1mある。0.3～0.6mの角礫をコ字状に組んで石組とし、その裏側に直径約0.1mの円礫を充填した構造物を、半石分西側にずらしつつ、5～6段分重ねて構築されている。

石組遺構6010（図版16・25・37・70・71、図19） 河岸法面の北側で検出した。上部が攪乱されており、石組の東側は河川堆積6655・6656の堆積層が被覆している。石組の検出規模は、南北長約5.4m、東西幅約2.9m、高さ約1.4mある。石組の構築材として、石材や土砂、川船の部材や杭を用いる。また、遺構の土台となる川船を支持する木製の引張材（タイロッド）や、それらを固定する礎石・杭が出土した。当該遺構は土台となる川船が斜面下部へと沈下しないように、タイロッド工法に類する技術を用いたと考えられる¹⁾。また、北西部で長さ0.2～0.4mの垂円礫を用いた増築部を検出した（図版25）。規模は東西約0.9m、南北約0.8m、高さ約0.4mある。

当該石組の構築工程を、大きく1段階〔石組下段の構築〕→2段階〔タイロッドの設置〕→3段階〔石組上段の構築〕に復元・整理した。

1段階〔石組下段の構築〕（図19上）：河岸法面を切土してできた平坦部に、石組の土台かつ擁壁となる川船を設置し、その東外側に部材を支えるための杭を複数打ち込む。川船は船首・船尾および片側の舷側部を解体し、残存する舷側の部材が東面するように正置する（図版25：川船3）。川船の東側の船底下に幅20cm前後の角礫を部分的に並べて、船底を水平にしている。船底上に重石となる人頭大の円礫を複数個据え付け、川船の部材内部に直径4～8cmの垂円礫などを含む土砂を充填して均す（図版25：7～9層）。

2段階〔タイロッドの設置〕（図19中）：石組北辺・中央・南辺の西延長斜面に土坑を3基掘削し、それぞれにタイロッドを支持・固定するための礎石を据える。土坑は平面不定形であるが、すべて東西方向に長軸をもつ。各土坑の検出規模は、東西長0.9～1.4m、南北幅0.4～1.1m、深さ0.5～0.7mある。各土坑の底面は、1段階の7・8層上面の標高に近い。各土坑に据える礎石は、東西長約0.1m、南北幅0.3～0.4m、厚さ0.1～0.15mある。なお、南辺土坑の礎石はタイロッドと接する部分が粉碎して沈下していた（図版70-5）。礎石に大きな荷重が加わっていたと考えられる。

次にタイロッドを、土坑に据えられた礎石から、石組下段の北辺・中央・南辺を通るように、石組東端まで渡す。タイロッドには角材を用いる。大きさは長さ約2.5～2.9m、幅約0.1m、厚さ約0.1～0.15mある。タイロッドの西端は礎石上で組木と杭を用いて固定される。組木の大きさは、長さ約0.7m、幅約0.1m、厚さ約0.05mある。組木はタイロッドに穿たれた通し柄で結合される。杭は組木と根石の間に、タイロッドを挟みこむ形で、西側下方へ斜め方向に2本打ち込む。杭は、丸杭と角杭がある。角杭には転用材がある。杭の大きさは、直径0.05～0.1m、長さ0.55～0.85mある。最後に、石組下段から土坑の肩口までが埋まるように、直径4～8cmの垂円礫を含む土砂を充填し、その上面に直径4～15cmの垂円礫を並べる（図版25：5・6層）。

なお、タイロッドの東端は川船の舷側板上端と結合されていたとみられるが、その痕跡は確認できなかった。

3段階[石組上段の構築](図19下)：石組の北辺・南辺・東辺に幅0.2～0.6m、奥行0.2～0.5m、厚さ0.1～0.3mの角礫を積む。石組の北辺は北に、南辺は南に、東辺は東に面をもつ。また石組の東辺は、舷側板から0.5～0.6m西に控えた場所に構築する。その石組の内部に直径10～15cmの垂円礫を充填する(図版25：3・4層)。

石組遺構6100(図版17・26・38・73) 河岸法面の中央で検出した。北辺・南辺・東辺に石組がある。上部および北側は現代攪乱によって失われる。石組の崩落にともない修復および増築されている。増築部の東側は河川堆積6655の堆積層によって被覆されている。

増築前の石組遺構は、基盤となる河川堆積6656を掘り込んで構築する。検出規模は、南半の南北長約7.5m、東西幅約4.2m、高さ約1.0mある。北辺の石組は、幅0.2～0.5mの角礫を3段積みする。石組の内部に頁岩・粘板岩の割石を充填して栗石とする。

増築後の石組遺構は東辺が北に延長されている。検出規模は、南北長約13.9m、東西幅約4.2m、高さ約1.0mある。積み直された石組は、南辺・東辺が遺存しており、幅0.2～0.6mの角礫を2～3段積みにする。内部にはシルト～粗砂を充填する。

石組遺構6385(図版18・27・39・74) 河岸法面の北側で検出した。石組の上部および北・南側が攪乱により削平されている。溝6657埋土直上で構築されており、下端部が河川堆積6656の堆積層によって被覆されている。検出規模は、南北長約11.0m、東西幅約3.8m、高さ約1.4mある。東辺は幅0.2～0.6m、奥行0.25～0.8m、厚さ0.15～0.25mの石材を6段程度積む。裏込めとして幅0.1～0.3mの角礫を多量に充填している。石組の東側には幅0.15～0.6mの捨石がある。

土留6301(図版19・20・69) 河岸法面の北端で検出した。北側は調査区外に続く。擁壁の東側は河川堆積6657の堆積層によって被覆されている。検出規模は、南北長約12.8m、東西幅約1.1m、高さ約0.9mある。河岸法面を切土して構築している。構築材として、石材や土砂、川船の部材や杭を用いる。

土留めの土台かつ擁壁として、川船の部材を再利用している。川船は船首・船尾および片方の舷側部を解体し、残存する舷側の部材を東面させて、切土してできた平坦面に正置させている(川船1・2)。川船の東外側には、部材を支えるための杭が複数打ち込まれている。裏込めとして、直径1～2cmの円礫などを含む土砂を、再利用された川船の部材内部に充填している。石組遺構6010の北端から連続して構築されており、同時期の構造物と考えられる。

土留6300(図版20～23・38・72) 河岸法面の中央で検出した。上部と南側には攪乱があり、上部は河川堆積6654の堆積層によって被覆されている。検出規模は南北長約25.1m、東西幅約0.8m、高さ約0.3～1.5mある。河岸法面を切土して構築しており、構築材として、石材や土砂、川船の部材や杭を用いる。

川船の部材を擁壁として再利用している。擁壁の北側は川船の舷側の部材(川船4～6：図版20～22)、南側は船底の部材(川船7：図版22・23)を用いる。擁壁の東外側には、部材を支えるた

めの杭が複数打ち込まれている。擁壁背面の下部には幅0.25～0.8mの垂角礫～角礫を並べた基礎石列が構築されており、その上に擁壁の裏込めとなる直径5～15cmの垂円礫などを含む土砂が充填されている。石組遺構6010の南端から連続して構築されており、同時期の構造物と考えられる。

護岸6651（図版16・25・37） 河岸法面の北側で検出した護岸である。石組遺構6010南東で検出した。溝6657埋土直上で構築されており、河川堆積6656の堆積層によって被覆されている。断割調査で確認したため、全体の規模は不明である。検出規模は、南北長約8.8m、東西幅約2.9m、高さ約1.4mある。直径0.1～0.3mの角礫を斜面に積み上げる。傾斜角度は約25.0度ある。

護岸6652（図版16） 河岸法面の北側に位置する石組遺構6010の南東で検出した護岸である。河川堆積6656の直上に構築されている。検出規模は、長さ約15.0m、幅約2.8m、高さ約0.1mある。直径0.1～0.5mの角礫を積み上げる。傾斜角度は約4.1度ある。

護岸6650（図版18・41） 河岸法面の南端で検出した護岸である。3区北端で検出した護岸3473の北延長部である。河川堆積6656の直上で構築されており、河川堆積6655の堆積層によって被覆されている。検出規模は長さ約12.7m、幅約3.7m、高さ約1.0mある。斜面に細砂を敷いた後、直径5～10cmの円礫を積み上げる。傾斜角度は約25度である。

（5）I期（江戸時代後半から明治時代）の遺構（図版3・76～80）

〔調査区西部〕

建物6051（図版28） 平坦部の中央で検出した1間×1間の掘立柱建物である。平面規模は東西約1.6m、南北約2.5mある。方位は正方位である。柱穴掘形は平面楕円形で、検出規模が長軸0.5～1.1m、短軸0.35～0.65m、深さ0.3～0.6mある。柱穴6052・6053の掘形底面には幅0.2～0.3m、厚さ0.1mの根石を据える。柱穴6051の掘形底面には幅0.2～0.3m、厚さ約0.1mの根石を据え、その上に平瓦片を置く。柱抜取穴の埋土は炭・焼土ブロックを含む土である。

礎石列6057（図版28） 平坦部の中央で検出した東西方向の礎石列である。柱間は約3.5mある。方位は西に対し約2.5度北に振る。礎石の大きさは、幅0.3～0.5m、厚さ0.15～0.2mある。掘形はなく、礎石の周囲はI期整地層に被覆されている。

柱穴列6039（図版29） 平坦部の北側で検出した東西方向の柱穴列である。柱間は1.0～2.0mと等間隔ではない。方位は東に対し約0.3度北に振る。掘形は平面円形で、検出規模が直径0.35～0.45m、深さ0.1～0.35mある。掘形底面には幅0.2～0.35m、厚さ0.1～0.15mの根石を据える。

柱穴列6078（図版29・77） 平坦部の北側で検出した南北方向の柱穴列である。柱間は約2.0mある。方位は正方位である。掘形は平面円形で、検出規模が直径0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mある。

柱穴列6181（図版29） 平坦部の中央で検出した東西方向の柱穴列である。柱間は1.0～2.0mと等間隔ではない。方位は東に対し約3度北に振る。掘形は平面円形または隅丸方形で、検出規模が直径0.3～0.55m、深さ0.15～0.35mある。柱穴6182・6205の掘形底面には幅0.15～0.25m、厚さ0.05～0.1mの根石を据える。

柱穴列6208（図版29） 平坦部の中央で検出した東西方向の柱穴列である。柱間は2.45～2.55m

と等間隔ではない。方位は西に対し約2.5度北に振る。掘形は平面円形または楕円形で、検出規模が直径約0.4m、深さ0.2～0.3mある。柱穴6215の掘形底部には柱が残存する。

石列6041（図版5・6・77、図20） 平坦部の北側で検出した東西方向の石列である。石材はほぼ遺存しないが、溝西半で石材の抜取痕跡が確認できる。西側は調査区外に続く。方位は東に対し約2.4度北に振る。掘形の検出規模は、長さ約6.1m、幅0.4～0.55m、深さ約0.1mある。掘形底面に幅0.3m、厚さ0.15mの石材を並べた後、掘形内部をオリーブ褐色極細砂で充填する。

石列6045（図20、図版77） 平坦部の北側で検出した東西方向の石列である。方位は西に対し約0.8度北に振る。掘形の検出規模は、長さ約5.9m、幅0.4～0.55m、深さ約0.2～0.4mある。掘形底面に幅0.3～0.5m、厚さ0.15mの石材を並べた後、掘形内部をオリーブ褐色極細砂で充填する。石材の周囲はI期整地層で被覆されている。

石組遺構6070（図20、図版77） 平坦部の中央で検出した。掘形は平面不定形で、検出規模が0.9～1.4m、深さ0.3mある。遺構の性格は不明である。²⁾

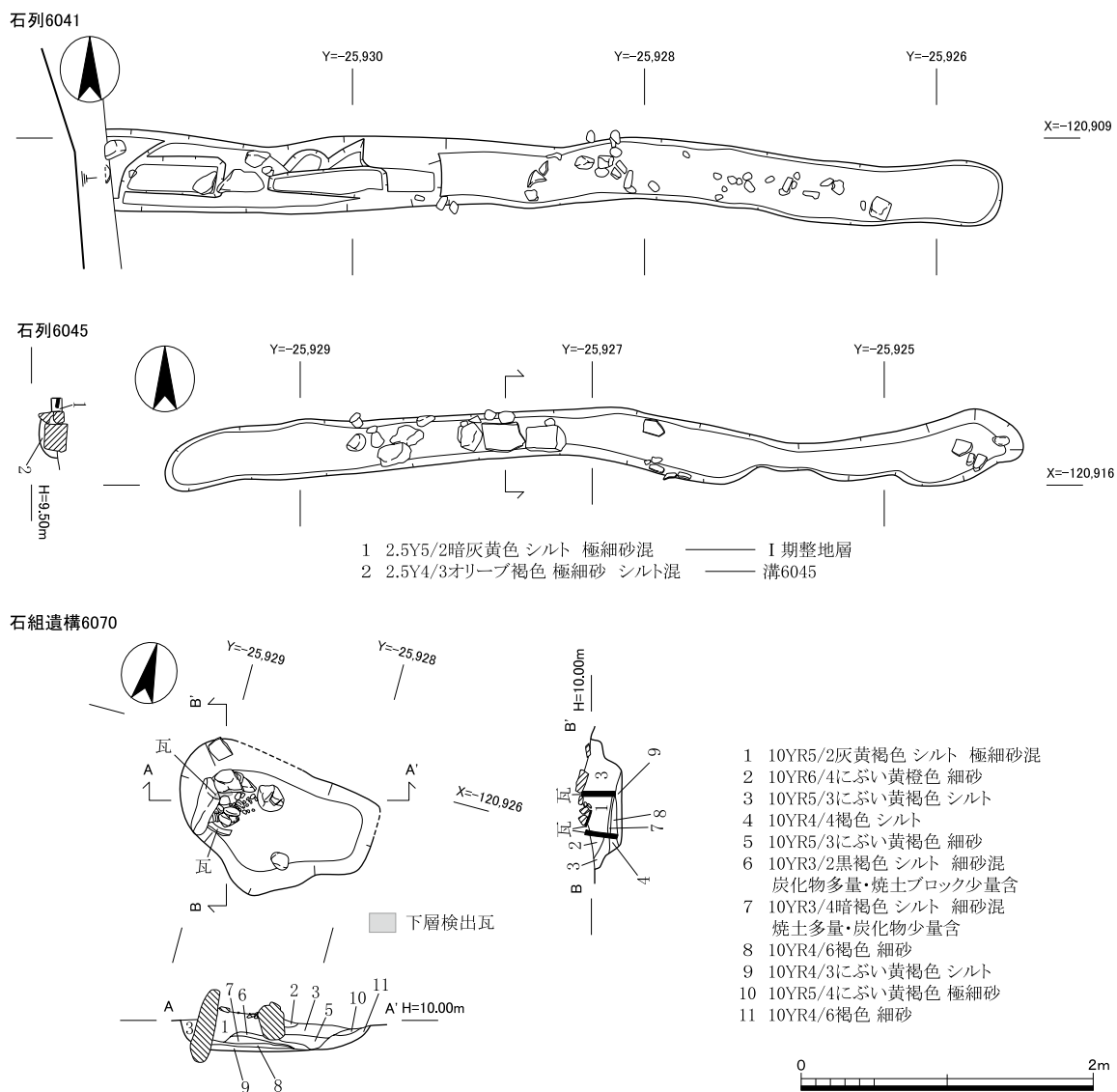


図20 石列6041・6045、石組遺構6070実測図（1：50）

粗朶沈床状遺構 6036 (図版30・76) 平坦部の南側で検出した。西側は調査区外へ続く。方位は北に対し約3.3度東に振る。掘形は平面方形で、検出規模は、東西6.7m以上、南北約9.5m、深さ約0.7mある。掘形底部の厚さ約0.4mのシルト層直上に、粗朶を格子状に組む。粗朶は直径約2cmの杭を打って固定する。粗朶の上に粒径0.3cm程度の真砂土を厚さ約0.4m分充填する。真砂土の中には0.2～0.3m大の角礫が含まれるが疎らである。

井戸 6020 調査区中央付近で検出した。掘形はやや歪な円形で、検出規模が直径1.3～1.4m、深さ約2.7m以上ある。井戸枠は漆喰で、筒状にした漆喰を落とし込んだものとみられる。平面形態は円形で、検出時の内径は約1.0mある。井戸底は、標高6.9mまで掘り下げたが確認できなかった。埋土から明治時代の常滑産の円形土管などが出土した。

井戸 6025 (図版77) 調査区南部で検出した。掘形はやや歪な円形で、検出規模は直径0.95～1.0m、深さ約0.45mある。掘形埋土には砂礫を充填する。井戸枠は、縦板を円形に組んだもので、箍の痕跡は確認できなかったが結物筒と考えられる。検出時の内径は0.7～0.75mである。井戸底の標高は約7.95mで、井戸底には直径約0.1mの杭跡が3箇所確認できる。

溝 6037 (図版30・76) 平坦部の南側で検出した素掘り溝である。北側は調査区外に続き、南側は削平により失われる。平面形は鍵の手状をなす。検出規模が長さ約7.6m、幅0.4～0.7m、深さ約0.35mある。底面の標高は、北端が9.52m、南端が9.55mである。粗朶沈床状遺構6036の上から掘り込まれており、粗朶沈床状遺構6036の真砂土由来とみられる暗灰黄色粗砂が溝底面にラミナをもって堆積する。

[調査区東部]

護岸・水制・石積・集石・高まりを検出した。河川堆積6655・6656上で構築される護岸6136・6102と、河川堆積6654上で構築される護岸6005と、その構成要素である高まり6002・石積6001、集石6003、水制6101がある。

護岸 6136 (図版35・36) 河岸法面の南半で検出した護岸である。遺存状況が悪く、調査区北側では遺構の痕跡は確認できなかった。3区で検出した護岸3200の北延長部である。河川堆積6656上に構築されている。検出規模は、長さ約27.4m、幅約2.0m、高さ約0.7mある。構造は、斜面に直径0.1～0.9mの角礫を敷く。傾斜角度は約20.0度ある。

集石 6653 (図版35) 河岸法面の中央で検出した。護岸の一部と考えられる。護岸6136を削平する。北側は集石6003に覆われる。長さ約10.1m、幅約6.8mの範囲に直径約0.2mの垂円礫を敷く。

護岸 6102 (図版34～36・38～41・79) 河岸水際部の桂川低水路側で検出した。3区で検出した護岸3001の北延長部であり、護岸6005下層で確認した。河川堆積6655上に構築されている。検出規模は、長さ約75.1m、幅約3.1m、高さ約1.6mある。傾斜角度は約31.6度ある。法肩に直径0.3～0.5mの角礫を並べた石列を並べ、斜面は直径0.1～0.2mの垂角礫を敷く。法肩と法尻には直径10～20cmの杭を打設して杭列を構築している。法肩杭列の打設密度は、水流の攻撃を直接受ける北端部が最も高い。

護岸 6005 (図版31～33・37～39・78・79) 河岸水際部の桂川低水路側で検出した。3区で検

出した護岸3001の北延長部である。桂川に浸食された護岸6102を改修したものである。検出規模は、長さ約64.3m、幅約3.0m、高さ約1.5mある。傾斜角度は約23.0度ある。直径0.1～0.4mの角礫を敷いて構築している。北半の高まり6002と石積6001と並行する箇所では、護岸法尻が桂川低水路側に突出する。護岸法尻でコンクリートブロックを検出しており、現在に至るまでに補修が行われていたことがわかる。

高まり6002（図版31・32・37・38・78・79） 河岸水際部の北半で検出した。護岸6005と一連の構造物である。護岸6102の上から杭を打ち込み、河川堆積6654上に盛土して構築されている。検出長は約43.3mある。B-B'セクションからX=-120,950付近の法肩に打設された杭上部が、土圧で桂川低水路側へと破断している³⁾（図版79-2）。

石積6001（図版32・38・78・79） 河岸水際部の中央で検出した。護岸6005と一連の構造物であり、高まり6002南端に構築される。検出規模は、長さ約8.4m、幅約2.5m、高さ約0.7mある。西側に長さ0.3～0.4mの角礫を2～3段小口積みする。内部には黄色粘土～シルトを充填する。

集石6003（図版31・32・37・75・78） 河岸水際部の北半で検出した。護岸6005と一連の構造物である。河川堆積6654上に構築されている。検出規模は、長さ約64.3m、幅約3.0m、高さ約1.5mある。直径0.1～0.5mの角礫を敷く。

水制6101（図版36・40・41・80） 河岸水際部南端の桂川低水路側で検出した。3区北端で検出した水制3410の北延長部である。河川堆積6654上に構築されている。3区検出範囲を含めた全体の平面形は雫形をなす。検出規模は、東西幅約8.8m、南北長約24.3m、高さ約2.2mある。護岸6102を掘り込み、水制の外枠となる部分に2条の杭列を打ち並べて、内部に盛土を充填して構築する。盛土の上面からは、南北方向の杭列を6条程度打ち並べる。杭列の杭は、いずれも西側下方へ斜め方向に打ち込んでいるが、東側の杭ほど打設角度が垂直に近く、杭の太さ・長さが大きい傾向にある（図版80-3）。この作業のあと、外側に竹蛇籠を設置して上部に盛土を施す。

註

- 1) タイロッド工法とは土留めに用いられる工法である。タイロッド（引張材）という棒状の構造材で土留め壁とその背面側に打設した控え杭を連結して固定し、そのタイロッドの張力と地盤の抵抗によって土留め壁を支持する工法である。

『建築用語.net』 <https://www.architectjiten.net/>

荒井幸夫「仮設構造物（土留め工）のはなし」『JCMマンスリーレポート』2008.1 Vol.17No.1 一般社団法人全国土木施工管理技士会連合会 2008年

大成建設株式会社. 加藤孝典. 山留壁の支持構造. 特開2014-5650号. 2014年

- 2) 類似する遺構が、京都市伏見区淀池上町で2021年度に実施された淀藩家老屋敷跡の発掘調査で検出されている。中谷俊哉『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-14 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年

- 3) 大阪府巢本遺跡の堤に類例がある。本例では、杭間に竹枠などを設置して盛土の流出防止を計っていたと推定されており、本事例でも同様の工法が採られた可能性が考えられる。

辻 裕司「中世初期の低地築堤例」『季刊 考古学』第102号 2008年 pp34-38

4. 遺 物

(1) 出土遺物の概要 (表2)

遺物は整理箱にして332箱が出土した。内容は、土器類・瓦類208箱・土製品1箱、木製品106箱、石製品5箱、金属製品7箱、銭貨2箱、骨・貝類3箱である。

土器類には、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器がある。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・軒棧瓦・棧瓦・道具瓦がある。遺物の時期は、弥生時代から近代までのものがある。出土量では、江戸時代前期の遺物が最も多い。

平安時代以降の土師器の型式・年代観については平尾政幸氏の編年に拠った¹⁾。各遺物の詳細については、巻末の付表にまとめた。

(2) 土器類 (図版42～48、図21～23、付表1)

古墳時代の土器 (図21 1・2)

土師器と須恵器がある。1は古式土師器の布留式甕である。古墳時代初頭に属する。調査区東部

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代中期～室町時代中葉	弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨		古式土師器1点、須恵器1点、瓦類2点		
室町時代中葉～後葉 (IV期)	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、金属製品、銭貨		土師器28点、瓦器6点、焼締陶器6点、輸入陶磁器8点、土製品1点、木製品2点、金属製品1点		
室町時代後葉～安土桃山時代 (III期)	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、金属製品、銭貨		土師器18点、瓦器2点、焼締陶器1点、瓦類2点、土製品3点、石製品1点、木製品2点、金属製品4点		
江戸時代前半 (II期)	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、木製品、石製品、金属製品、銭貨		土師器21点、瓦器5点、焼締陶器27点、施釉陶器54点、磁器12点、輸入陶磁器4点、瓦類8点、土製品3点、石製品1点、木製品4点、川船8点、金属製品32点、銭貨50点、ガラス製品1点		
江戸時代後半～明治時代 (I期)	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、土製品、木製品、石製品、金属製品、銭貨		土師器14点、焼締陶器4点、施釉陶器2点、磁器17点、瓦類4点、土製品5点、木製品3点、石製品3点、金属製品20点、銭貨3点		
合 計		361箱	395点 (126箱)	0箱	235箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より29箱多くなっている。

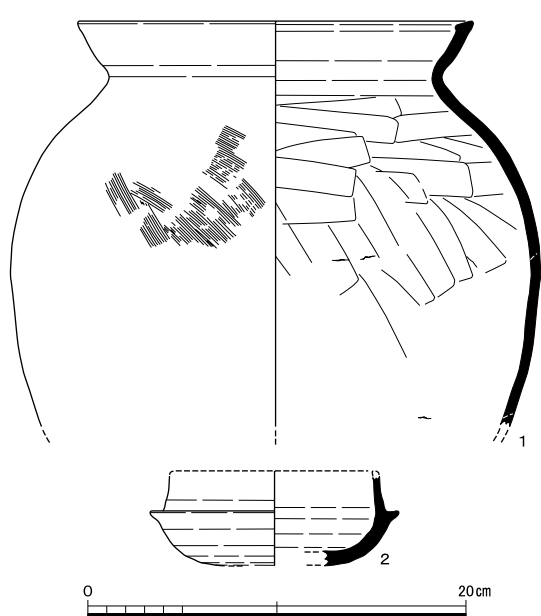


図21 古墳時代の土器実測図（1：4）

の河岸法面で、標高約6.4mの地点から出土した（図14・22）。2は須恵器の杯Hの身である。古墳時代中期に属する。調査区東部の河岸法面から出土した。

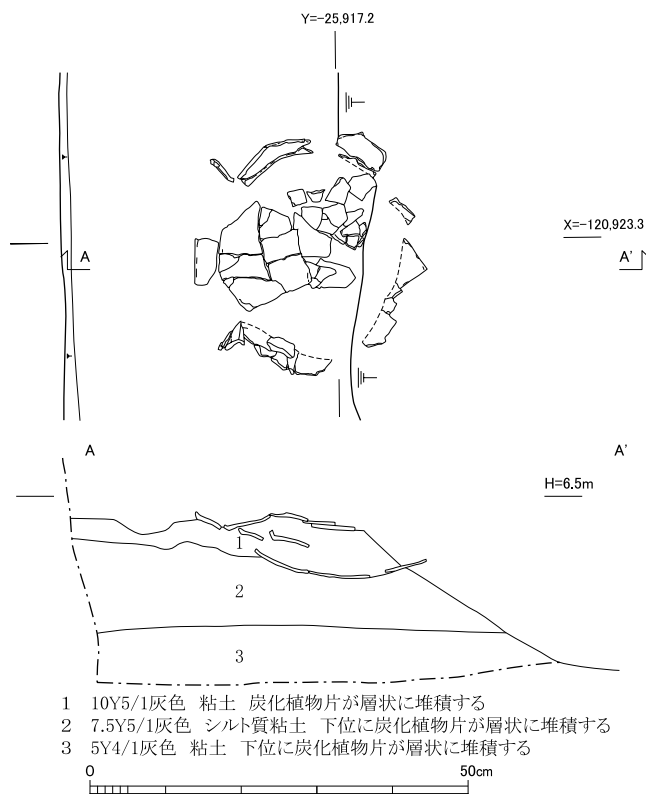


図22 土器1出土状況図（1：10）

- 1 10Y5/1灰色 粘土 炭化植物片が層状に堆積する
- 2 7.5Y5/1灰色 シルト質粘土 下に炭化植物片が層状に堆積する
- 3 5Y4/1灰色 粘土 下に炭化植物片が層状に堆積する

室町時代中葉から後葉の土器

IV期遺構（溝6130-II（古・新段階）・6394（古・新段階）、溝状遺構6550）から出土した土器である。15世紀中葉から後葉頃に属するとみられる。

溝6130-II（古段階）出土土器（図版42 3～9） 土師器、輸入陶磁器、焼締陶器がある。土師器は乙訓在地形の皿（3～5）がある²⁾。輸入陶磁器は白磁・青磁があり、白磁碗（6）は平面八角形を呈する。青磁碗（7）は底部内面に型文、体部外面に細い線刻蓮弁文を施す。焼締陶器は甕・播鉢があり、甕（8）は口縁を折り返して断面楕円形の玉縁にする。播鉢（9）は低い縁帯をもつ。8・9は備前産。時期は、京都9C段階に相当する。

溝6394（古段階）出土土器（図版42 10～12） 土師器、輸入陶磁器がある。土師器は乙訓在地形の皿（10）と台付皿とみられる破片（11）がある。10は口径10.0cm。11は胎土に赤色砂粒を含む。輸入陶磁器は青磁皿（12）で、底部から体部にかけて段をもち、口縁は大きく外反する。時期は、京都9C段階に相当する。

溝状遺構6550出土土器（図版42・81 13～27） 土師器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器がある。土師器は皿・小碗・羽釜がある。皿は乙訓在地形の皿（13～20）がある。小杯（21・22）は体部外面未調整で、口縁端部と高台接合部、体部内面をナデ調整する。胎土に赤色砂粒をふくまない。羽釜（23）は口縁部を「く」の字形に外反させ、鏝は体部中位につく。大和型。瓦器は火鉢・羽釜

がある。火鉢(24)は脚つきで、ミガキ調整した体部外面に三重亀甲の型文を施す。羽釜(25)は直線的にたちあがる体部をもつ。山城型。輸入陶磁器には青磁椀(26)がある。体部外面に線刻蓮弁文を施す。焼締陶器には播鉢(27)がある。備前産。時期は、京都9C～10A段階に相当する。

溝6130-II(新段階)出土土器(図版42・81 28～35) 土師器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器がある。土師器は皿・羽釜がある。皿には乙訓在地形の皿(28～30)がある。羽釜(31)は体部がやや外傾しながら直線的にたちあがる。瓦器には羽釜(32)がある。体部は直線的にたちあがって口縁部付近で大きく内彎、口縁端部は上方につまみ上げる。大和型。輸入陶磁器には青磁椀(33)があり、体部外面に線刻蓮弁文を施す。焼締陶器には播鉢(34・35)がある。34は口縁端部に内傾する面をもつ。時期は、京都9C～10A段階に相当する。

溝6394(新段階)出土土器(図版43・81 36～48) 土師器、瓦器・輸入陶磁器・焼締陶器がある。土師器は皿・三足釜・羽釜・鍋がある。皿には乙訓在地形の皿(36～39・41)・皿Sh(40)がある。三足釜(42)は小型のもので、羽釜(43)は体部がやや外傾しながら直線的にたちあがる。鍋(44)は口縁部を「く」の字形に外反させる。口縁部外面のくびれ部分1箇所縦方向の粘土紐を貼り付ける。瓦器は火鉢(45・46)がある。45は口縁部外面に二条の突帯を貼り付け、その間に型文を施す。46は大型の火鉢で、底部に離れ砂が付着する。輸入陶磁器には白磁椀(47)がある。焼締陶器には播鉢(48)がある。縁帯はやや高く、口縁端部は丸く収める。時期は、京都9C～10A段階に相当する。

室町時代後葉から安土桃山時代の土器

Ⅲ期遺構(溝6582・6130-I・6225)から出土した土器である。15世紀後葉から16世紀頃に属するとみられる。

溝6582出土土器(図版44・82 49～57) 土師器の皿・羽釜がある。皿はすべて皿N(49～56)である。胎土に赤色砂粒を含まない。溝内の土器溜まりからまとまって出土した。羽釜(57)は口縁部を「く」の字形に外反させ、鏝は体部中位よりもやや下につく。大和型。時期は、京都10A・B段階に相当する。

溝6130-I出土土器(図版44 58・59) 土師器・焼締陶器がある。土師器は乙訓在地形の皿(58)である。焼締陶器は播鉢(59)で、縁帯はやや高く、口縁端部を丸く収める。備前産。ほかに細片のため図化できないものに、瓦器火鉢・輸入白磁・施釉陶器天目椀・信楽産の焼締陶器播鉢がある。時期は、京都10B段階頃に相当する。

溝6225出土土器(図版44・82 60～69) 土師器・瓦器がある。土師器は乙訓在地形の皿(60～64)と羽釜(65～67)がある。いずれも口縁部を「く」の字形に外反させる。大和型。66は口縁部の対となる2箇所に穿孔がある。67の鏝は体部中位よりもやや下につく。口縁部外面と鏝以下に煤が付着する。瓦器は茶釜(68)と火鉢(69)がある。68は鏝以下に煤が付着する。69は脚つきで、ミガキ調整した体部外面に花の型文を施す。時期は、京都10A・B段階に相当する。

江戸時代前半の土器

Ⅱ期遺構から出土した土器である。17世紀前半頃に属するとみられる。

河川堆積6656出土土器（図版44～46・83・84 70～137）土師器、瓦器、施釉陶器、磁器、輸入磁器、焼締陶器がある。時期は江戸時代前半頃のものが主体を占めるが、一部、上層遺物が混入する。

土師器は皿・台付皿とみられる破片・羽釜・炮烙がある。皿は、皿N（70）・皿Sb（71）・皿S（72～74）がある。台付皿とみられる破片（75）は胎土に赤色砂粒を含む。羽釜（76）は体部が弱く内彎してたちあがり、口縁部を「く」の字形に外反させる。罫は体部下位につく。炮烙（77）は型成形で、浅い体部に外傾する口縁部がつく。口縁端部内面は上方につまみ上げずに丸く収める。外面と、底部内面には煤が付着する。

瓦器は炉状製品（78）と瓦灯（79）がある。78は脚台部3方に透かしを施す。79は体部に方形透かしを施す。外面ミガキ調整。

施釉陶器は皿・椀・火入・瓶などがある。皿は、80～101はすべて砂目積みである。全面施釉するものも少数あるが（96～98）、高台を露胎とするものが多数を占める。高台内は兜巾がないもの（82～85・88）が少数みられる。口縁部形態は、口唇部に溝を巡らすもの（いわゆる溝縁皿）が多い。唐津産。102～104は底部内面に輪ハゲがある。瀬戸・美濃産。105～108はすべて胎土目積みである。106～108は内面に鉄絵が施される。106・107は笹文、108は二重圏線の中に唐草文。瀬戸・美濃産。109は底部糸切り未調整。110は高台以外の全面を施釉する。111・112は大型の皿である。椀は、113～115は高台内に兜巾がある。115は全面施釉。唐津産。116・117は灰釉丸椀である。瀬戸・美濃産。118～121は天目椀である。いずれも高台内縁を深く削り込み、高台内が兜巾状となる。119・120は高台削り出し後にナデ調整。瀬戸・美濃産。121は段付白天目椀である。体部外面の下位に段がつく。高台削り出し後にナデ調整。瀬戸・美濃産。火入とみられる破片（122）は、体部外面に藁灰釉を施し、高台の3方に抉りを施す。唐津産。瓶は底径4.4cmの小型（123）と、底径8.8cmの中型（124）がある。123は底部糸切り後ナデ調整か。124は体部内面に同心円文の工具痕が残る。体部外面～底部は刷毛で素地を化粧か。唐津産。

磁器は小杯・椀・皿がある。小杯（125～128）は、126が体部外面に草花文の染付を施す。127は体部外面に縦方向5条1組の鎬を一定の間隔で施し、その間に「壽」字を書く。椀は（129～131）、129が口縁端部を外彎させる天目椀で、体部外面には縦方向10条以上を1組とした鎬を一定の間隔で施し、その間に文様と文字を描く。130は体部外面に菊花文を描く。132は磁器皿である。高台は断面逆三角形を呈する。

輸入磁器は、染付皿（133）がある。

焼締陶器は建水・播鉢がある。建水（134）は上げ底に外傾する体部が取り付く。体部外面の下位をヘラケズリ調整する。播鉢は（135～137）、135の内面下半が使用により摩滅する。丹波産。

土留6300出土土器（図版46 138～141）土師器、施釉陶器がある。土師器は皿S（138・139）があり、圏線がめぐる。施釉陶器は皿（140・141）がある。140は高台を露胎とし、高台内は兜巾

がある。141は大型の皿である。時期は、京都11 A段階に相当する。

土留6301出土土器（図版46・85 142～148） 土師器、施釉陶器、磁器がある。土師器は皿N（142）・皿S（143・144）・伏見の在地形とみられる皿（145）がある。皿Sは圏線がめぐらない。施釉陶器は皿（146・147）がある。146は胎土目積みで、高台を露胎とする。147は砂目積みの溝縁皿である。148は磁器皿である。高台は断面逆三角形を呈する。時期は、京都11 A段階に相当する。

石組遺構6010出土土器（図版47・85 149～161） 施釉陶器、瓦器がある。施釉陶器は皿・椀がある。皿は、149は全面を施釉する。150・151は底部糸切り未調整で、151は砂目積みである。152は体部が外傾して口縁が上方に立ち上がる。胎土目積みで、高台内は兜巾状である。153～156は体部中位に段を有する。154は胎土目積み、それ以外は砂目積みである。154・156は高台内が兜巾状である。149～156は唐津産。158・159はともに胎土目積みで、159の内面には笹文の鉄絵が施される。瀬戸・美濃産。椀は直線的に立ち上がる体部に、短く外方に屈曲する口縁端部をもつ天目椀である。唐津産。瓦器は火鉢・瓦灯がある。火鉢（160）は浅い鉢部に短い三脚がつく。瓦灯（161）は体部外面にヘラミガキ調整を施す。時期は、京都11 A段階に相当する。

石組遺構6100出土土器（図版47・85 162～173） 土師器、施釉陶器、磁器、輸入磁器がある。土師器は皿S（162～164）がある。圏線がめぐる。施釉陶器は椀・皿がある。椀（165）は鉄釉を施す天目椀である。瀬戸・美濃産。皿（166～169）は口唇部に溝を巡らす、いわゆる溝縁皿である。すべて砂目積みで、168のみ全面施釉とする。唐津産。磁器は小杯・椀がある。小杯（170）は白磁である。椀（171）は底部内面に「福」字を書く。破面の一部に漆が付着しており、漆継ぎしたことがわかる。輸入磁器は小杯・皿がある。小杯（172）は全面施釉で砂目積みとする。底部内面に圏線がある。皿（173）は内面に龍文、外面に印を染付書きする。時期は、京都11 A段階に相当する。

石組遺構6385出土土器（図版47・85 174～187） 土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器がある。土師器は、乙訓在地形の皿（174）・皿S（175・176）・炮烙（177）がある。皿Sは圏線がない。炮烙は型成形で、浅い体部に外傾する口縁部がつく。口縁端部内面は上方につまみ上げる。全面に煤が付着する。瓦器は火鉢（178）がある。ヘラミガキ調整した体部外面にコンパス文を施す。底部には脚の剥離痕がある。施釉陶器は皿・椀がある。皿は、179は胎土目積みで、内面には笹文の鉄絵が施される。瀬戸・美濃産。180・181は唇部に溝を巡らす、いわゆる溝縁皿である。182は体部中位に段を有する。180～182はいずれも砂目積みで、高台内は兜巾状である。椀は、183は全面施釉とする。184は天目椀で、高台削り出し後にナデ調整する。焼締陶器は茶入・建水・甕がある。茶入（185）は肩衝で、肩に窯記号をヘラ書きする。備前産。建水（186）は口縁部に釉が付着する。甕（187）は底部に窯記号をヘラ書きする。備前産。時期は、京都11 A段階に相当する。

江戸時代後半から明治時代の土器

I期遺構から出土した土器である。18世紀後半頃から20世紀に属するとみられる。

護岸6136出土土器（図版48 188～191） 土師器・磁器がある。土師器は皿Sb（188）・皿S

(189)がある。磁器は椀(190)・仏飯器(191)がある。191は脚部に釉がほぼ掛かっていない。脚部底面の削り出しは浅い。このほか、いわゆる刷毛目唐津の施釉陶器大皿、腰折れの磁器椀が出土しているが細片のため図化できなかった。

護岸6102出土土器(図版48 192～195) 土師器、磁器、焼締陶器がある。土師器は皿(192)があり、内外面に布目圧痕や粘土が押しつぶれた痕跡があることから型作りの可能性がある。磁器は皿(193)があり、底部内面にはコンニャク印判の五弁花、底部外面には形骸化した大明年製の文字がある。また白玉粉による焼き継ぎがある。焼締陶器は瓶(194)と播鉢(195)がある。194は底部外面に刻印と墨書がある。備前産。195は高台付きの播鉢で、体部内面の播り目上部を弱くナデ消す。堺・明石系。このほか、体部内面に馬の目文を描いた施釉陶器皿、柿釉を施した施釉陶器鍋、飛び鉦を施した施釉陶器鍋蓋、コバルト釉を施した磁器が出土しているが細片のため図化できなかった。

高まり6002出土土器(図版48 196～199) 土師器、磁器がある。土師器は皿(196・197)で、いずれも底部回転糸切り未調整である。196は内面から口縁部外面にかけて柿釉を施す。磁器は椀(198・199)がある。198は筒形椀で、体部外面の文様は印判刷りで、体部外面下位や口縁部内面の文様はコバルト釉で手書きする。199は平面八角形の椀で、体部外面に簡略化した芙蓉手、底部内面に獅子文を描く。高台は蛇の目凹型で、チャツの痕跡がある。このほか、施釉陶器土瓶の把手、コバルト釉を施した磁器、いわゆる染身体文を施した磁器小杯が出土しているが細片のため図化できなかった。

石積6001出土土器(図版48 200～205) 土師器、磁器がある。土師器は皿・植木鉢・炮烙がある。皿は、皿S(200)、底部回転糸切り未調整の皿(201)がある。植木鉢(202)は型作りの脚部を取り付け、鉢底部中央1箇所穿孔する。炮烙(203)は、丸い底部と外傾する体部の境目外面に突帯を取り付ける。摂津産。磁器は皿(204・205)がある。204は底部内面にコンニャク印判の五弁花、体部内面に濃み地の白抜き文様、底部外面に簡略化した大明年製の文字がある。205は平面豆形の型打ち皿である。内面に唐草文などが陽刻される。瀬戸産。このほか、コバルト釉を施した磁器、琉球壺屋焼の焼締陶器壺が出土しているが細片のため図化できなかった。

護岸6005出土土器(図版48 206～210) 磁器、焼締陶器がある。磁器は小杯・椀・火入がある。小杯(206)は、端反形で、口縁部内面を金彩する。椀(207・208)はいずれも印版によって施文される。207は体部外面に狩野探幽・狩野元信・狩野一溪などの印文を銅板刷りした後、文様の間に暗赤褐色・オリーブ褐色の塗料を用いて狩野探幽などの印文を手描きする。底部外面には清陶園製の文字がある。瀬戸産。208は体部外面に鶴、亀、松、梅などを描く。瀬戸産。火入(209)は、高台に抉りを入れて三脚とし、底部内側には砂を付着させる。口縁部内面から高台外面までは施釉し、そこに青・緑・赤・金で施文する。白玉粉による焼き継ぎがある。焼締陶器は播鉢(210)がある。体部内面の播り目は底部まで及ばない。播り目上部はナデ消す。底部内面には不定方向の播り目を3条施す。底部外面ヘラケズリ調整。堺・明石系。このほか、コバルト釉を施した磁器、いわゆる染身体文を施した磁器小杯が出土しているが細片のため図化できなかった。

水制6101出土土器（図版48 211～225） 土師器、施釉陶器、磁器がある。土師器は、柿釉を施した底部回転糸切り未調整の皿（211）、皿S（212・215）、伏見の在地形とみられる皿（213）、型作りとみられる皿（214）がある。施釉陶器は灯明皿受け（216）・土瓶（217）・播鉢（218）がある。216は外面と受け部先端を露胎とする。217は体部外面にイッチン描きがみられる。体部外面下位には煤が付着する。218は体部外面中位から内面にかけて柿釉を施す。磁器は紅皿（219）・椀（220～223）・小杯（224）・椀蓋（225）がある。219は型打ち成形で、体部外面に蜻唐草文が陰刻される。体部外面は露胎とする。220は外面が青磁で、茶・緑の絵具で施文する。221は底部内面に型打ちによる花文、体部外面に鶴文を施す。222は体部外面に松を、底部内面に松竹梅文を型紙刷りする。223は体部外面に宝珠文を銅版刷りする。224は体部外面にいわゆる染色体文を描き、口鏝にする。瀬戸産。225は鶴亀、松竹梅などの文様を銅版刷りする。つまみ内側に印がある。

その他の土器

新しい時期の遺構への混入品などとして出土した特徴的な遺物に、墨書土器・輸入磁器がある。

墨書土器（図23 226～231） 226は輸入白磁皿で、高台に4方の抉りがある。福建省邵武窯産と推定される。底部外面に墨書があるが判読できない。土坑6245出土。227は蛇の目釉剥ぎする磁器皿で、体部内外面に染付する。高台を削り出した後、兜巾を削り取る。削り取った部分に墨書する。柱穴6263出土。228は唐津産の施釉陶器皿で、体部と底部の境目に段を有する。砂目積み痕と兜巾がみられる。底部外面にコ字形の墨書を施す。粗朶沈床状遺構6036出土。229は輸入白磁皿で、高台に4方の抉りがある。福建省邵武窯産と推定される。底部外面に「十二」と墨書する。IV期整地層出土。230は唐津産の施釉陶器皿で、底部外面に十字形の墨書を施す。土坑6260出土。231は唐津産の施釉陶器皿で、いわゆる溝縁皿である。底部外面にコ字形の墨書を施す。集石6003出土。

輸入磁器（図23 232） 232は輸入磁器の大皿である。内面に魚等の図像を描く。高台端部と口縁端部は釉剥ぎする。粗朶沈床状遺構6036出土。

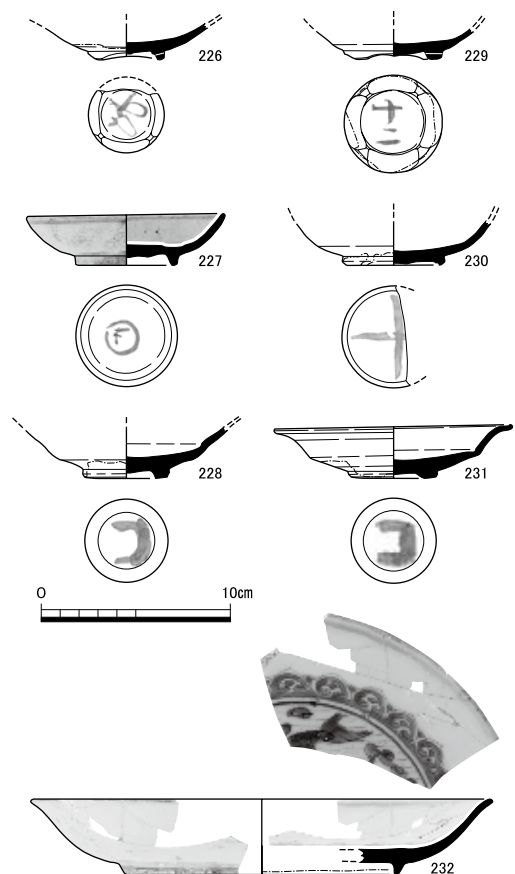


図23 墨書土器・輸入磁器実測図（1：4）

(3) 瓦類 (図版49～51・86)

軒瓦、平瓦、軒棧瓦、道具瓦、丸瓦がある。

軒丸瓦 (瓦1～4) 瓦1は外区に珠文が推定24個あるが、摩耗が著しいため内区の文様や調整は観察できない。平安時代。表採。瓦2～4は内区に右巻きの三巴文がある。

瓦2は外区が剥離して失われている。裏面はユビオサエ成形。平安時代後期。表採。

瓦3は内区の巴文は尾部が互いに接する。外区には珠文が推定12個ある。瓦当部裏面に不定方向のナデ調整後、瓦当部側面・裏面外縁をナデ調整。文様区にキラコ付着。丸瓦部の剥離面に布目圧痕あり。溝6394 (新段階) 出土。

瓦4は外区に珠文が推定12個ある。丸瓦部凹面は布目圧痕、瓦当部裏面はユビオサエ成形のち横方向のナデ調整。瓦当部接合後、表裏面接合部・瓦当部裏面外縁をナデ調整。さらに瓦当部外区外縁・丸瓦部凸面をミガキ調整後、瓦当部表裏面の外縁を面取り調整。水制6101出土。

軒平瓦 (瓦5～10) ここでは、資料の遺存状況から軒棧瓦と断定できない資料を報告する。

瓦5は中心飾りが萼付きの橘で、外向する唐草は独立する。凸面広端部カキヤブリによる顎部貼付、接合部裏面から顎部下端にかけてナデ調整するが、摩耗が著しいためその他の成形・調整痕跡は観察できない。文様区にキラコ付着。水制6101出土。

瓦6は中心飾り不明で、外向する唐草文が3転する。平瓦部凸面をユビオサエ・粗いナデ調整、顎部表面下辺に藁状圧痕。凸面広端部カキヤブリによる顎部貼付、接合部裏面から顎部下端にかけてナデ調整。さらに平瓦部凹面をケズリ調整、平瓦部凹面広端部および側面・顎部側面・文様区外縁をナデ調整後、平瓦部凹面広端部を面取り調整。破面等に被熱痕跡あり。重機掘削時出土。

瓦7は中心飾りが三葉で、2転する外向唐草は接する。平瓦部凸面を粗いナデ調整後、凸面広端部カキヤブリによる顎部貼付、接合部裏面から顎部下端にかけてナデ調整。さらに平瓦部凹面をミガキ調整、平瓦部凹面広端部および側面・顎部側面・文様区外縁をナデ調整。文様区表面・平瓦部凹面にキラコ付着。破面等に被熱痕跡あり。調査区東部出土。同文が石組遺構6010からも出土している。

瓦8は他の軒平瓦よりも一回り大きい。平瓦部凸面をナデ調整後、凸面広端部カキヤブリによる顎部貼付、接合部裏面から顎部下端にかけてナデ調整。さらに平瓦部凹面をナデ調整、平瓦部凹面広端部・顎部側面・文様区外縁をナデ調整後、平瓦部凹面広端部を面取り調整。胎土中にキラコを多量に含む。調査区東部出土。

瓦9は軒棧瓦か。中心飾りが○に十で、形骸化した萼がある。2転する外向唐草は独立する。平瓦部凸面を粗いナデ調整後、凸面広端部カキヤブリによる顎部貼付、接合部裏面から顎部下端にかけてナデ調整。さらに平瓦部凹面をミガキ調整、平瓦部凹面広端部および側面・顎部側面・文様区外縁をナデ調整。全体にキラコ付着。被熱痕跡あり。護岸6102出土。

瓦10は中心飾りが宝珠で、3転半する外向唐草は独立する。凸面広端部カキヤブリによる顎部貼付、接合部裏面から顎部下端にかけてナデ調整。さらに平瓦部凹面をナデ調整、平瓦部凹面広端

部および側面・顎部側面・文様区外縁をナデ調整。著しい被熱痕跡あり。室町時代後期。建物6051の柱穴6115出土。

軒棧瓦（瓦11・12） 瓦11は中心飾りが萼付きの橘で、1転半する外向唐草は独立する。凸面端部カキヤブリによる顎部貼付、接合部裏面から顎部下端にかけてナデ調整。さらに平部凹面をミガキ調整後、平部端部・顎部表裏面下辺を面取りする。文様区にキラコ付着。石積6002出土。

瓦12は、小丸には内区に右巻きの三巴文、外区に珠文19個を配する。平部には外向する唐草を配する。平部凸面端部カキヤブリによる顎部貼付、接合部裏面から顎部下端にかけてナデ調整後、平部の凹面および文様区外縁をナデ調整。その後、棧部凹面端部に小丸瓦当を貼り付け、棧部および平部との接続部表裏面をナデ調整。さらに瓦当の側面および裏面外縁をナデ調整後、棧部凸面をナデ調整。最後に小丸瓦当側面と平部文様区との間に生じる隙間に粘土を充填し、ナデ調整する。水制6101出土。

鬼瓦（瓦13） 板部の平面形態は、上部が木瓜形、下部欠損。板部表・側面をナデ調整。板部裏面は未調整で、外縁を断面V字状に浅く削って外縁を成形する。また中央に上下2箇所穿孔して竜頭とする。表面の鬼の意匠部分は、角・髭が遺存する。いずれも板部表見カキヤブリによる貼り付けで、髭は棒状工具でナデて表現する。被熱痕跡あり。調査区東部、粗朶沈床状遺構6036出土。

谷丸瓦（瓦14） 丸瓦部凹面にコビキBのち布目圧痕、玉縁付近は莖状圧痕。半円形の土板裏面にコビキBのち布目圧痕。丸瓦部と半円形の土板はカキヤブリによる接合で、接合部内面は粘土充填のちナデ調整。接合部外面・半円形の土板表面・丸瓦部凸面ナデ調整のち、半円形の土板の下側面をケズリ調整する。丸瓦部中央玉縁寄りに穿孔1箇所。被熱痕跡あり。調査区東部出土。

丸瓦（瓦15・16） 瓦15は、凸面莖状圧痕のちナデ調整。玉縁は凸面ナデ調整、端部両辺を面取り成形。凹面側縁・広端縁は広い面取り成形。凹面はコビキAのち布目圧痕、棒状工具による刺突痕、吊り紐圧痕。石組6180の導水部に利用される。

瓦16は、他の丸瓦より一回り大きい。凸面ミガキ調整、凹面側縁は広い面取り成形。凹面はコビキAのち布目圧痕、吊り紐圧痕2段。被熱痕跡あり。石敷遺構6075出土。

（4）土製品（図版87、図24、付表2）

つぼつぼ（土1～3） 口縁に沈線を施さないもの（土1）と、施すもの（土2・3）がある。土1は石組遺構6385、土2は建物6184の柱穴6184、土3は土坑6386出土。

ミニチュア容器（土4） つぼつぼに台座を取り付けたような形状を呈する。口縁に沈線を施す。調査区東部の河岸法面から出土した。

笛（土5） 玩具の笛である。体部上面に人面の意匠があり、吹口から流入した吐息が人面の口から抜けて音を発する。調査区東部出土。

土錘（土6～8） 棒状の芯に粘土を巻き付けて成形したもので、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。土8の外面には工具を用いてタタキ成形した痕跡がみられる。土6は溝6130-I、7は溝6130-II（新段階）、土8は溝状遺構6550出土。

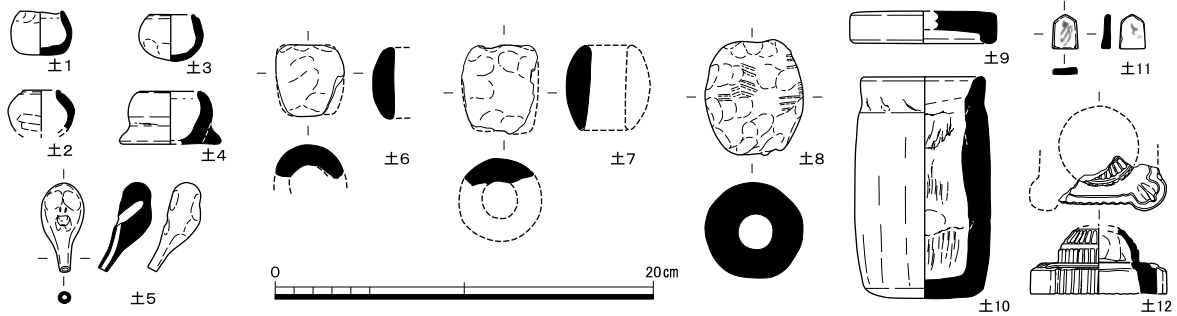


図24 土製品実測図（1：4）

塩壺（土9・10） 土9は蓋である。内面に布目圧痕がのこる。土10は布を巻き付けた芯に粘土板を巻いて成形する。全体が被熱する。土9は石積6001、土10は護岸6102出土。

将棋駒（土11） 磁器染付。呉須で表面に「歩」、裏面に「と」と書く。井戸6025出土。

像台座（土12） 白磁。人形など像の台座部分で、徳化窯の製品とみられる³⁾。高まり6002から出土した。

（5）石製品（図版87、図25、附表3）

碁石（石1） 黒色である。Ⅱ期整地層出土。

硯（石2・3） 平面長方形の硯である。石2は中央上部に楕円形の硯面があり、硯面周りに桃の意匠を彫る。溝6225出土。石3は横幅に対して縦に長い平面形態をとる。表面外縁の外側は直角、内側は隅丸である。海と陸の比率はおおよそ1：1.8である。裏面の覆手内には「鐵徳／鐵屋／徳治良」の線刻があり、その下には「高島本石」と線刻する。水制6101出土。

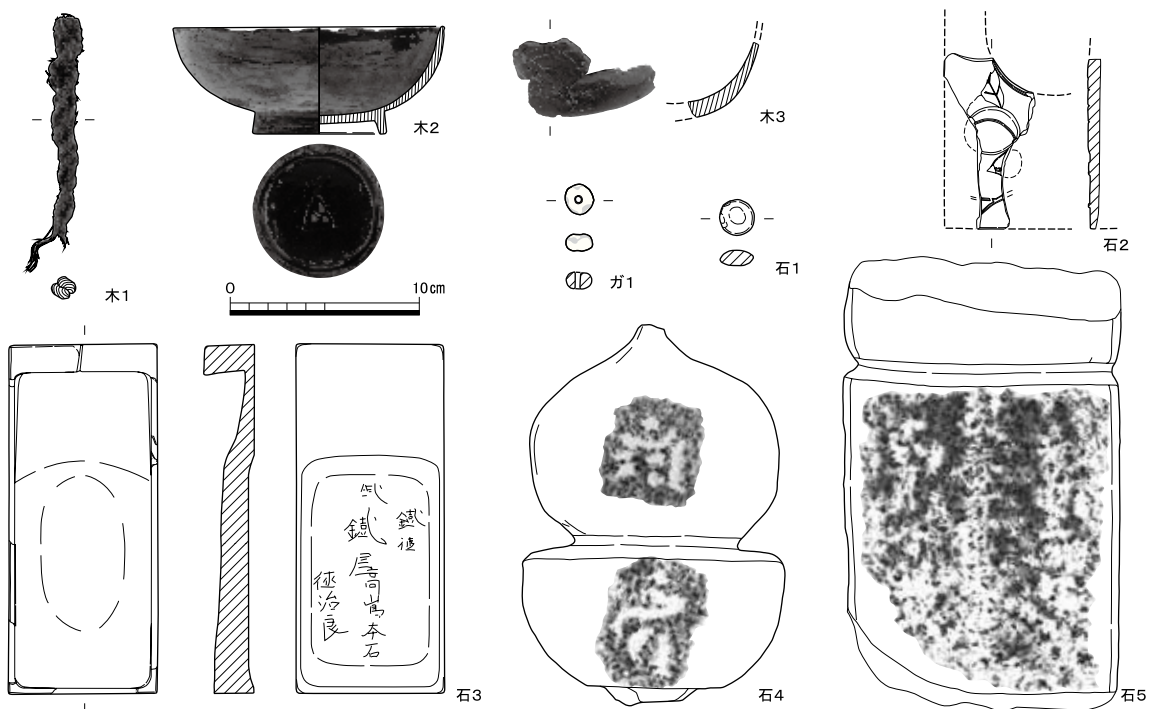


図25 石製品・ガラス製品・木製品実測図（1：4）

五輪塔（石4） 空輪と風輪を一体成形する。正面に梵字を1字ずつ配する。風輪下端には火輪と結合するための柄がある。集石6003出土。

墓石（石5） 表面に「□□二□／（梵字）春□禪定□／□月□□〔日カ〕」と陰刻する。集石6003出土。

（6）ガラス製品（図25）

とんぼ玉（ガ1） 乳白色のガラス玉表面に、水色のガラスで施文する。直径1.5～1.7cm、高さ0.9cm。調査区東部出土。

（7）木製品（図版52・88、図25、付表4）

綱（木1） 草本類を編んだ綱である。水制6101出土。なお、昨年調査では同程度の太さの綱が竜頭環に巻き付いた状態で今回と同じ遺構から出土している。

漆器椀（木2・3） 木2は全体を黒漆で塗った後、内面から外面にかけて赤漆を塗る。高台および高台内には赤漆を塗らず、高台内中央に赤漆で三連点を描く。木3は全体を黒漆で塗った後、内面のみ赤漆を塗り、外面には赤漆で草木文を描く。木2は溝6130-Ⅱ（古段階）、木3は河川堆積6656出土。

護符（木4） 材は板状で、上端を圭頭状に加工する。下部に向かってやや先細りとなる。表面に「蘇民将来子孫也☆」と墨書する。文字が浮き上がっていることから、屋外に掲示されていたことがわかる。調査区東部出土。

箸（木5） 断面は扁平な方形で、両端に向けて先細りとなる。先端は丸みをもつ。一方の先端が炭化していることから、燃えさしに転用されたとみられる。溝6394（新段階）出土。

方形板（木6） 方形板材の表面に墨画を施す。上端および下端を欠失するため、描かれる図像は判然としないが、手綱をつけた馬のようにもみえる。溝6130-Ⅱ（古段階）出土。

チキリ（木7） 長方形の板材の左右側面を抉って平面形を臼形に成形する。上部中央1箇所孔があり、釘穴とみられる。石組遺構6385出土。

円板（木8） 円形板材の表面中央上に十字、中央下に花押を墨書する。土留6300出土。

用途不明板（木9） 方形板材の下辺に半円形の抉りを入れ、抉った部分を面取りする。板の厚みは中央が最も厚く、上下辺に向かってやや薄くなる。溝6130-Ⅱ（新段階）出土。

弓（木10） 端部の破片である。弭は、弦をかけるために抉りが施されている。護岸6102出土。

杖（木11） 自然木をそのまま用いているため、体部はゆるやかに彎曲し、表面には樹皮がのこる。上端は粗く面取りして頭を成形する。頭には大きな亀裂が1箇所あり、そこに木製楔を打ち込む。下端は使用による摩耗痕があり、年輪に直交する放射状の亀裂が生じている。護岸6102出土。

(8) 川船 (図版23・27・53～57、付図1・2、図26、付表5)

石組遺構6010、土留6300・6301の構築資材として再利用された川船である。すべて板材を船釘で結合した構造船である。

本報告書で用いる川船の部位は、船体の進行方向に対して先端に当たる部分を表(船首)、後ろに当たる部分を鱸(船尾)、船体の船首と船尾に挟まれた部分を胴(船央)と呼称する。また、船体の横断面に対して船の側面を舷側、船の底部を船底とした。

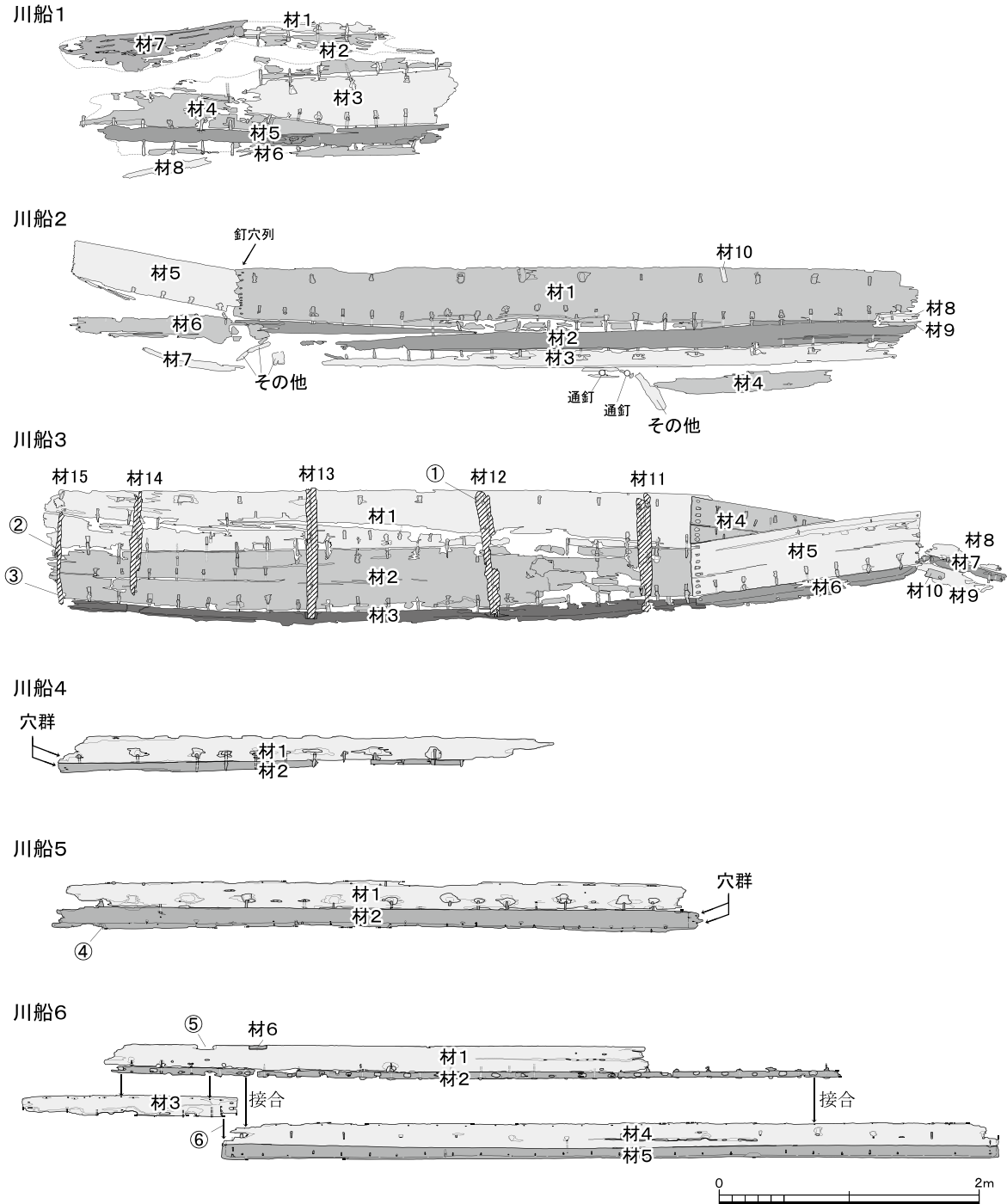


図26 出土川船模式図 (1 : 50)

各部位で用いられる部材の呼称は、表あるいは艫の小端立てした板を立板、胴の船底材を胴敷板、表の船底材を表敷板、艫の船底材を艫敷板、舷側の上部材を棚板、舷側の下部材を側板、横方向の梁を敷押え、あるいは船梁とした。

舷側の側板と船底の敷とを繋ぐ刳材は、淀川流域及び瀬戸内地域ではこれまで確認されていない部材である。一方、若狭湾から北陸、日本海沿岸にかけての地域ではオモキやコマキという名称で類似した部材が民俗資料で確認できる。本報告ではこの部材を、オモキ様の刳材と呼称する。

以下の報告では出土した川船の概要を記す。詳細は付表5と付章1に示す。

川船1（図版53、付図1） 舷側から船底の一部が残存する。残存長約3.07m、残存幅約1.22mある。北側は幅約1.4mの攪乱によって棄損している。土留6301から出土した。

部材は8点あり、そのうち材1～6は船釘で結合されている。材1～4は胴敷板である。材の法量は、遺存の悪い材1を除くと長さは152.3～196.1cm、幅33.1～39.8cm、厚さ1.8～3.0cmある。樹種はマツ属複雑管束亜属である。材5は胴のオモキ様の刳材である。長さ270.0cm、幅14.0cm、厚さ3.0cmある。樹種はヒノキである。材6は胴の側板と考えられる。長さ232.2cm、幅7.9cm、厚さ2.3cmある。樹種はヒノキ属（サワラか）である。材7・8は、船釘や釘穴がなく、材1～6とは直接結合されていないことから船材でない可能性もある。

船釘は縫釘がある。すべて縫釘による結合である。

川船2（図版54、付図1、図27・28） 舷側から船底の一部が残存する。残存長約6.55m、残存幅約1.30mある。土留6301出土。

部材は10点あり、そのうち材1～3・8・9が船釘で結合された状態で出土した。材1は胴敷板である。長さ526.2cm、幅48.7cm、厚さ3.4cmある。樹種はマツ属複雑管束亜属である。材1の図左方の小口側に釘穴列を確認した。長軸方向に船材を接ぎ合わせていたと考えられる。材2は胴のオモキ様の刳材である。長さ523.5cm、幅19.7cm、厚さ3.3cmある。樹種はヒノキ属（サワラか）である。材3は胴の側板と考えられる。長さ442.0cm、幅14.3cm、厚さ3.9cmある。樹種はヒノキである。材4は釘の打ち込みを確認できるが、他の材とは直接繋がらない。出土位置や通釘の分布状況から胴の棚板下材の可能性もある。長さ136.9cm、幅14.8cm、厚さ4.0cmある。樹種はサワラである。

材5・6は釘穴が確認できることから、元来は船の一部であったものが分離したと推定している。材5は表もしくは艫敷板である。長さ132.5cm、幅31.4cm、厚さ3.1cmある。樹種はマツ属複雑管束亜属である。材6は表もしくは艫のオモキ様の刳材である。長さ154.0cm、幅19.9cm、厚さ5.3cmある。樹種はヒノキ科（アスナロか）である。材7は船釘や釘穴がなく、他の材とは直接結合されていない。出土位置から表敷板あるいは艫敷板に伴う側板と推定した。長さ79.8cm、幅6.4cm、厚さ3.5cmある。樹種はヒノキ属（サワラか）である。

材8・9の部位は不明である。補修材の可能性もある。長さ32.5～34.2cm、幅6.3～6.4cm、厚さ2.3～2.5cmある。樹種はヒノキ科（アスナロか）である。材10は材1の死節の部分掘り込んで、その上から嵌め込まれた死節埋木である（図27・28）。長さ11.6cm、幅3.6cm、厚さ0.5cmある。

船釘は縫釘がある。通釘は材4の周辺から出土したが、船材に直接打ち込まれた状態では確認し



図27 川船2の死節（船内側）と材10

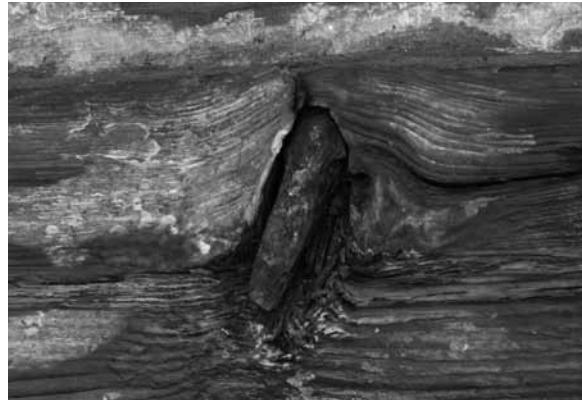


図28 川船2の死節（船外側）

ていない。

川船3（図版55・71-2~4、付図2） 舷側から船底の一部が残存する。残存長約7.41m、残存幅約1.07mある。石組遺構6010から出土した。

部材は15点あり、いずれも船釘で結合されている。材1・2は胴敷板である。材1は長さ514.0cm、幅46.5cm、厚さ3.2cmある。樹種はマツ属複雑管束亜属である。材2は長さ510.0cm、幅46.8cm、厚さ2.2cmある。樹種はマツ属複雑管束亜属である。材3は胴のオモキ様の刳材である。長さ491.1cm、幅13.3cm、厚さ2.9cmある。樹種はヒノキ属（サワラか）である。材4・5は表もしくは艫敷板と考えられる。材4は三角形の板材で、長さ111.0cm、幅36.0cm、厚さ2.7cmある。樹種はマツ属複雑管束亜属である。材5は台形の板材で、長さ178.3cm、幅41.8cm、厚さ3.0cmある。樹種はマツ属複雑管束亜属である。材6は表もしくは艫敷板に伴うオモキ様の刳材である。長さ171.8cm、幅12.5cm、厚さ4.2cmある。樹種はヒノキである。

胴（船中央）を構成する材1~3と、表（船首）もしくは艫（船尾）を構成する材4~6をそれぞれ組み合わせたのち、前者と後者を重ね継ぎして船釘で固定する。両者の重ね継ぎにあたっては、胴にあたる材1・2の船外側を結合部に向かって厚みを減らし、さらに表もしくは艫にあたる材4・5の船外小口を一部欠き取って段差を設ける（図29）。

材7~9は表あるいは艫立板の可能性がある。長さ60.1~68.9cm、幅6.8~13.2cm、厚さ7.8cmある。樹種は材7・9がサワラ、材8がヒノキである。材5の端部と結合すると考えられる。材11~14は敷押えと考えられる。長さ80.3~107.0cm、幅8.9~11.3cm、厚さ1.3~7.2cmある。樹種は材11がヒノキ、材12がマツ属複雑管束亜属、材13がヒノキ属（サワラか）、材14がヒノキ科（アスナロか）である。材1・2に直交して配置され、材3に穿たれた通し柄穴に嵌め込む（図版71-4）。各材の芯々距離は、材11・12間が縫釘5単位分にあたる約1.12m、材12・13・14間が縫釘6単位分にあたる約1.35mある。材10・15の部位は不明である。材15は材1・2に直交して小端立てする。

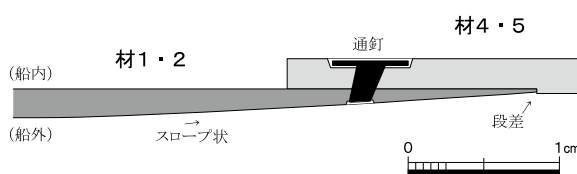


図29 川船3船底通釘結合部の断面模式図（1：1）

船釘は通釘と縫釘がある。通釘は胴敷板である材1・2と、表もしくは艫敷板材である



図30 川船3 通釘の方形彫り込み（船内側）



図31 川船3 通釘の台形彫り込み（船外側）

4・5との結合部で確認した。材4・5の船内側に通釘の頭を収めるための方形の彫り込みがある（図30）。材1・2の船外側には通釘の尾を収めるための台形の彫り込みがある（図31）。他は縫釘による結合である。

止水材はマキハダとガケの埋木がある。マキハダは材1・2の結合部で確認した。縫釘を打ち込んだ後に、船内側から充填されている。ガケの埋木は材1・2の結合部で2箇所、材4・5の結合部で1箇所、材5・6の結合部で1箇所確認した。材12・15は材1・2のガケに重なる箇所で接合されている（図26①～③）。

川船4（図版56、付図1） 舷側の一部が残存する。残存長約3.82m、残存高約0.29mある。土留6300から出土した。

部材は2点あり、いずれも船釘で結合されている。材1は胴の側板である。長さ381.7cm、幅20.5cm、厚さ4.3cmある。樹種はサワラである。材2は胴のオモキ様の刳材である。長さ199.5cm、幅7.7cm、厚さ3.8cmある。樹種はヒノキ科（ヒノキか）である。

船釘は通釘と縫釘がある。通釘は側板である材1と、出土しなかった棚板との結合部で確認した。また、材1に通釘の釘穴列を確認した。他は縫釘による結合である。

止水材はマキハダがある。材1・2の結合部で確認した。

なお、材1・2の端部に2個1対斜め方向の穴群が2箇所ある。これと特徴が類似する穴列を、部材の検出時に重複していた川船5の材2の端部でも確認できた。川船4・5を土留6300の構築材として転用した際に、両者を紐などで固定した痕跡と考えられる。

川船5（図版56、付図1） 舷側一部が残存する。残存長約5.01m、残存高約0.47mある。土留6300から出土した。

部材は2点あり、いずれも船釘で結合されている。材1は胴の側板である。長さ477.1cm、幅21.4cm、厚さ4.3cmある。樹種はサワラである。材2は胴のオモキ様の刳材である。長さ501.0cm、幅16.5cm、厚さ4.3cmある。樹種はヒノキである。外面には、チョウナなどで角を落とした痕跡がある。図26④にはチョウナで角を落とす最中に材が剥離した痕跡がある。

船釘は通釘と縫釘がある。通釘は側板である材1と欠損材との結合部で確認した。他は縫釘による結合である。



図32 川船6 オモキ様の刳材断面(写真上が船内側)



図33 川船6 工具痕跡(材5 船外側)

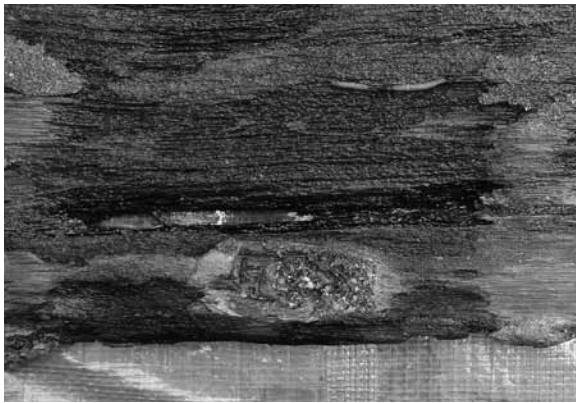


図34 川船6 通釘の方形彫り込み(船外側)

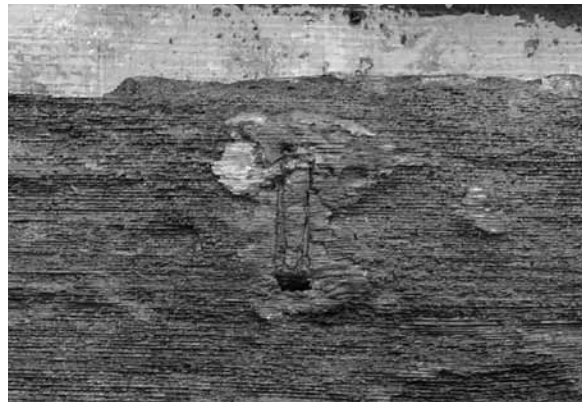


図35 川船6 通釘の台形彫り込み(船内側)



図36 川船6 縫釘の台形彫り込み(船外側)

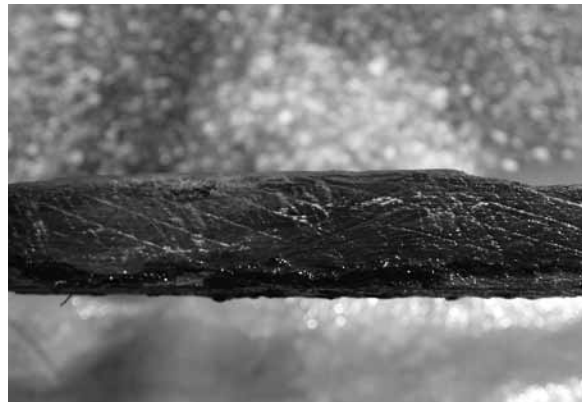


図37 川船6 マキハダとアイバスリ痕
(材1の小端、材2との結合面。写真下が船内側)



図38 川船6 材4の埋木(船外側)



図39 川船6 アイバスリ痕(材5、敷板との接合面)

止水材はガケの埋木がある。材1・2の結合部で1箇所確認した。材2の端部に2個1対斜め方向の穴群を確認した。川船4の穴群に対応する。

川船6（図版57・72-3・4、付図2、図29～32） 舷側の一部が残存する。残存長約7.58m、残存高約4.97mある。すべての材が釘で結合された状態で出土したが、3分割して取り上げた。土留6300から出土した。

部材は6点あり、いずれも船釘で結合されている。材1は胴の棚板上材である。長さ587.7cm、幅19.8cm、厚さ4.2cmある。樹種はヒノキである。図26⑤の位置は方形に切り取られている。材2は胴の棚板下材である。長さ440.1cm、幅5.5cm、厚さ3.8cmある。樹種はヒノキである。材3・4は胴の側板である。材3は長さ188.3cm、幅15.4cm、厚さ4.7cmある。樹種はサワラである。材4は長さ607.9cm、幅19.5cm、厚さ4.5cmある。樹種はヒノキである。材5は胴のオモキ様の刳材である。船内側で部材を剥り抜いた際の加工痕跡を確認した（図32・33）。長さ609.2cm、幅12.0cm、厚さ4.2cmある。樹種はヒノキである。また、材3と材4・5の接合部（図26⑥）には、図29と同様の加工を施す。材6は材1の上辺の一部を方形に切り取った凹みに埋め込まれた板材である。長さ13.2cm、幅2.8cm、厚さ4.3cmある。樹種はヒノキである。材6は船内・船外側に小端があるため、船梁が切り取られた残骸とは考えにくい。用途不明である。

船釘は通釘と縫釘がある。通釘は胴の棚板下材となる材2と側板となる材3、胴の棚板下材となる材2と側板となる材4の結合部で確認した。材2の船外側には通釘の頭を収めるための方形の彫り込みがある（図34）。材3・4の船内側と、材5の船外側には、通釘の尾を収めるための台形の彫り込みがある（図35・36）。他は縫釘による結合である。

止水材にはマキハダとガケの埋木、止水技術はアイバスリ痕が認められる。マキハダは、材1・2、材2・4、材4・5、材3下位の結合部で確認した（図37）。ガケの埋木は、材4で9箇所確認した（図38）。アイバスリ痕は、材1・2と材5下部の結合部で確認した（図37・39）。

川船7（図版23・73-3） 船底の一部が残存する。遺存状態が悪く図化できなかった。残存長約4.3m、残存幅約0.4mある。船板の残存厚は、検出時に上位に位置した材で約2.8cmある。土留6300から出土した。

部材は3点あり、いずれも船釘で結合されている。上位に位置した板材が幅約21.0cm、中位の板材が幅約10.5cm、下位の材が幅約7.5cmある。上・中位の材は胴敷板、下位の材は胴のオモキ様の刳材と考えられる。

船釘は縫釘が出土した。上位と中位の材を結合はする縫釘の打ち込み間隔は約22.5cmである。中位と下位の材を結合する縫釘の打ち込み間隔は約20.5cm間隔である。

川船8（図版27） 船底の一部が残存していたが、遺存状態が悪く図化できなかった。残存長約0.6m、残存幅約0.2mある。船材の残存厚は約3.0cmある。石組遺構6385前面の捨石の下から出土した。

部材は1点で敷板と考えられる。船釘は出土していないが、約22.5cm間隔で穿たれたガケを2箇所確認した。

(9) 金属製品 (図版58～61・90～92、附表6)

船釘 (金1～11) 金1～8は縫釘である。長さは9cm前後と12cm前後、14cm前後の個体がある。また、体部から尾にかけて前方に大きく彎曲する個体(金1)、前方にやや彎曲する個体(金3・6・8)、後方にやや彎曲する個体(金4・7)、尾の先端が屈曲する個体(金5)がある。金9～11は通釘である。長さ14cm前後である。金9は体部から尾にかけて前方にやや彎曲しており、体部の釘頭付近にマキハダが巻き付いた状態で遺存する。金11は釘頭裏面に木質が遺存する。金1は石組遺構6004、金2～4・6・7・9～11は調査区東部、金5は石組遺構6385、金8は攪乱出土。

和釘 (金12～17) 金12・13は皆折釘である。長さは6cm前後と10cm前後の個体がある。金14～17は頭巻釘である。長さは4cm前後から9cmを超えるものまでである。金12は石組遺構6385、金13は水制6101、金14・16・17は調査区東部、金15は溝6225出土。

楔 (金18) 上面は平坦で、体部に比べて肥厚する。下端は片刃状を呈する。石組遺構6010検出時出土。

鑿状工具 (金19) 刃部と、刃部に木製柄を取り付けるための口金で構成される。刃部は扁平な角柱形で、上端を欠失する。下端には茎がある。口金は茎に取り付いており、口金内部には木質が遺存する。刃部上端を欠失するため断定はできないが、平鑿とみられる。Ⅲ期整地層上面検出時出土。

釘締め (金20) 上面は使用により平らで、度重なる打撃により傘形に変形する。下端は先細りとなる。護岸6102出土。

鏝 (金21) 端部間の幅は約14cmである。体部中央には4つの刻みがあり、左から順に縦線3本、×印1つがある。1・2本目および2・3本目の縦線間の幅、3本目の縦線と×印左端までの幅、×印の幅がそれぞれ約0.9cm(3分)であり、目盛りとみられる。調査区東部出土。ほかにほぼ同じ法量の鏝が2点出土している。

鉤状製品 (金22・23) 金22は二又に分かれる鉤部と、鉤部の柄に取り付く環状金具で構成される。柄の厚さが約0.6cmであるのに対して環状金具の内径が約2.4cmあるため、柄と環状金具の間には本来、木製柄が取り付いていた可能性がある。これに酷似する民俗資料に、藻刈りという道具がある。金23は二又に分かれる鉤部の柄に木質が付着する。柄中央には1箇所の穿孔があり、孔内部には棒状の金属が嵌まる。本来は木製柄の先端に鉤部が取り付け、それを棒状の金属で留めていた可能性がある。金22と同じような用途の道具か。金22は石組遺構6100、金23は護岸6005出土。

煙管 (金24～28) 金24～26は雁首部、金27・28は吸口部である。金24は火皿と雁首の接続部に段があり、段に数条の線文がある。雁首には花文を彫る。金25は火皿と雁首の接続部に真鍮を接合して段をつける。雁首は途中で段をつけ、段際に線文を施す。火皿の下部1箇所に孔が開く。真鍮製。金26は火皿と雁首の接続部、また後端部に銅を接合して段をつける。金27は前端部に銅を接合して段をつける。段に花文を彫る。金28は前端部に銅を接合して段をつける。段は断面菱形を呈する。段際に数条の線文がある。金24～26・28は調査区東部、金27は高まり6002出土。

指貫（金29） 裁縫をする際に指に嵌めて使用する道具である。水制6101出土。

和鋏（金30） 片側の刃のみ遺存する。調査区東部出土。

鋏（金31） 丸頭である。水制6101出土。

簪（金32） 上部先端のみ遺存する。高まり6002出土。

鉄砲玉（金33） 半球状に鋳たものを2つ合わせて成形する。柱穴列6078の柱穴6079出土。

火打金（金34） 柄に木質が遺存する。第1面掘り下げ時出土。

輪花皿（金35） 五弁の輪花をもつ皿で、底面中央に孔がある。類例として菊花形紅皿が挙げられる。調査区東部出土。

小柄（金36～39） 金36は柄を金属板1枚張りとし、刃方で蠟付けする。柄に桃の紋を取り付ける。金37・38は柄を金属板1枚張りとし、棟方で蠟付けする。金37は柄表面に3～4重の線刻を等間隔に施す。真鍮製。金38の柄表面にも線刻がみられる。金39は柄を金属板2枚張りとし蠟付けする。柄表面には唐草文を高彫りする。金36・37・39は調査区東部、金38は集石6003出土。

刀子（金40） 刃先と茎付近の破片が遺存するが接合しない。ただし、出土状況から同一個体であると判断できる。溝状遺構6550出土。

杓子（金41） 皿部と柄が遺存するが接合しない。ただし、出土状況から同一個体であると判断できる。集石6003出土。

釣針（金42） 上端は輪状に曲げ、下端は尖らせる。石積6001出土。

V字形金具（金43） 2枚1対で、両端2箇所の穿孔に鋏を嵌めて留める。中央にも穿孔がある。鋏で留められた2枚の金具の間には布の痕跡が確認できる。和幡の下端に取り付く金具のようなものとみられる。水制6101から2セット出土した。

毛垂（金44） 柄に繊維を巻き付けてグリップとする。調査区東部出土。

包丁（金45） 刃部は峰から刃先までが幅広く、平面形が長方形を呈する。柄は木製である。菜切り包丁の類いか。調査区東部出土。

和錠（金46） 施錠された状態で出土した。ばねをもつ牡金具と、ばねを受ける牝金具で構成される。牝金具の下部にはレール状の張り出しがあり、そこに特殊な形状の鍵をスライドさせることで解錠できる仕組みとなっている。水制6101出土。

蓋（金47・48） 摘み・台座・本体を鋏留めする。金48は五弁の花形をした台座をもつ。金47は水制6101、金48は護岸6102出土。

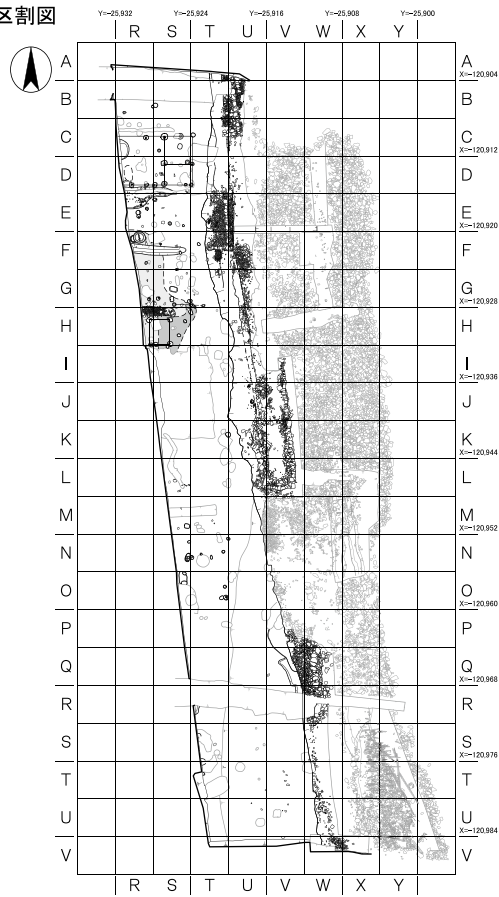
不明鉄製品（金49～51） 金49・50は板状の製品である。金49は平面形が扁平な三角形で、底辺は唐破風状に彎曲する。火打金か。土坑6294出土。金50は一辺が刃状を呈する。集石6003出土。金51は二又に分かれた板状の金具と、柄で構成される。板状の金具は二又の付け根が刃状を呈する。柄は下半に繊維を巻き付けてグリップとする。板状の金具と柄は鋏状の金具で結合する。調査区東部出土。

滓（金52～57） 水制6101、調査区東部、溝6130- I、土坑6425、河岸法面で計6点出土した。金55・57は椀形を呈する。

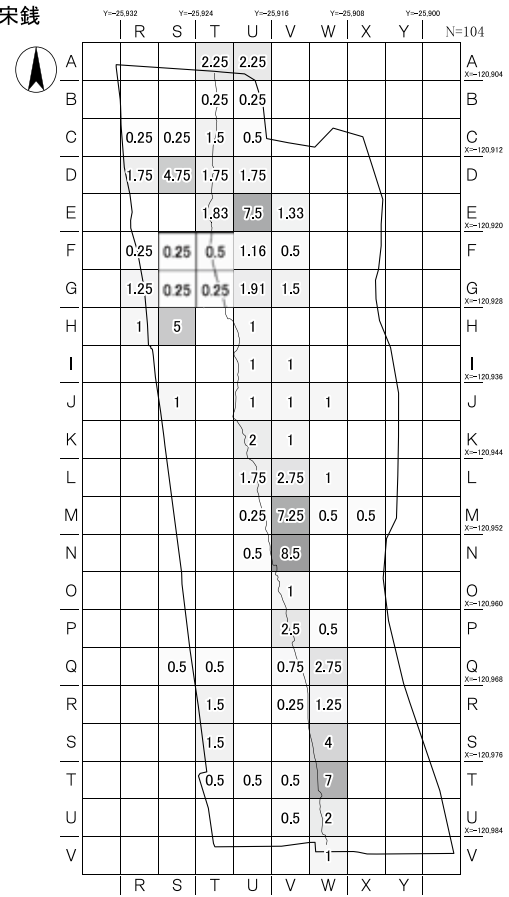
表3 出土銭貨一覧表

	種類	初鋳年	枚数	出土遺構
唐銭	開元通寶	621	2	第2面掘り下げ時ほか
	乾元重寶	758	1	検出時
北宋銭	淳化元寶(真書)	990	2	調査区東部
	淳化元寶(行書)	990	1	石組遺構6100
	至道元寶(行書)	995	2	調査区東部、石組遺構6004検出時
	至道元寶(草書)	995	1	調査区東部
	咸平元寶(真書)	998	1	調査区東部
	景德元寶(真書)	1004	1	調査区東部
	祥符元寶(真書)	1009	6	調査区東部、護岸6136、粗朶沈床状遺構6036ほか
	祥符通寶(真書)	1009	1	第2面掘り下げ時
	天禧通寶(真書)	1017	1	調査区東部
	天聖元寶(真書)	1023	2	調査区東部ほか
	天聖元寶(篆書)	1023	4	調査区東部ほか
	景祐元寶(真書)	1034	2	調査区東部ほか
	皇宋通寶(真書)	1038	7	調査区東部、溝6225、集石6003ほか
	皇宋通寶(篆書)	1038	6	調査区東部、護岸6136ほか
	至和元寶(真書)	1054	1	調査区東部
	至和元寶(篆書)	1054	1	調査区東部
	嘉祐元寶(真書)	1056	1	調査区東部
	嘉祐通寶(篆書)	1056	2	調査区東部、溝6394
	治平元寶(真書)	1064	2	調査区東部ほか
	治平元寶(篆書)	1064	3	調査区東部ほか
	治平通寶(真書)	1064	1	第3面検出時
	熙寧元寶(真書)	1068	8	調査区東部、土留め6300、石組遺構6010、石組遺構6100、溝6130-II(古)ほか
	熙寧元寶(篆書)	1068	6	調査区東部、石組遺構6070、集石6003
	元豊通寶(行書)	1078	11	調査区東部、石組遺構6010、石組遺構6004検出時ほか
	元豊通寶(篆書)	1078	6	調査区東部、石組遺構6010、石組遺構6100
	元祐通寶(行書)	1086	5	調査区東部、土留6301、石組遺構6004検出時ほか
	元祐通寶(篆書)	1086	7	調査区東部、石積6001ほか
	紹聖元寶(行書)	1094	4	調査区東部ほか
	紹聖元寶(篆書)	1094	4	調査区東部、石組遺構6010、水制6101ほか
	元符通寶(篆書)	1098	1	土留6300
	聖宋元寶(行書)	1101	1	石組遺構6004検出時
	聖宋元寶(篆書)	1101	2	調査区東部、石組遺構6385
大観通寶	1107	2	溝6130-II(古)ほか	
政和通寶(分楷)	1111	1	石組遺構6010	
南宋銭	皇宋元寶	1253	2	石積6001ほか
清銭	乾隆通寶	1736	1	水制6101
日本銭	寛永通寶(古)	1636	61	河川堆積6656、護岸6005、石積6001、高まり6002、水制6101ほか
	寛永通寶(新)	1668	41	護岸6102、護岸6005、石積6001、高まり6002、集石6003、水制6101ほか
	寛永通寶(古・新不明)		13	調査区東部、護岸6005、石積6001、高まり6002、水制6101ほか
	寶永通寶(十文銭)	1708	1	高まり6002
	寛永通寶(四文銭)	1768	1	護岸6005
	文久永寶(真文)	1863	1	調査区東部
	二銭銅貨	1873	1	水制6101
	祥符元寶(真書)の模鑄銭		1	第1面検出時
	政和通寶(分楷)の模鑄銭		1	第1面検出時
	政和通寶(篆書)の模鑄銭		1	土留6300
雁首銭		2	調査区東部、石組遺構6004検出時	
不明	銭種不明		20	調査区東部、護岸6005、高まり6002、集石6003、水制6101ほか
	合計		256	

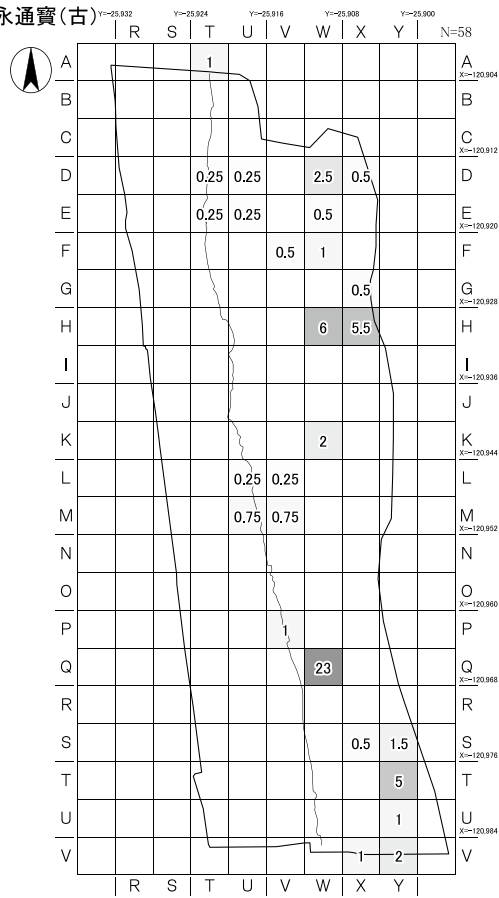
地区割図



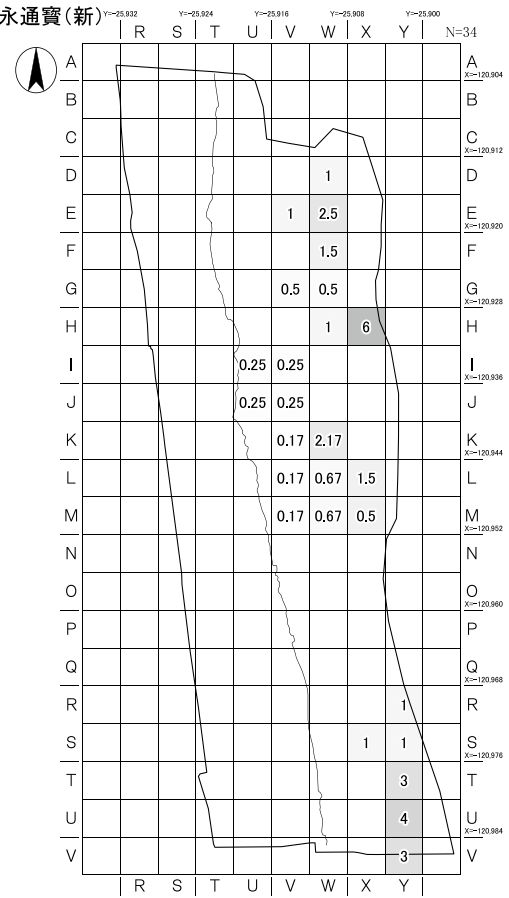
北宋銭



寛永通寶(古)



寛永通寶(新)



※ 取り上げが複数のグリッドをまたぐ場合は、1をグリッド数で割った数値を、各グリッドに計上した。



図40 銭貨出土分布図 (1 : 800)



地点	体積(cm ³)	重量(g)	イシガイ科	マツカサガイ	ササノハガイ	シジミ科	タニシ科	カワニナ科	その他
1	257	199	○?						イシガイ科:小片
2	2271	1737	○	○		11			イシガイ科:合弁有
3	-	-				1	1		
4	590	465	○?	○					イシガイ科:小片
5	5267	5620	○	○		98	3	2	イシガイ科には菌をもたないものを含む
6	817	530	◎	○					イシガイ科・マツカサガイ:殻皮のみ
7	3039	2813	○	○			1		イシガイ科:合弁有、多数が殻皮と殻の小片
8	1613	1680	○					1	イシガイ科:小片多数
9	4680	4509	◎	○	○		3	2	イシガイ科・マツカサガイ・ササノハガイ:合弁有

※体積は、小数点以下を切り捨て表記。重量も小袋は切り捨て表記。

※数値は最小個体数、◎:最も割合が多い、○:普通にみられる、○?:イシガイ科を疑うもの(小片などで同定困難)

図41 貝類出土分布図 (1 : 500)

(10) 銭貨 (図版62、表4)

唐銭・北宋銭・清銭・国産銭貨が32種類256点出土した。基本的に1種類につき拓影を1つ掲載し、種類ごとの出土点数は表4に示した。

図40に北宋銭、寛永通寶(古)、寛永通寶(新)の調査区内における出土分布を示した。北宋銭は、調査区西部では明治時代以降の削平が及んでいない北側に集中して出土するほか、調査区東部の河岸法面の土留・石組遺構からも出土している。一方、寛永通寶(古)は、調査区東部の河岸法面から河岸水際部にかけての河川堆積や護岸、寛永通寶(新)は河岸水際部の護岸などから出土している。このように、各銭種の分布には、少しずつ重なりを持ちつつも、調査区西部に遍在するものと、調査区東部に遍在するものがあることを指摘できる。

(11) 貝類 (図41)

貝類は、Ⅳ期の溝状遺構6550、溝6130-II(新段階)から出土した。両者で出土する貝種に大きな違いはないが、溝状遺構6550北側ではシジミ科が多く出土した。

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 2) 分類の基準は1・2次調査と同様にした。「乙訓在地形」という用語は伊藤2016に基づく。
また、次の文献を参考にした。

①伊藤淳史「いわゆる“乙訓在地形土師器”と呼称される中世土師器皿について」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2014年度 京都大学文化財総合研究センター 2016年、②伊野近富「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1980 3』京都府教育委員会 1980年、③加納敬二「乙訓在地形の土師器皿について」『平安京左京北辺四坊 第1分冊(公家町形成以前)』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年、④小森俊寛「出土遺物」『石清水八幡宮 発掘調査報告書』八幡市埋蔵文化財発掘調査報告第56集 八幡市教育委員会 2011年、⑤原秀樹『勝竜寺城跡 外郭土塁・空堀の調査』長岡京市文化財調査報告第73冊 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 2019年、⑥山口均「乙訓地域の中世土器(土師器皿)編年について」『長岡京跡 修理式遺跡・中海道遺跡』向日市埋蔵文化財調査報告第71集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2006年

- 3) 類例に、平安京左京一条四坊九町出土の白磁観音像頭部(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-8)や平安京左京五条三坊十一町出土の白磁観音像台座部分(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2015-7)、京都大学吉田南構内AN22区出土の青白磁置物(京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度)などがある。
- 4) 部位の名称については、今回出土の川船がこういった地域のこういったグループの船であるかが現段階では明確でないため、調査地周辺に分布する史料や民俗事例から知られる船の部位名称を参考としつつも、無理に対応させていない。

部位の名称は、以下の文献および史料を参考にした。①横出洋二「伏見の船大工」『山城郷土資料館

報』第9号 1991年：伏見船大工からの聞き取り調査をまとめられたもので、「オモテ」「オモテジキ」「シキ」「トモ」「タナ」「カワ」「フナバリ」などの名称が知られる。②「渡し舟新造請書」『石田神社文書』：19世紀前葉の伏見船大工が記した文書で、「みよし（水押）のどこみ」「道敷（＝胴敷）」「供敷（＝艫敷）」「側」「船梁」の名称が知られる。③「高瀬覚書」『若林正治氏所蔵文書』No.19、「（高瀬上下船賃他）手扣」『大塚隆氏所蔵文書』No.30：江戸時代の高瀬船の造船に関する史料で、「表立板（表縦板、表建板）」「艫立板（艫縦板、艫建板）」「鋪（＝敷）」「側」「元木（＝側）」「船梁」などの名称が知られる。④出口晶子「若狭湾の刳船－コチブネ・マルキブネ－」『近畿民具』第15輯 1991年、廣瀬直樹「船体構造からみた船材接合概念の地域性」『国際常民文化研究叢書』12－東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究－ 2018年：下棚と敷を繋ぐ刳材は、淀川流域および瀬戸内地域ではこれまで確認されていない部材であるが、若狭湾から北陸、日本海沿岸にかけての地域で「オモキ」「コマキ」という名称で類似した部材が確認できる。本報告ではこの名称を借り、「オモキ様の刳材」と呼ぶことにした。

- 5) 「前後継ぎ」と呼ばれる技法である（出口晶子「南山城地域の木造船－木津川・巨椋池を中心に」『海事史研究』第81号 海事史学会 2024年）。発掘現場で甲南大学教授の出口晶子氏からご教授を賜った。
- 6) 材5の図上右手の辺が幅広いことを考慮すると、平田船を除いて、こちら側に表が来る事例は少ないので、艫が来る可能性が高いという。この点については、東京大学名誉教授の安達裕之氏からご教授を賜った。また、材7～9は、敷板と比べてかなり厚みがあり、調査地周辺の川船の艫立板に特徴的にみられる「角」という部材を想起させる。
- 7) ガケは「釘を入れる挿入口」、埋木は、防水のためにガケに埋める木材である（前掲横出1991）。マジハダは、防水のために材と材の間に詰める縄である。
- 8) 奈良文化財研究所の前田仁暉氏からご教授を賜った。
- 9) 前掲横出1991。
- 10) キゴロシは「板側面をカナヅチでコロス（へこませること）。これをすると進水後板が水を含んで膨張し、完全に密着する」（前掲横出1991）。門技法は「前後の船底部材を固着するさいに、材同士を重ね合わせたところへ、船底中央に縦の角材をおき、交差する横梁との木組みによって固定する方法」（前掲出口2024）。漆は、主に北陸地方の日本海沿岸において、防水機能を高めるために材と材の結合面に塗布する。

参考文献

- 黒坂貴裕「第3章 観察の要点」『出土建築部材における調査方法についての研究報告』科学研究費補助金基盤研究（A）課題番号：18202026「遺跡出土の建築部材に関する総合的研究」（平成18年度～21年度） 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2010年
- 松永修平・柏田有香・三好孝一『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告2023－9 公益財団京都市埋蔵文化財研究所 2025年

5. まとめ

(1) 遺構の変遷

今回の調査では、室町時代中葉から近代までの6面4時期の調査を行い、各時期の遺構・遺物を確認した。これまでの調査成果と同様、室町時代後葉に大規模な整地が行われており、これ以後明治時代まで整地が繰り返されることがわかった。以下、各時期の変遷を概略する。

Ⅲ・Ⅳ期（室町時代中葉から安土桃山時代）（図42） 顕著な遺構として、溝6130・6225・6394などがある。これらの溝は複数回にわたって掘り直されている。溝による区画内には、建物6277、礎石列6131、柱穴列6203、石列6250・6280がある。これら遺構の主軸方位は、隣接する溝と同じ方位を指向する。なお、調査区東側の遺構はⅡ期の河道・護岸によって削平されていることから、調査地に存在した集落は、調査区の東側、現桂川河道内にまでおよぶ規模であった可能性が高い。

今回調査区では溝による方形区画の存在を確認したが、1・2次調査の2～5区でも同規模の溝（堀2123・2299・2350・溝3055・3100）による方形区画を確認している。調査地に、集落内も溝によって区画された集落が存在したことは確実である。

また、今回調査区では北に対してやや東に振る溝・建物・礎石列などを検出しているが、調査地南側の1～2次調査2・5区では北に対してやや西に振る溝・堀・柱列を検出しており、調査地の北側と南側で遺構の方位が異なる。

一方、両調査区の間にあたる2次調査3区では、く字状に屈曲する溝3100を検出しており、この溝は北半が今回調査区に近い振れ、南半が2・5区に近い振れをもつ。この方位の振れの違いが何に起因するのかは今後の課題であるが、調査地南側の振れが江戸時代以降の與杼神社本殿および参道の振れとほぼ一致することをここで指摘しておく。

Ⅱ期（江戸時代前半）（図43） 調査区東部では、桂川沿いで石を用いた護岸6650・6651や、それに付属する土留6300・6301、石組遺構6004・6010・6100・6385を検出した。これらの遺構は、護岸構築土から出土した遺物の時期から17世紀前半に構築されたことが明らかとなった。護岸を構成する遺構のうち、石組遺構6010・6385、土留6300・6301の構築資材に川船が転用されていた。

調査区西部では、畦状高まり6106や溝6167、礎石列6163、石敷遺構6075などで分割された、間口約5～6m、奥行き8m以上の東西に長い区画の内部に、建物6184・6209や柱穴列6098、水溜6046・6047などを確認した。土地区画や建物方位は、Ⅲ・Ⅳ期のものを踏襲していない。また、土地の整地は各区画単位で行われているため、区画毎で生活面に高低差が生じており、それはⅠ期も同様である。

調査地は、江戸時代に水垂村が位置していた場所にあたる。今回の発掘調査では、17世紀前半に桂川沿いの護岸が整備されるとともに、中世の土地区画を踏襲しない土地区画が整備されたことが明らかとなった。この段階で整備された東西に長い土地区画が接続する様子は、いわゆる短冊形地割の特徴を備えている。これらは、1623年に始まる淀城築城に伴う城下町水垂町の整備に関連す

Ⅱ期(江戸時代前半)



Y=-26,000

Y=-25,950

Y=-25,900

土坑4036 水制4035 4区
 柱穴4018 護岸4031
 柱穴4019 溝4030
 柱穴4023
 タタキ4025
 土坑4029

X=-120,850

石組遺構 6004
 畦状高まり 6044 建物6209 土留 6301
 水溜6046 水溜6047 石組遺構 6010
 溝6167 柱穴列6098 護岸 6652
 礫敷6075 整地Ⅲ 土留 6300 6区
 建物6184 整地Ⅴ 石組遺構 6100

X=-120,900

X=-120,950

石組遺構 6385

護岸 6650

X=-121,000

3区

井戸2100

柱列2210

溝2200

2区

X=-121,050

土坑5005
 溝5019
 溝5021 落込5011
 5区



図43 遺構変遷図2 江戸時代前半 (1:1,200)



図44 遺構変遷図3 江戸時代後半~明治時代 (1:1,200)

るものと考えられる¹⁾。

また、江戸時代前期の護岸構築資材として、多数の川船が転用されていることが明らかとなった。通常は資源のリサイクルのため解体される川船が、船形を保った状態で転用された理由については検討を要するが、いずれにせよ淀川水系の水運業の拠点であった水垂村（町）とその周辺では多数の川船が存在しており、それらを再利用できたことが要因と考えられる。

I期（江戸時代後半から明治時代）（図44） 調査区東部では、石を用いた護岸6005・6102・6136や、それに付属する水制6101がある。護岸は、II期の護岸6650・6651の東側に構築されている。今回の調査でも、2・3区と同様に、江戸時代後期と明治時代に護岸が修築されたことが明らかとなった。

調査区西部では、II期以来の区画を踏襲する畦状高まり6106、石敷遺構6075や、石列6041・6045による区画の内部で、建物6051や柱穴列6039・6208・6181、礎石列6057などを確認した。II期に成立した土地区画をほぼ踏襲するかたちで、遺構の展開が認められる。

（2）護岸について

今回の調査では、おおきく江戸時代前半、江戸時代後半、明治時代の護岸があることが明らかとなった。いずれもほぼ同じ位置に作り直されていることから、近世・近代を通して連綿と維持・管理されてきたとみられる。当地域における河川管理の実態を理解するうえで重要な遺構であるので、本節では史料を交えつつ詳しく触れておきたい。

護岸の立地 護岸の構築された立地は、調査区東部の河岸法面と河岸水際部である。護岸構築の基盤は近世以前の整地土であり、構築時に河岸法面をスロープ状に切土しているが、法面より上部にあると推測される、法肩や天端の構造については今回の調査では明らかにすることができなかった。護岸は、現在の河岸法面に位置する溝や河道によって形成された傾斜面を一部切土して構築されたと考えられる。

ここで史料を確認すると、現在の河岸法面をなす傾斜面と護岸は、江戸時代中期には「淀川堤²⁾」、近代には「御国役堤防³⁾」と呼称されており、当時は堤防という認識であったことがわかる（図44）。なお、堤上には「御国役通⁴⁾」、「丹波道⁵⁾」、「往還筋⁶⁾」などと呼称される南北道路が通っていたようであるが、法肩が桂川による浸食のため削平されている可能性があり、調査では確認できていない。

護岸の構造 護岸の構造の変遷をみると、斜面に石材を敷く構造はどの時期にも共通するが、法尻に杭列を施す工法は江戸時代後期の護岸のみにみられる。史料によると、江戸時代前期に描かれた「洛外図屏風⁷⁾」では、水垂町の範囲に石を敷いた護岸が表現されている。一方、江戸時代中後期に描かれた「淀川両岸図巻画稿⁸⁾」や「天保四年火災図⁹⁾」では、斜面は土手で草木が生えており、護岸のような構造は表現されないが、法尻に2条程度の杭列が表現されている。調査成果と絵図が対応することを指摘できる。ただし、幕末から明治時代にかけての史料である『淀川両岸一覽¹⁰⁾』や『乙訓郡役所文書¹¹⁾』では、石積擁壁のような表現が認められるものの、現在までの調査では、同様の構造物は確認できていない。

なお、護岸に用いられる石材については、すでに1・2次調査で明らかになっているが、どの時期の護岸も、砂岩・頁岩ないし粘板岩・ホルンフェルスを主体とすることが多く、そこにチャートや花崗岩が含まれる。このうち、頁岩・粘板岩については、男山周辺もしくは宇治川を遡った天ヶ瀬付近にある天ヶ瀬層から採取されたものに酷似している。特に天ヶ瀬層から採取される石材は、宇治川太閤堤跡（宇治市）で検出された護岸遺構や水制遺構でも用いられており¹²⁾、史料上でも、17世紀前半には摂津・河内国での堤や川除の工事に用いるために、淀二十石船を動員して「宇治石」が運ばれている¹³⁾。また、明治15年（1882）の羽束師橋架橋工事の物品リストにも「宇治石」がある¹⁴⁾、明治17年（1884）の東高瀬川の堤防決壊に伴う水留工事でも「宇治石」が船で運搬されている¹⁵⁾。このように、天ヶ瀬付近から採取された頁岩ないし粘板岩は、近世以降の当地域における土木工事では普遍的に使用されていたとみられ、今回調査の護岸で使用された石材も同じ採取地から入手された可能性が高い。

護岸とその周辺の管理について 河川周辺の施設には、護岸・水制といった川除をはじめ、堤防、堰・樋、橋、渡しなど多様なものがある。しかし、それらを管理する者、実際に施工する者、出費する者は施設によって一様ではない。

堤防の場合は、近世の畿内の大河川では国役普請（町村の石高に応じた費用・労働力の提供を、国内の各町村に求める）という普請形式が一般的に用いられており、その初源は少なくとも文禄元年（1592）まで遡ることが指摘されている¹⁶⁾。淀地域の場合は、桂川右岸堤防のうち277間分を公儀国役普請（幕府が費用の一部を負担、残りを国役として徴収）によって修復し、支配は京都代官玉虫左兵衛が行うことが江戸時代中期の史料に記されている¹⁷⁾が、その他の堤防は城主が支配していたようである¹⁸⁾。今回の調査地に位置する「御国役堤」はその名称から前者に該当するとみられ、その人足は国内から徴発されたと考えられる。ただし、この堤防の管理が江戸時代を通してどのように変化したのかは不明である。

川除（護岸・水制）の場合は、例えば、摂津・河内国では堤防と同じ国役普請の形式をとっていても、人足の出所が異なる場合があった¹⁹⁾。淀地域の場合は、江戸時代中期は淀城主が費用負担・支配していたようであるが、普請形式については不明である²⁰⁾。

その他、堤防に付属する施設として樋、渡しがある。江戸時代中期の淀地域において、樋については、出費は城主や地頭²¹⁾、支配は城主であった²²⁾。渡しについては、新造・修復は町で行うことになっており、城主は関与しなかった²³⁾。なお、河川支配については京都町奉行が行った²⁴⁾。

以上のことから、今回の調査地に位置する堤防、護岸、そして河川については、その普請形式や管轄が異なっていた可能性がある。今後の調査で、時期による護岸構造の差異などから、普請形式や管轄の違いを示す差異を見つけ出せることができるのかが課題となる。

（3）川船について

今回の調査では、江戸時代前期の川船が複数出土した。いずれも構造船であるが、各部材は船釘で結合された状態で出土した。これは全国的にみても非常に稀有な事例であり、当資料は造船の歴

史を理解するうえで重要な資料といえる。ひいては船業とともに発展してきた当地域の歴史を考えるうえでも重要な資料といえるので、本節で少し詳しく触れておきたい。

川船の年代 川船は、土留6300・6301の構築材として転用されているが、当遺構の構築土からは京都11 A段階（1590～1620年頃）の土器が出土した。また、当遺構の前面に構築された石組遺構6003・6010・6100・6385の構築土からも、京都11 A段階の土器が出土している。一方、土留および石組遺構の構築土から寛永通寶（1636年初鑄）は出土しなかった。以上のことから、川船が転用された時期は16世紀末から17世紀前葉頃と考えられる。さらに前節で述べたとおり、土留や石組遺構は、城下町水垂町の整備（1623年以降）に伴うものと理解できるため、川船が転用された時期は17世紀前葉に限定できる。これを踏まえると、造船時期は17世紀初頭から前葉と推定できる。^{25・26)}

川船の規模 川船3や川船6など出土した部材から復元した高さは0.5m弱である（図50）。幅については、敷板が3枚構成であった場合、3.8m前後となる。敷板の厚みは、4cm前後である。以上の点から、全長10m前後の小型船と推定される。²⁷⁾

構造および形態の特徴 今回出土した川船の構造や形態の特徴を列挙する。

①敷板・側板間の刳材の使用について。この特徴は、淀川流域を含む瀬戸内地域では考古資料や民俗資料はもとより、文献史料や絵画史料でも確認されていない。敷板と側板の間に刳材を用いる船体構造は、若狭湾から北陸、さらには東北までの日本海沿いで確認されており、刳材は「オモキ」などと呼称されているが、本事例との関係は不明である。²⁸⁾ 今後、調査地周辺の船の地域色や通時的な変化を考察するうえで重要な特徴である。

②川船3で確認した材4・5について。これは表敷板や艫敷板、あるいは胴敷の拡張部分を構成する部材と考えられる。出口晶子氏は、現在の淀川流域の民俗資料や文献史料の調査から、材4・5と類似する部材である「斜め板」・「三角板」が、桂川流域や淀川本流域の木造船に用いられており、南山城地域の木造船に強固にみられる特徴のひとつであることを指摘している。²⁹⁾（図45）。なお、川船3の表敷板や艫敷板、あるいは胴敷の拡張部分を構成する部材が重ね継ぎされている点（図29・30）、舷側が「棚」と「側」で構成されるフタカワブネである点なども、南山城地域の民俗資料と共通する特徴である。出土した川船が、南山城地域に現存する川船と共通する技術で造船されたことを指摘できる。

③出土した船釘、ガケ、マキハダについて。これらは現在使用されるものと形態・特徴がほぼ共通している。17世紀初頭から前葉の当地域に、現在と共通する技術が確立していたと評価できる。

④部材の樹種について。各部材の樹種を同定した結果、船底を構成する敷板にはマツ属、舷側を構成する棚板・側板・オモキ様の刳材にはヒノキやサワラなどのヒノキ科の木材を用いてい

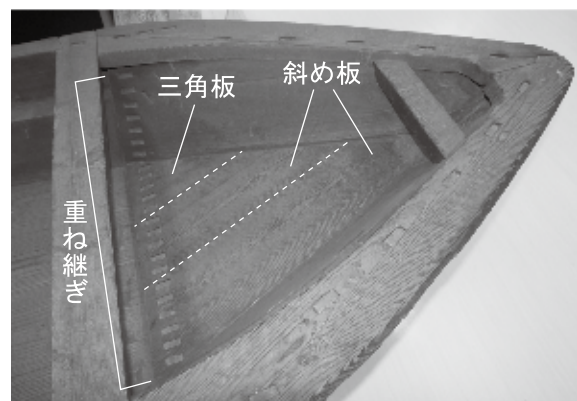


図45 南山城地域の現存川船 表細部
（八幡市ふるさと学習館展示、中谷俊哉撮影）

たことが明らかとなった。部位毎に木材の樹種を使い分けたと推察する。こうした木材の樹種の使い分けについて、船体の強度や安定性の確保など、付章で検討する部材の接合方法を含めた船体構造の分析、そして地域的な特徴などについて今後検討していく必要がある³⁰⁾。

土留への転用状況 転用された川船は、船形の一部を保った状態で出土した。基本的には、転用に適さない表と艫は除去し、胴のみを再利用する。胴は、さらに2通りの分解方法がある。ひとつは左舷側の棚板から側板にかけて、右舷側の棚板から側板にかけて、敷板の3パーツに分解し、各パーツが板状になったところで転用する方法である。このとき、3パーツのいずれかにオモキ様の刳材が付随してくるが、特に意図して使い分けされていない。もうひとつは、左舷と右舷の2パーツに分解し、断面がL字形のパーツを作り転用する方法である。

このように、今回出土した川船の転用方法は、船体をすべて解体するのではなく、一部だけを解体して、板状ないしL字状の形に板材を組み合わせた状態で用いることを特徴とする。そのため、多くの船釘は船材に打ち込まれたままとなっている。

通常、船材の再利用にあたっては、大阪市中之島蔵屋敷跡の高松藩船入転用船材で検討されたように、廃船後に船を引き取った業者が、解体して木材と釘に分別して、それぞれがリサイクルされることが多い³¹⁾。今回の事例は、そのような船材を再利用するための流通システムを経由したのではないと考えられる。

第2章で述べたように、調査地に所在した水垂村は、淀川水運に関わる水上輸送の拠点であった。護岸の構築にあたり、船材を再利用するための流通システムを経由せず、水上輸送の拠点という特性を活かして、現地の廃船をそのまま構築材として調達した可能性が高い。このような、現地にある資材を調達する方法が、護岸および堤防の普請の形式とどのように関係するのか、今後検討していく必要がある。

註

- 1) 2次調査4区で検出されたⅡ期の水制4035について、報告では構築土出土遺物の検討から、寛永14年(1637)の永井尚政による木津川の河道付け替え工事と連動して構築された可能性が指摘されている。今回調査の成果をふまえると、調査地内における江戸時代前期の護岸は、全体が同時に構築されたわけではなく、17世紀前半を通して継起的に構築された可能性がある。
柏田有香「まとめ(1) 今回の調査成果」『長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2023-9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2024年
- 2) 「淀領御引渡二付御尋書」『淀領引継文書集』享保八年(1723)
- 3) 「紀伊郡第一区水垂村字一之坪地籍図」『常念寺所蔵文書』明治6年(1873)
- 4) 「扣図」『大徳寺文書』No.38 明治時代初頭
- 5) 「淀城絵図」『上月家文書』No.3149 江戸時代
- 6) 「郷中諸用申伝覚書」『淀領引継文書集』江戸時代中期
- 7) 「洛外図屏風」(笹井家本) 17世紀後半
- 8) 「淀川両岸図巻画稿」宝暦十三年(1763) アルカンシエール財団所蔵
- 9) 「天保四年火災図」『渡辺(美)家文書』天保四年(1833)

- 10) 『澱川兩岸一覽』文久元年（1861）
- 11) 『乙訓郡役所文書』明治時代
- 12) 宇治市歴史資料館『宇治川太閤堤跡』 2009年
- 13) 「乍恐謹而言上仕候御訴訟」『念仏寺文書』No.11 延宝二年（1674）
- 14) 「桂川筋新規架橋仕様帳」『藤田（権）家文書』No.931 明治15年（1882）
- 15) 「三栖村堰止切所入費御調書」『藤田（権）家文書』No.592 明治17年（1884）頃、「三栖村東高瀬川堤防修築ニ付請取其他書類入」『藤田（権）家文書』No.941・943 明治17年（1884）
- 16) 村田路人『日本史リブレット93 近世の淀川治水』山川出版社 2009年 pp14-16
- 17) [史料a]「淀領御引渡ニ付御尋書」享保八年（1723）『淀領引継文書集』
[史料b]「郷中諸用申伝覚書」享保八年（1723）頃『淀領引継文書集』
- 18) 「御普請積方雜記控」享保三年（1718）『田辺（陸）家文書』
- 19) 註16書籍 p.50
- 20) 註17 [史料a]、註18史料
- 21) 註17史料
- 22) 註18史料
- 23) 註17 [史料a]
- 24) 註18史料
- 25) 造船時期が推定できるのは、一般に川船の耐久時期が10～20年前後とされていることによる。明治生まれの水垂村元船頭への聞き取りによれば10年ほどで新造、江戸時代中後期の伏見船大工に関する史料によれば10年経つと修理できないほど破損、また10年間は修理保証がきくということである（横出洋二「伏見の船大工」『山城郷土資料館報』第9号 1991年）。
- 26) 2次調査の4区で検出された水制4035でも、構築材として再利用された川船が出土している。水製の構築土からは17世紀第2四半期の土器群とともに、寛永通寶（古）が出土していることから、造船時期として初鑄年である1636年から1650年前後から以前とする年代が与えられている。当該の川船は解体されたうえで再利用されているため、今回出土した川船のような復元は難しい。しかし部材の観察からは、敷板と側板とが割材を介さずに直接、通釘によって結合されていた可能性が指摘されている（前掲柏田註1）。4区出土の川船と、6区出土の川船との年代差や造船技術の違いの評価については、今後の課題である。
- 27) 出口晶子氏に出土資料を実見していただき、ご教示を賜った。
- 28) 出口晶子「若狭湾の刳船－コチブネ・マルキブネ－」『近畿民具』第15輯 1991年
廣瀬直樹「船体構造からみた船材接合概念の地域性」『国際常民文化研究叢書』12－東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究－ 2018年
- 29) 出口晶子「南山城地域の木造船－木津川・巨椋池を中心に」『海事史研究』第81号 2024年
- 30) 下記の史料や文献で部材ごとの樹種の使いわけについて言及されている。
「渡し舟新造請書」文政六年（1823）『石田神社文書』
岡島永昌「民家壁板による大和魚梁船の船体復元」『由良大和古代文化研究協会研究紀要』第21集 2017年
- 31) 南秀雄「第三章第2節 船材の検討」『大阪市北区 中之島蔵屋敷跡発掘調査報告V－高松藩船入の調査－』一般財団法人大阪市文化財協会 2024年

付章1 出土した川船の接合技法について

中谷俊哉・中谷正和

今回の調査では、石組遺構6010、土留6300・6301から、構築資材として転用された江戸時代前期の川船が出土した。石組遺構や土留を構築するにあたって複数の川船を解体して利用されたものであるが、川船1～7は一部の部材が釘によって接合された状態で出土した。この章では、出土した川船から確認した、釘による各部材の接合技法について検討する。

(1) 分類

各部材の接合技法の整理にあたって、釘の種類と打ち込み方法、釘の打ち込み面について分類す

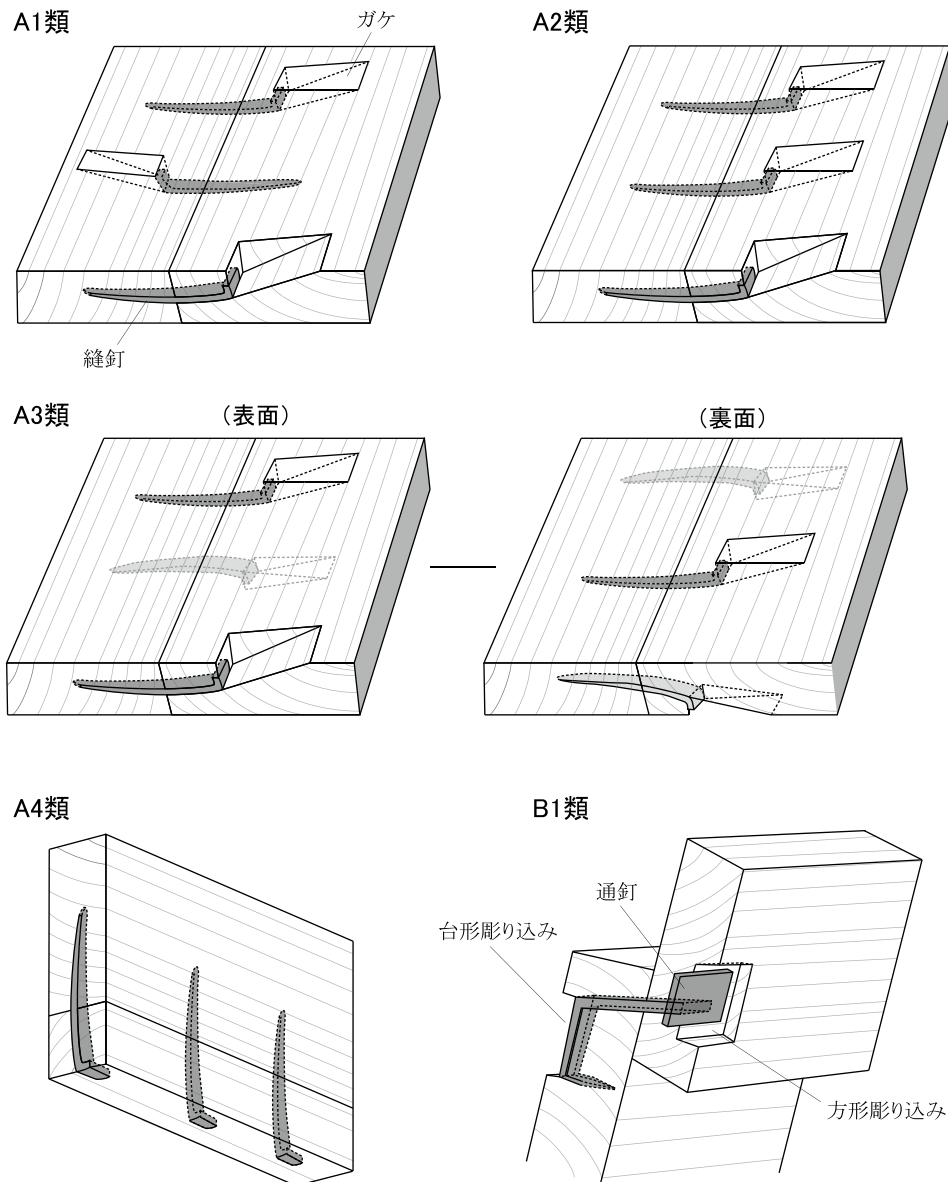


図46 釘の種類と打ち込み方法分類図

る。なお、釘が残存していない場合であっても、釘穴が残存する位置や打ち込まれた釘の観察から、打ち込み方法や打ち込み面を判断した。

1) 釘の種類と打ち込み方法 (図46)

A類：部材の小端と小端を合わせ、縫釘で接合するもの。5つに細別できる。

A1類：材の片面側の合わせ目を挟み、双方向に縫釘を打ち込むもの。打ち込んだ釘が部材から突出しないようにするためのガケを設ける。

A2類：材の片面側の合わせ目を挟み、一方方向に縫釘を打ち込むもの。打ち込んだ釘が部材から突出しないようにするためのガケを設ける。

A3類：材の合わせ目を挟み、片面ずつ交互に縫釘を打ち込むもの。釘の打ち込みは一方方向である。打ち込んだ釘が部材から突出しないようにするためのガケを設ける。

A4類：部材の横断面を貫通するように、一方方向に縫釘を打ち込むもの。ガケは設けない。

A5類：縫釘が用いられているもので、打ち込み方法の法則性が不明なもの。

B類：部材の面と面を合わせ、通釘で接合するもの。部材を貫通した先端側（尾）は折り返す。2つに細別する。

B1類：打ち込んだ釘が部材から突出しないように、釘の頭側を取めるための方形彫り込みと、釘の先端側（尾）を取めるための台形彫り込みを設けるもの。

B2類：釘を取めるための彫り込みが認識できないもの。

C類：部材同士を、和釘もしくは皆折釘で接合するもの。

2) 釘の打ち込み面

a類：船内側から釘を打ち込む釘穴列。

b類：船内側と船外側から交互に釘を打ち込む釘穴列。

c類：船外側から釘を打ち込む釘穴列。

d類：釘の打ち込み面が認識できないもの。

(2) 出土船の諸元と部材接合状況

1) 川船1 (図47、表5・8)

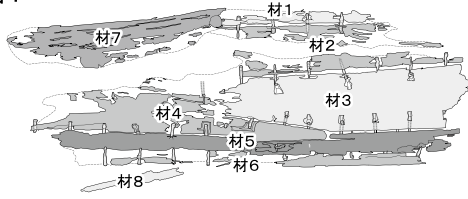
諸元：残存長約3.07m、残存幅約1.22mある。6つの部材を、6つの釘穴列で接合している。部材を接合する船釘は縫釘が出土した。

釘穴列：釘穴列アは材1と材2の接合部にある。胴敷板を接合する。釘は縫釘を4本確認した。接合方法はA1a類である。釘穴の間隔は22.3～23.0cmで中央値は22.6cmである。

釘穴列イは材2と材3の接合部にある。胴敷板を接合する。釘は縫釘を7本確認した。接合方法はA1a類である。釘穴の間隔は19.8～25.4cmで中央値は22.9cmである。

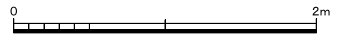
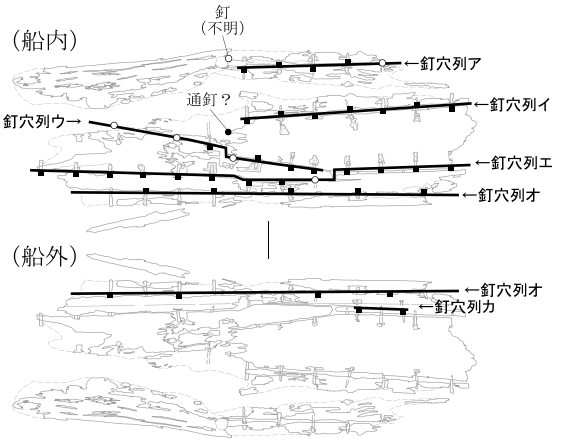
釘穴列ウは材3と材4の接合部にある。胴敷板を接合する。釘は縫釘を6本確認した。接合方法

川船1

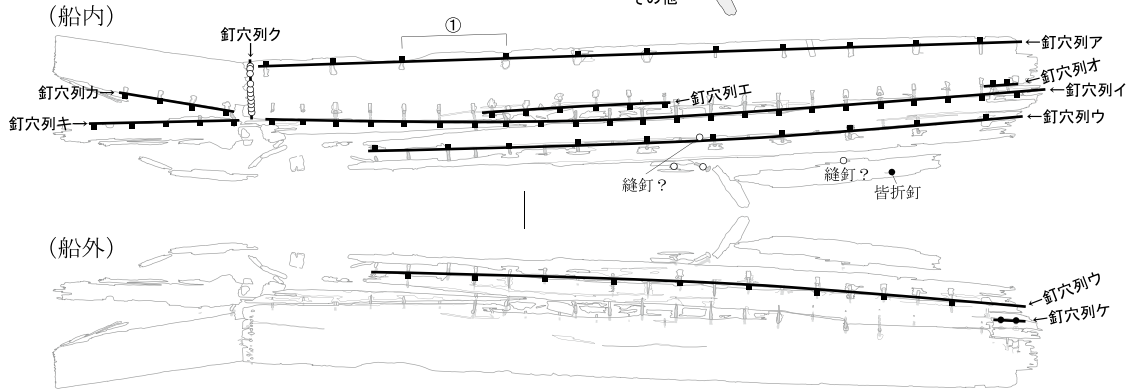
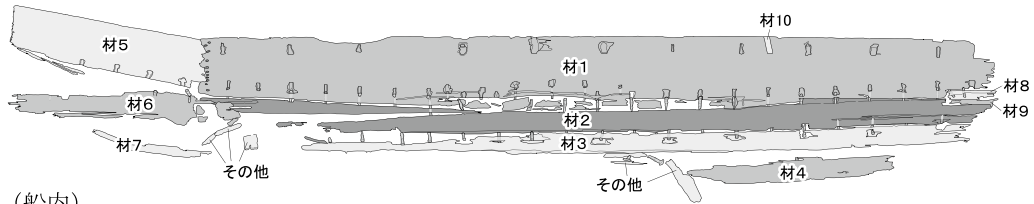


凡例

- 釘列のライン
- 其の面において、図上での上方向から下方向へ釘を打ち込む
- 其の面において、図上での下方向から上方向へ釘を打ち込む
- どの面においてかは分からないが、図上での上方向から下方向へ釘を打ち込む
- どの面においてかは分からないが、図上での下方向から上方向へ釘を打ち込む
- 其の面から逆面へ釘を打ち込む
- 打ち込む方向が分からない釘



川船2



川船3

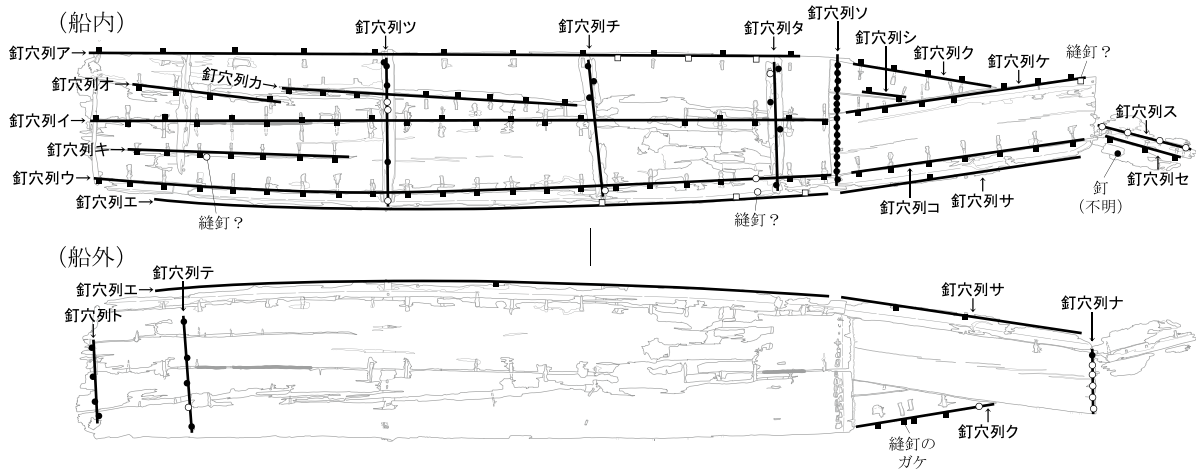
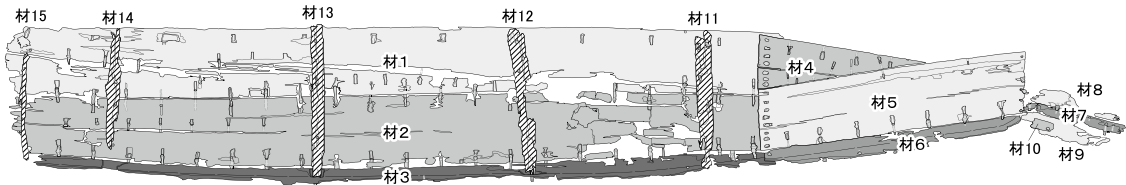


図47 部材と釘の配置 [川船1～3] (1:50)

はA5a類である。釘穴の間隔は14.6～37.3cmで中央値は19.1cmである。材3～5が接する部分を互いに切り欠いて接合している。

釘穴列エは材3・5と材4・5の接合部にある。胴敷板と胴のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を11本確認した。接合方法はA2a類である。釘は胴敷板から打ち込む。釘穴の間隔は21.4～24.6cmで中央値は22.5cmである。

釘穴列オは材5・6の接合部にある。側板とオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を9本確認した。接合方法はA3b類である。釘は側板から打ち込む。釘穴の間隔は19.7～51.2cmで中央値が22.6cmである。

釘穴列カは、材5・6の接合部にある。胴側板と胴のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を2本確認した。接合方法はA5c類である。釘穴の間隔は29.3cmある。胴敷板とオモキ様の刳材の接合を部分的に補修したものと考えられる。

小結：部材の小端側を接合するものと、小口側を接合するもの、補修痕跡がある。接合される部材は、すべて胴の部材である。

部材の小端側を接合するものには、①敷板を接合する釘穴列ア・イのA1a類、②敷板とオモキ様の刳材を接合する釘穴列エのA2a類、③側板とオモキ様の刳材を接合する釘穴列オのA3b類がある。釘穴の間隔は、22～23cm台が主体をなすが、釘穴列オでは19～51cmとばらつきがある。

部材の小口側を接合するものには、④敷板を接合する釘穴列ウのA5a類がある。釘穴の間隔は14～37cmとばらつきがある。部材は接する部分を互いに斜めに切り欠いて継ぐ。

補修痕跡は釘穴列カのA5c類である。

2) 川船2 (図47、表5・8)

諸元：残存長約6.55m、残存幅約1.30mある。10の部材で構成されており、8つの釘穴列を確認した。部材を接合する船釘は縫釘が出土した。

釘穴列：釘穴列アは材1と欠損材の接合部にある。胴敷板にある。釘は残存していない。接合方法はA5a類である。材1で確認できた釘穴の間隔は42.4～68.1cmである。これは木質の腐朽のため、釘穴の多くが遺存していなかった可能性が考えられる。現在確認できる釘穴痕跡の間隔が、22cmの倍数であることは示唆的である。欠損材側から打ち込まれた可能性を考えると、A1a類となることも考えられる。また図47①の箇所を避けて縫釘が打ち込まれたため、その部分の打ち込み間隔がほかよりも広い。①の箇所には節が見当たらず、その理由は不明である。

釘穴列イは材1と材2の接合部にある。胴敷板と胴のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を21本確認した。接合方法はA2a類である。釘は胴敷板から打ち込む。釘穴の間隔は20.0～23.5cmで中央値は22.5cmである。

釘穴列ウは材2・3の接合部にある。胴側板と胴のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を19本確認した。接合方法はA3b類である。釘は側板から打ち込む。釘穴の間隔は17.8～26.6cmで中央値は22.6cmである。

表 4 川船 1・2 釘穴間隔計測表

	川船 1													中央値					
	釘 1	釘 2	釘 3	釘 4	釘 5	釘 6	釘 7	釘 8	釘 9	釘 10	釘 11	釘 12	釘 13	最小値 (cm)	最大値 (尺)	平均値 (cm)	中央値 (尺)		
釘穴列ア	23.0	22.3	23.0	(22.8)	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	22.3	23.0	22.5	7.4	22.6	7.5
釘穴列イ	23.4	21.1	25.4	19.8	23.0	22.8	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	19.8	25.4	22.5	7.4	22.9	7.6
釘穴列ウ	(37.3)	(22.5)	(15.5)	(15.7)	24.4	14.6	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	14.6	37.3	18.6	6.1	19.1	6.3
釘穴列エ	23.0	22.3	22.6	23.3	21.6	(24.6)	(22.0)	(22.0)	21.4	21.9	22.8	23.4	↑	21.4	24.6	22.6	7.5	22.5	7.4
釘穴列オ	22.4	22.7	23.1	↑	51.2	(19.7)	(24.8)	(21.5)	(21.1)	↑	↑	↑	↑	19.7	51.2	25.8	8.5	22.6	7.5
釘穴列カ	29.3	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	29.3	29.3	29.3	9.7	29.3	9.7

※ 釘の位置は材と釘配置図(図47)参照。図の左端を釘1とした。単位はcm。()は釘頭あるいは釘穴が遺存しない場合の復元値。

↓ 船外側からの釘の打ち込み
↑ 船内側からの釘の打ち込み
— 釘とガケ(あるいは台形・方形彫り込み)が遺存
- - 釘のみ遺存
: : ガケ(あるいは台形・方形彫り込み)のみ遺存
: : 痕跡のみ遺存

	川船 2																							中央値						
	釘 1	釘 2	釘 3	釘 4	釘 5	釘 6	釘 7	釘 8	釘 9	釘 10	釘 11	釘 12	釘 13	釘 14	釘 15	釘 16	釘 17	釘 18	釘 19	釘 20	釘 21	釘 22	釘 23	最小値 (cm)	最大値 (尺)	平均値 (cm)	中央値 (尺)			
釘穴列ア	44.4	↑	46.2	↑	68.1	↑	47.2	↑	46.3	↑	45.5	↑	45.2	↑	44.1	↑	43.9	↑	42.4	↑	42.4	↑	42.4	↑	42.4	68.1	47.3	15.6	45.4	15.0
釘穴列イ	20.0	21.6	22.8	22.5	23.0	22.3	23.5	21.2	23.3	22.5	21.3	22.4	23.2	22.4	22.1	22.8	22.0	22.5	22.6	22.3	22.5	22.6	22.6	↑	20.0	23.5	22.3	7.4	22.5	7.4
釘穴列ウ	21.0	26.6	17.8	22.8	22.9	22.1	22.7	22.5	21.6	23.2	22.3	22.7	22.9	21.9	22.1	23.1	21.5	24.1	↑	↑	↑	↑	↑	↑	17.8	26.6	22.4	7.4	22.6	7.5
釘穴列エ	22.2	22.9	24.0	21.8	23.2	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	21.8	24.0	22.8	7.5	22.9	7.6
釘穴列オ	7.1	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	7.1	7.1	7.1	2.3	7.1	2.3
釘穴列カ	23.1	↑	23.6	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	21.5	23.6	22.7	7.5	23.1	7.6
釘穴列キ	(24.5)	(22.5)	(22.8)	20.5	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	20.5	24.5	22.6	7.5	22.7	7.5
釘穴列ク	(1.9)	(4.1)	(6.0)	(4.5)	(2.9)	(2.1)	(1.6)	(2.1)	(2.4)	(4.0)	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	1.6	6.0	3.2	1.1	2.7	0.9
釘穴列ケ	10.1	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	10.1	10.1	10.1	3.3	10.1	3.3

※ 釘の位置は材と釘配置図(図47)参照。釘穴列ア～キ・ケは図左端、釘穴列クは図上端を釘1とした。単位はcm。()は釘頭あるいは釘穴が遺存しない場合の復元値。

表5 川船3釘穴間隔計測表

	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	釘	平均値 (cm)	最大 値 (尺)	中央値 (cm)		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21				22	
釘穴列ア	42.6	47.1	45.7	46.8	46.1	45.8	45.7	45.7	46.1	46.1	45.8	45.8	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	45.7	
釘穴列イ	20.8	24.3	21.6	23.3	22.4	23.8	22.8	23.4	22.4	23.4	22.9	23.4	23.0	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1	23.1
釘穴列ウ	(20.0)	22.7	24.1	21.6	23.3	22.6	23.1	22.8	23.4	23.2	23.2	22.8	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2
釘穴列エ	(71.4)	(71.4)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)	(87.0)
釘穴列オ	24.7	22.3	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5	40.5
釘穴列カ	22.1	21.8	46.5	19.2	23.3	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6	25.7	23.6
釘穴列キ	20.4	21.1	21.0	20.7	24.4	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2
釘穴列ク	11.6	10.5	11.7	10.6	11.5	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8	11.7	10.8
釘穴列ケ	17.2	24.9	19.6	36.2	21.1	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2	22.2
釘穴列コ	21.5	25.1	23.9	23.2	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5	24.5
釘穴列サ	23.3	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0	24.0
釘穴列シ	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5	23.5
釘穴列ス	(18.0)	(21.5)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)	(15.9)
釘穴列セ	25.7	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2	20.2
釘穴列テ	5.4	5.2	4.9	6.2	4.1	3.5	6.0	6.0	6.0	5.1	4.8	4.9	5.5	3.6	4.8	5.5	4.8	5.5	4.8	5.5	4.8	5.5	4.8	5.5	4.8	5.5
釘穴列ト	2.8	18.6	18.6	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7	32.7
釘穴列チ	11.4	9.8	17.4	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9	46.9
釘穴列ツ	13.0	11.9	3.6	35.2	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7	25.7
釘穴列テ	24.8	16.7	15.5	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8
釘穴列ト	9.2	21.1	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4	12.4
釘穴列ナ	7.5	6.9	6.5	7.8	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3	7.3

※ 釘の位置は材と新配置図(図47)参照。釘穴列ア～セは図左端。釘穴列ソ～ナは図上端を釘1とした。単位はcm。()は釘頭あるいはガケが遺存しない場合の復元値。

- ↑ 船外側からの釘の打ち込み
- ↑ 船内側からの釘の打ち込み
- ↑ 釘とガケ(あるいはあるいは台形・方形彫り込み)が遺存
- ↑ 釘のみ遺存
- ↑ ガケ(あるいはあるいは台形・方形彫り込み)のみ遺存
- ↑ 痕跡のみ遺存

表6 川船 1～3 釘穴列一覧表

釘穴列	釘が結合する部材		釘の種類	釘の打ち込み方法	釘の打ち込み面
	胴敷板(材1)	脚敷板(材2)			
釘穴列ア	胴敷板(材1)	脚敷板(材2)	縫釘	材1⇄材2 A1類	a類
釘穴列イ	胴敷板(材2)	脚敷板(材3)	縫釘	材2⇄材3 A1類	a類
釘穴列ウ	胴敷板(材3)	脚敷板(材4)	縫釘	材3⇄材4 A5類	a類
釘穴列エ	脚のオモキ様の 脚材(材5)	脚のオモキ様の 脚材(材5)	縫釘	材3・4→材5 A2類	a類
釘穴列オ	脚のオモキ様の 脚材(材5)	脚の脚板(材6)	縫釘	材6→材5 A3類	b類
釘穴列カ	脚のオモキ様の 脚材(材5)	脚の脚板(材6)	縫釘	材5→材6 A5類	c類

川船 1

釘穴列	釘が結合する部材		釘の種類	釘の打ち込み方法	釘の打ち込み面
	不明(胴敷板?) (欠損材)	胴敷板(材1)			
釘穴列ア	不明(胴敷板?) (欠損材)	胴敷板(材1)	縫釘	欠損材⇄材1? A5類(A1類?)	a類
釘穴列イ	胴敷板(材1)	脚のオモキ様の 脚材(材2)	縫釘	材1→材2 A2類	a類
釘穴列ウ	脚のオモキ様の 脚材(材2)	脚の脚板(材3)	縫釘	材3→材2 A3類	b類
釘穴列エ	脚敷板(材1)	脚敷板(材1)	縫釘	材1→材1 A2類	a類
釘穴列オ	脚敷板(材1)	不明(補修材?) (材8)	縫釘	材1→材8 A2類	a類
釘穴列カ	表/艦敷板(材5) の脚材(材6)	表/艦のオモキ様の 脚材(材6)	—(縫釘)	材5→材6 A2類	a類
釘穴列キ	表/艦敷板(材5) の脚材(材6)	表/艦のオモキ様の 脚材(材6)	縫釘		
釘穴列ク	脚敷板(材1)	表/艦敷板(材5)	—(通釘)	材5→材1 B2類	d類
釘穴列ケ	不明(補修材?) (材8)	不明(補修材?) (材9)	皆折釘	材9→材8 A5類	c類

川船 2

釘穴列	釘が結合する部材		釘の種類	釘の打ち込み方法	釘の打ち込み面
	不明(胴敷板?) (欠損材)	脚敷板(材1)			
釘穴列ア	不明(胴敷板?) (欠損材)	脚敷板(材1)	—(縫釘)	欠損材⇄材1 A1類	a類
釘穴列イ	脚敷板(材1)	脚敷板(材2)	縫釘	材1⇄材2 A1類	a類
釘穴列ウ	脚のオモキ様の 脚材(材3)	脚のオモキ様の 脚材(材3)	縫釘	材2→材3 A2類	a類
釘穴列エ	脚のオモキ様の 脚材(材3)	不明(脚板?) (欠損材)	縫釘	欠損材→材3 A3類	b類
釘穴列オ	脚敷板(材1)	脚敷板(材1)	縫釘	材1→材1 A5類	a類
釘穴列カ	脚敷板(材1)	脚敷板(材1)	縫釘	材1→材1 A5類	a類
釘穴列キ	脚敷板(材2)	脚敷板(材2)	縫釘	材2→材2 A2類	a類
釘穴列ク	不明(敷板?) (欠損材)	表/艦敷板(材4)	縫釘	材4→欠損材 A3類	b類
釘穴列ケ	不明(敷板?) (欠損材)	表/艦敷板 (材4・5)	縫釘	材4→材5 材5→欠損材 A5類	a類
釘穴列コ	表/艦敷板(材5)	表/艦のオモキ様の 脚材(材6)	縫釘	材5→材6 A2類	a類
釘穴列サ	表/艦のオモキ様の 脚材(材6)	不明(脚板?) (欠損材)	縫釘	欠損材→材6 A3類	b類
釘穴列シ	表/艦敷板(材4)	表/艦敷板(材4)	縫釘	材4→材4 A5類	a類
釘穴列ス	表/艦立板? (材8)	表/艦立板? (材7)	縫釘	材7→材8 A5類	d類
釘穴列セ	表/艦立板? (材7)	表/艦立板? (材9)	縫釘	材7→材9 A2類	a類
釘穴列ソ	脚部材(材1～3)	表/艦部材 (材4～6)	通釘	材4～6→材1～3 B1類	a類
釘穴列タ	脚部材(材1～3)	敷押え(材11)	和釘?	材11→材11 C類	a類
釘穴列チ	脚部材(材1～3)	敷押え(材12)	和釘?	材12→材1～3 C類	a類
釘穴列ツ	脚部材(材1～3)	敷押え(材13)	和釘?	材13→材1～3 C類	a類
釘穴列テ	脚部材(材1～3)	敷押え(材14)	和釘?	材1→3→材14 C類	c類
釘穴列ト	脚敷板(材1・2)	不明(材15)	和釘?	材1・2→材15 C類	e類
釘穴列ナ	表/艦敷板(材5)	表/艦立板? (材7)	和釘?	材5→材7 C類	c類

川船 3

- ・釘の打ち込み方法
 - A1類 材の片面側の合わせ目を挟み、双方向に縫釘を打ち込むもの。釘を取めるためのガケを設ける。
 - A2類 材の片面側の合わせ目を挟み、一方方向に縫釘を打ち込むもの。釘を取めるためのガケを設ける。
 - A3類 材の合わせ目を挟み、片面ずつ交互に縫釘を打ち込むもの。釘の打ち込みは一方方向である。
 - A4類 釘を取めるためのガケを設ける。
 - A5類 釘を取めるためのガケを設けるように、一方方向に縫釘を打ち込むもの。ガケは設けない。
 - B1類 縫釘が用いられているもので、打ち込み方法の法則性が不明なもの。
 - B2類 通釘で接合するもので、釘を取めるための彫り込みを設けるもの。
 - B3類 通釘で接合するもので、釘を取めるための彫り込みが認識できないもの。
 - C類 部材同士を、和釘もしくは皆折釘で接合するもの。
- ・釘の打ち込み面
 - a類 船内側から釘を打ち込む釘穴。
 - b類 船内側と船外側から交互に釘を打ち込む釘穴。
 - c類 船外側から釘を打ち込む釘穴。
 - d類 釘の打ち込み面が認識できないもの。

釘穴列エは材1の亀裂の接合部にある。胴敷板の亀裂を接合する。釘は縫釘を6本確認した。接合方法はA2a類である。釘穴の間隔は21.8～24.0cmで中央値は22.9cmである。

釘穴列オは材1と材8の接合部にある。胴敷板と補修材を接合する。釘は縫釘を2本確認した。接合方法はA2a類である。釘穴の間隔は7.1cmある。

釘穴列カ・キは材5と材6を接合した釘穴列と考えられる。表もしくは艫敷板と、表もしくは艫敷板に伴うオモキ様の刳材を接合する。釘穴列カでは釘は残存していないが、釘穴列キでは縫釘を2本確認した。接合方法はA2a類である。釘は胴敷板から打ち込む。釘穴列カの釘穴の間隔は21.5～23.6cmで中央値は23.1cmである。釘穴列キの釘穴の間隔は20.5～24.5cmで中央値は22.7cmである。

釘穴列クは材1と材5の接合部にある。胴敷板と表もしくは艫敷板を接合する。釘は残存していない。接合方法はB2d類である。材に残された釘の痕跡から、釘穴の間隔は1.6～6.0cmで中央値は2.7cmと推定できる。

釘穴列ケは材8と材9の接合部にある。補修材を接合する。釘は縫釘を2本確認した。接合方法はA5c類である。釘穴と釘穴の間隔は10.1cmである。

小結：部材の小端側を接合するものと、小口側を接合するもの、補修痕跡がある。

部材の小端側が接合した状態で出土したものは、①胴の敷板とオモキ様の刳材を接合する釘穴列イと、表および艫の敷板を接合する釘穴列カ・キのA2a類、②胴の側板とオモキ様の刳材を接合する釘穴列ウのA3b類がある。釘穴の間隔は22cm台を中心にまとまる。

部材の小端側を接合した可能性が高いものには、④胴の敷板を接合したと考えられる釘穴列アのA5a類がある。船内側に残された釘穴痕跡の間隔は42.4～68.1cmであり、他の部材で主体を占める22cmの倍数となることから、欠損材から打ち込まれた釘穴が腐朽して確認できなかった可能性がある。この想定が正しければ、A1a類に分類できる。

小口側を接合した可能性があるものは、⑤胴敷板と表もしくは艫敷板を接合したと考えられる釘穴列クのB2d類がある。木質の腐朽により詳細は不明であるが、釘穴の間隔は2～6cmと密である。

ほかに胴敷板の補修痕跡として釘穴列エ・オのA2a類と釘穴列ケのA5c類がある。釘穴の間隔は22cm台を中心に比較的まとまっている。

3) 川船3 (図47、表6・8)

諸元：残存長約7.41m、残存幅約1.07mある。15の部材で構成されており、21の釘穴列を確認した。部材を接合する船釘として、縫釘と通釘、和釘が出土した。

釘穴列：釘穴列アは材1と欠損材の接合部にある。胴敷板にある。釘は残存していない。接合方法はA1a類である。釘穴の間隔は22.0～23.7cmと42.6～47.1cmのグループがある。後者のグループは前者の数値のほぼ倍数であることから、釘穴の間隔が22～23cm台であったと推定できる。

釘穴列イは材1と材2の接合部にある。胴敷板を接合する。釘は縫釘を19本確認した。接合方法はA1a類である。釘穴の間隔は20.8～69.1cmで中央値は23.1cmある。

釘穴列ウは材2・3の接合部にある。胴敷板と胴のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を22本確認した。接合方法はA2a類である。釘は胴敷板から打ち込む。釘穴の間隔は20.0～24.1cmで中央値は22.8cmである。

釘穴列エは材3と欠損材の接合部にある。胴のオモキ様の刳材にある。釘は縫釘を3本確認した。接合方法はA3b類である。釘は欠損材側から打ち込む。欠損材は側板と推定している。材3で確認した釘穴の間隔は46.1～87.0cmであるが、他の事例と同様、22～23cm台の倍数である点は重要である。

釘穴列オは材1の亀裂の接合部にある。釘は縫釘を4本確認した。接合方法はA5a類である。釘穴の間隔は22.3～40.5cmで中央値は24.7cmある。

釘穴列カは材1の亀裂の接合部にある。釘は縫釘を2本確認した。接合方法はA5a類である。釘穴の間隔は19.2～46.5cmで中央値は23.3cmある。

釘穴列キは材2の亀裂の接合部にある。釘は縫釘を7本確認した。接合方法はA2a類である。釘穴の間隔は20.4～24.4cmで中央値は21.1cmある。

釘穴列クは材4と欠損材の接合部にある。表もしくは艫敷板にある。釘は縫釘を1本確認した。接合方法はA3b類である。釘穴の間隔は10.5～11.7cmで中央値は11.5cmある。

釘穴列ケは材4と材5および欠損材の接合部にある。表もしくは艫敷板を接合する。釘は縫釘を5本確認した。接合方法はA5a類である。釘穴の間隔は17.2～36.2cmで中央値は21.7cmである。

釘穴列コは材5と材6の接合部にある。表もしくは艫敷板と表もしくは艫のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を7本確認した。接合方法はA2a類である。釘は胴敷板から打ち込む。釘穴の間隔は21.5～25.1cmで中央値は24.2cmである。

釘穴列サは材6と欠損材の接合部にある。表もしくは艫のオモキ様の刳材にある。釘は縫釘を3本確認した。接合方法はA3b類である。釘穴の間隔は平均値で23.7cmある。

釘穴列シは材4の亀裂の接合部にある。表もしくは艫敷板を接合する。釘は縫釘を1本確認した。接合方法はA5a類である。釘穴と釘穴の間隔は23.5cmある。

釘穴列スは材7と材8の接合部にある。表もしくは艫立板を接合する。釘は縫釘を4本確認した。接合方法はA5d類である。釘穴の間隔は15.9～21.5cmで中央値は18.0cmである。

釘穴列セは材7と材8の接合部にある。表もしくは艫立板を接合する。釘は縫釘を3本確認した。接合方法はA2a類である。釘穴の間隔は平均値で22.9cmある。

釘穴列ソは材1～3と材4～6の接合部にある。船央を構成する胴敷板とオモキ様の刳材、船首もしくは船尾を構成する表もしくは艫敷板とオモキ様の刳材を接合する。釘は通釘を16本確認した。接合方法はB1a類である。釘穴の間隔は3.5～6.2cmで中央値は5.1cmである。両者の接合にあたっては、船央側の材1・2の船外小口の厚みを減らし、さらに船首もしくは船尾側の材4・5の船外小口の一部を欠き取って段差を設けている。

釘穴列タは材1～3と材11の接合部にある。胴敷板・胴のオモキ様の刳材と敷押えを接合する。釘を5本確認した。和釘の可能性はある。接合方法はCa類である。釘穴の間隔は2.8～32.7cmで中

中央値は18.6cmである。

釘穴列チは材1～3と材12の接合部にある。胴敷板・胴のオモキ様の刳材と敷押えを接合する。釘を5本確認した。和釘の可能性はある。接合方法はCa類である。釘穴の間隔は9.8～46.9cmで中央値は14.4cmである。

釘穴列ツは材1～3と材13の接合部にある。胴敷板・胴のオモキ様の刳材と敷押えを接合する。釘を6本確認した。和釘の可能性はある。接合方法はCa類である。釘穴の間隔は3.6～35.2cmで中央値は13.0cmである。

釘穴列テは材1～3と材14の接合部にある。胴敷板・胴のオモキ様の刳材と敷押えを接合する。釘を5本確認した。和釘の可能性はある。接合方法はCc類である。釘穴の間隔は12.8～24.8cmで中央値は16.1cmである。

釘穴列トは材1・2と材15の接合部にある。胴敷板と不明板材を接合する。釘を4本確認した。和釘の可能性はある。釘穴接合方法はCc類である。釘穴の間隔は9.2～21.1cmで中央値は12.4cmである。

釘穴列ナは材5と材7の接合部にある。表もしくは艫敷板と表もしくは艫立板を接合する。釘を5本確認した。和釘の可能性はある。接合方法はCc類である。釘穴と釘穴の間隔は6.5～7.8cmで中央値は7.3cmである。

小結：部材の小端側を接合するものと、小口側を接合するもの、補修痕跡がある。

部材の小端側を接合した状態で出土したものは、①胴敷板を接合する釘穴列イのA1a類、②胴敷板と胴のオモキ様の刳材を接合した釘穴列ウのA2a類、表もしくは艫敷板と表もしくは艫のオモキ様の刳材を接合した釘穴列コのA2a類、③胴敷板と敷押えを接合した釘穴列タ～ツのCa類と釘穴列テのCc類がある。①・②の釘穴の間隔は22～23cm台を中心とする。③の釘穴の間隔は2.8～46.9cmとばらつきが大きい。

部材の小端側を接合した可能性が高いものには、④胴敷板を接合したと考えられる釘穴列アのA1a類、⑤表もしくは艫敷板を接合した釘穴列クのA3b類と釘穴列ケのA5a類、⑥胴側板と胴のオモキ様の刳材を接合した釘穴列エのA3b類と、表もしくは艫の側板とオモキ様の刳材を接合した釘穴列サのA3b類がある。

部材の小口側を接合するものとして、⑩船首もしくは船尾を構成する部材と船中央を構成する部材を接合した釘穴列ソのB1a類がある。釘穴の間隔は4～6cm程度である。

亀裂の補修痕跡は胴敷板の釘穴列オ・カおよび表もしくは艫の敷板の釘穴列シのA5a類、胴敷板の釘穴列キのA2a類がある。釘穴の間隔は20～23cm程度のものが多い。

また、部位が不明瞭なため確定ができないが、⑧表もしくは艫立板を接合した釘穴列ス・セのA2a類とA5d類、⑨表もしくは艫敷板と表もしくは艫立板を接合した釘穴列ナのCc類がある。

4) 川船4 (図48、表7・9)

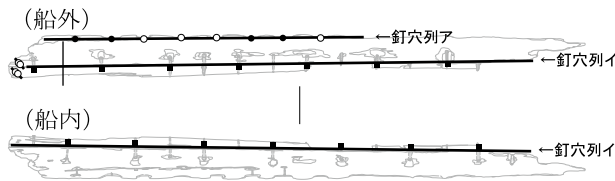
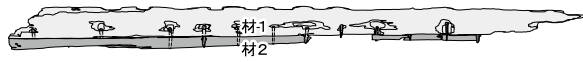
諸元：残存長約3.82m、残存高約0.29mある。2つの部材で構成されており、2つの釘穴列を確

認した。部材を接合する船釘として、縫釘と通釘が出土した。

釘穴列：釘穴列アは材1と欠損材の接合部にある。胴の側板上端にある。釘は通釘を2本確認した。接合方法はB1c類である。釘穴の間隔は21.2～25.0cmで中央値は23.2cmである。

釘穴列イは材1と材2の接合部にある。胴の側板と胴のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を14本確認した。接合方法はA3b類である。釘は側板から打ち込む。釘穴の間隔は20.9～24.6cmで中

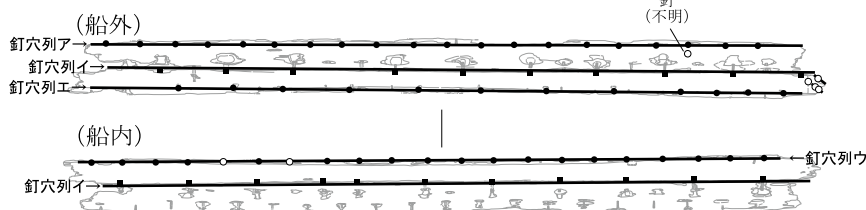
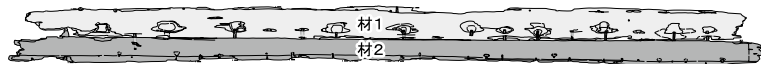
川船4



凡例

- 釘列のライン
- その面において、図上での上方向から下方向へ釘を打ち込む
- その面において、図上での下方向から上方向へ釘を打ち込む
- どの面においてかは分からないが、図上での上方向から下方向へ釘を打ち込む
- どの面においてかは分からないが、図上での下方向から上方向へ釘を打ち込む
- その面から逆面へ釘を打ち込む
- 打ち込む方向が分からない釘

川船5



川船6

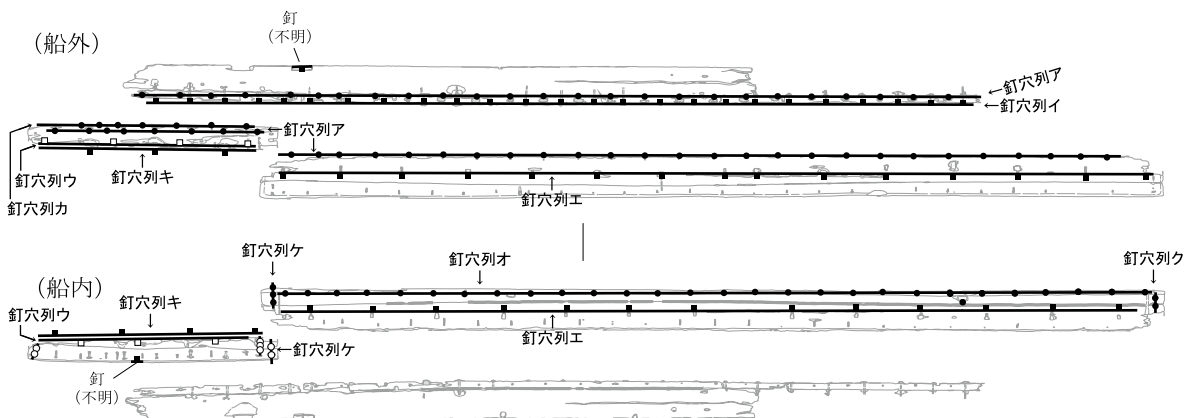
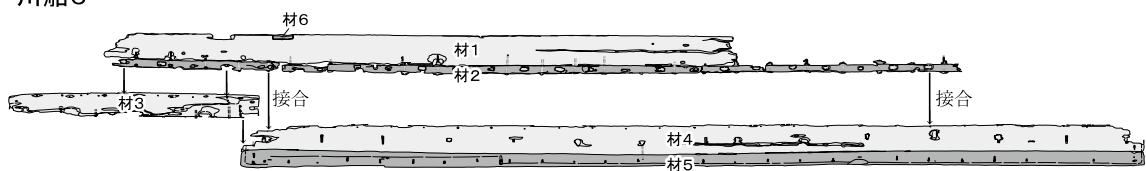


図48 部材と釘の配置 [川船4～6] (1 : 50)

中央値は22.6cmである。

小結：部材の小端側を接合するものがある。

部材の小端側が接合した状態で出土したものは、①胴の側板と胴のオモキ様の刳材を接合した釘穴列イのA3b類がある。釘穴の間隔は22cm台が最も多い。

部材の小端同士を接合した可能性が高いものには、②胴の側板と棚板を接合した釘穴列アのB1c類がある。釘穴の間隔は23cm台が最も多い。

5) 川船5 (図48、表7・9)

諸元：残存長約5.01m、残存高約0.47mある。2つの部材で構成されており、3つの釘穴列を確認した。部材を接合する船釘として、縫釘と通釘、皆折釘が出土した。

釘穴列：釘穴列アは材1と欠損材の接合部にある。胴の側板上端にある。釘は通釘を20本確認した。接合方法はB1c類である。釘穴の間隔は21.8～24.2cmで中央値は22.7cmである。

釘穴列イは材1と材2の接合部にある。胴の側板と胴のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を21本確認した。接合方法はA3b類である。釘は側板から打ち込む。釘穴の間隔は21.1～23.5cmで中央値は22.4cmである。

釘穴列ウは材2と欠損材の接合部にある。胴のオモキ様の刳材にある。釘は残存していない。接合方法はA2a類と考えられる。釘は欠損材側から打ち込む。材2の釘穴の間隔は44.0～44.6cmと21.2～23.3cmのグループがあり、釘穴の間隔は中央値で22.5cmある。40cm台のグループの数値は、中央値のほぼ倍である。

釘穴列エは材2と欠損材の接合部にある。胴のオモキ様の刳材にある。釘は皆折釘の可能性のあるものを3本確認した。接合方法はCc類である。材2の釘穴の間隔は17.6～48.4cmとばらつきが大きい。材2の外面には通釘の頭を収める方形の窪みを穿つ。

小結：部材の小端側を接合するものがある。

部材の小端側が接合した状態で出土したものは、①胴の側板とオモキ様の刳材を接合した釘穴列イのA3b類がある。釘穴の間隔は22cm台が最も多い。

部材の小端側を接合した可能性が高いものには、②胴の側板と棚板を接合した釘穴列アのB1c類、③胴の敷板とオモキ様の刳材を接合した釘穴列ウのA2a類と、釘穴列エのCc類がある。③の釘穴列ウ・エは異なる技法であるが、同じ船の同じ接合面に存在している。両釘穴列とも釘の多くが遺存していないため判断は難しいが、各々1～2箇所鉄釘を確認できるので、これを考慮すれば併存した可能性がある。釘穴列エは補修痕跡の可能性もある。

6) 川船6 (図48、表7・9)

諸元：残存長約7.58m、残存高約4.97mある。6つの部材で構成されており、10の釘穴列を確認した。部材を接合する船釘として、縫釘と通釘が出土した。

釘穴列：釘穴列アは材2と材3、材2と材4の接合部にある。胴の棚板下材と胴の側板を接合す

表7 川船4～6釘穴間隔計測表

	釘1	釘2	釘3	釘4	釘5	釘6	釘7	釘8	釘9	釘10	釘11	釘12	釘13	釘14	最大値	平均値 (cm)	中央値 (尺)					
川船4	釘穴ア	23.2	(21.2)	(25.0)	(23.0)	(23.9)	21.2	(23.5)	22.6	22.7	22.6	22.9	22.7	23.5	21.5	24.6	20.9	21.5	24.6	20.9	22.6	7.5
釘穴イ	22.4	22.6	22.8	22.7	22.6	22.6	22.6	22.6	22.9	22.7	23.5	21.5	24.6	20.9	21.5	24.6	20.9	22.6	7.5	22.6	7.5	

※ 釘の位置は材と釘配置図(図48)参照。図左端を釘1とした。単位はcm。()は釘頭あるいはガケが遺存しない場合の復元値。

	釘1	釘2	釘3	釘4	釘5	釘6	釘7	釘8	釘9	釘10	釘11	釘12	釘13	釘14	釘15	釘16	釘17	釘18	釘19	釘20	釘21	最大値	平均値 (cm)	中央値 (尺)	
川船5	釘穴ア	22.8	23.2	21.8	23.3	(22.1)	(24.2)	(22.1)	(22.7)	(23.3)	22.4	23.5	(23.1)	(22.5)	(24.0)	(21.9)	(23.7)	22.5	23.3	22.0		21.8	24.2	22.8	7.5
釘穴イ	(23.5)	(22.0)	21.1	23.1	21.9	22.4	22.6	22.0	22.4	22.0	22.4	22.5	21.9	21.9	22.6	22.5	23.5	21.5	21.8	(22.6)		21.1	23.5	22.3	7.4
釘穴ウ	(21.7)	(22.8)	22.0	(44.6)	(44.0)	(21.8)	(21.8)	(23.3)	(22.3)	(21.2)	(22.7)	(22.5)	(22.5)	(22.5)	(22.5)	(22.5)	(22.6)	(22.8)	(21.8)	22.8		21.2	44.6	24.7	8.2
釘穴エ	38.2	28.0	28.0	48.4	45.2	45.2	38.9	44.0	44.7	44.7	44.0	44.7	44.7	44.7	45.0	24.8	17.6	23.9				17.6	48.4	36.2	11.9

※ 釘の位置は材と釘配置図(図48)参照。図左端を釘1とした。単位はcm。()は釘頭あるいはガケが遺存しない場合の復元値。

	釘1	釘2	釘3	釘4	釘5	釘6	釘7	釘8	釘9	釘10	釘11	釘12	釘13	釘14	釘15	釘16	釘17	釘18	釘19	釘20	釘21	釘22	釘23	釘24	釘25	釘26	釘27	釘28	釘29	釘30	釘31	釘32	釘33	最小値	最大値	平均値 (cm)	中央値 (尺)			
川船6	釘穴ア	12.7	11.4	17.5	24.0	21.3	22.8	30.3	14.9	16.9	24.7	20.5	22.1	23.4	22.2	21.7	23.3	21.7	22.1	23.0	22.8	19.6	21.4	23.8	22.2	23.2	21.7	23.3	22.4	21.4	24.0	19.7	15.3	11.4	30.3	21.2	7.0	22.1	7.3	
釘穴イ	22.7	23.4	22.2	19.0	14.7	26.3	22.6	26.5	22.3	22.1	22.8	23.6	21.9	19.5	24.4	21.9	19.5	21.2	22.4	24.6	23.8	23.9	21.4	21.3																
釘穴ウ	23.5	22.8	(19.2)	(25.6)	21.5	22.0																																		
釘穴エ	24.5	20.8	19.6	20.9	22.0	21.7	22.6	20.2	20.7	21.7	19.9	22.7	20.8	21.0	21.3	22.0	20.9	21.6	21.0	21.9	22.1	21.2	21.2	21.5	21.4	23.4	20.9	19.0												
釘穴オ	(15.7)	(18.9)	(19.8)	(20.6)	(22.7)	(21.2)	(21.3)	(21.3)	(21.6)	(21.1)	(21.5)	(21.5)	(21.4)	(42.6)	(21.5)	(21.8)	(21.2)	(20.9)	(22.1)	(22.6)	(19.6)																			
釘穴カ	21.7	11.7	11.1	22.1	22.0	23.5	22.0																																	
釘穴キ	(22.6)	(21.0)	(21.0)	(23.5)	(22.7)	(21.7)																																		
釘穴ク	4.5																																							
釘穴ケ	5.0	5.4																																						

※ 釘の位置は材と釘配置図(図48)参照。釘穴ア～キは図左端、釘穴ク～ケは図右端を釘1とした。単位はcm。()は釘頭あるいはガケが遺存しない場合の復元値。

- ↓ 船外側からの釘の打ち込み
- ↑ 船内側からの釘の打ち込み
- 釘とガケ(あるいは台形・方形彫り込み)が遺存
- 釘のみ遺存
- ガケ(あるいは台形・方形彫り込み)のみ遺存
- 痕跡のみ遺存

表 8 川船 4～6 釘穴列一覧表

	釘が結合する材	釘の種類	釘の打ち込み方法	釘の打ち込み面
川船 4	釘穴列ア 不明(胴側板?) (欠損材)	通釘	欠損材→材1 B1類	c類
	釘穴列イ 胴の側板(材1)			

	釘が結合する材	釘の種類	釘の打ち込み方法	釘の打ち込み面		
川船 5	釘穴列ア 不明(胴側板?) (欠損材)	通釘	欠損材→材1 B1類	c類		
	釘穴列イ 胴の側板(材1)				材1→材2 A3類	b類
	釘穴列ウ 胴のオモキ様 の側材(材2)				欠損材→材2 A2類	a類
	釘穴列エ 胴のオモキ様 の側材(材2)				材2→欠損材 C類	c類

	釘が結合する材	釘の種類	釘の打ち込み方法	釘の打ち込み面			
川船 6	釘穴列ア 胴の側板下材 (材2)	通釘	材2→材3・4 B1類	c類			
	釘穴列イ 胴の側板上材 (材1)				材2→材1 A4類	c類	
	釘穴列ウ 胴の側板(材3)				材3→欠損材 A3類	b類	
	釘穴列エ 胴の側板(材4)				材4→材5 A3類	b類	
	釘穴列オ 胴のオモキ様 の側材(材5)				欠損材→材5 A2類	a類	
	釘穴列カ 不明(胴側板?) (欠損材)				通釘	欠損材→材3 B1類	c類
	釘穴列キ 胴の側板(材3)						
	釘穴列ク 不明(胴の側板・胴の オモキ様の側材) (欠損材)				通釘	欠損材→材4・5 B2類	a類

・釘の打ち込み方法

- A1類 材の片面側の合わせ目を抜き、双方向に縫釘を打ち込むもの。釘を収めるためのガケを設ける。
- A2類 材の片面側の合わせ目を抜き、一方に縫釘を打ち込むもの。釘を収めるためのガケを設ける。
- A3類 材の合わせ目を抜き、片面ずつ交互に縫釘を打ち込むもの。釘の打ち込みは一方向である。
- A4類 釘を収めるためのガケを設ける。
- A5類 釘の横断面を貫通するように、一方に縫釘を打ち込むもの。ガケは設けない。
- B1類 縫釘が用いられているもので、打ち込み方法の法則性が不明なもの。
- B2類 通釘で接合するもので、釘を収めるための彫り込みを設けるもの。
- C類 通釘で接合するもので、釘を収めるための彫り込みが認識できないもの。
- C類 部材同士を、和釘もしくは皆折釘で接合するもの。

・釘の打ち込み面

- a類 船内側から釘を打ち込む釘穴列。
- b類 船内側と船外側から交互に釘を打ち込む釘穴列。
- c類 船外側から釘を打ち込む釘穴列。
- d類 釘の打ち込み面が認識できないもの。

る。釘は通釘を33本確認した。接合方法はB1c類である。釘穴の間隔は11.4～30.3cmで中央値は22.1cmである。

釘穴列イは材1と材2の接合部にある。胴の棚板上材と胴の棚板下材を接合する。釘は縫釘を25本確認した。接合方法はA4c類で、釘は棚板下材の下側の小端から棚板上材に向かって打ち込まれている。釘穴の間隔は14.7～26.5cmで中央値は22.4cmである。

釘穴列ウは材3と欠損材の接合部にある。胴の側板にある。釘は縫釘を3本確認した。接合方法はA3b類である。釘は欠損材側から材3に向けて打ち込まれている。釘穴の間隔は19.2～25.6cmで中央値は22.8cmである。

釘穴列エは材4と材5の接合部にある。胴の側板と胴のオモキ様の刳材を接合する。釘は縫釘を24本確認した。接合方法はA3b類である。釘は側板から打ち込む。釘穴の間隔は19.0～24.5cmで中央値は21.3cmである。

釘穴列オは材5と欠損材の接合部にある。胴のオモキ様の刳材にある。釘は縫釘を3本確認した。接合方法はA2a類と考えられる。釘穴の間隔は15.7～42.6cmで中央値は21.3cmである。

釘穴列カは材3と欠損材の接合部にある。釘穴列アと並列している。胴の側板を接合する。釘は通釘を8本確認した。接合方法はB1c類と考えられる。釘穴の間隔は11.1～23.5cmで中央値は22.0cmである。

釘穴列キは材3と欠損材の接合部にある。釘穴列ウと並列している。胴の側板を接合する。釘は残存していない。接合方法はA3b類と考えられる。釘穴の間隔は21.0～23.5cmで中央値は22.1cmである。

釘穴列クは材4・5の接合部にある。側板とオモキ様の刳材と、それら部材の長軸側の欠損材を接合する。釘は通釘を2本確認した。接合方法はB2a類である。釘穴の間隔は4.5cmある。

釘穴列ケは材3と材4・5を接合する。側板とオモキ様の刳材それぞれを、長軸方向に接合する。釘は残存していないが、船外側に台形彫り込みがあるため、通釘であったと考えられる。接合方法はB1a類である。釘穴の間隔は5.0～5.4cmある。

小結：部材の小端側を接合するものと、小口側を接合するものがある。

部材の小端同士が接合した状態で出土したものは、①胴の側板とオモキ様の刳材を接合した釘穴列エのA3b類、②胴の棚板下材と側板を接合した釘穴列アのB1c類、③胴の棚板上材と棚板下材を接合した釘穴列イのA4c類がある。釘穴の間隔は21～23cmのものが多い。

部材の小端側を接合した可能性が高いものには、④胴敷板とオモキ様の刳材を接合した釘穴列オのA2a類、⑤胴の側板とオモキ様の刳材を接合した釘穴列ウのA3b類がある。釘穴の間隔は22cm台が多い。

部材の小口側を接合するものとして、⑥胴の側板およびオモキ様の刳材を延長方向に接合した釘穴列ク・ケのB1a類・B2a類がある。釘穴の間隔は4.5～5.4cmと密である。部材を重ね継ぐ個所の小口の一部を欠き取って、段差を設けている。

上記のほかに、⑦川船6の解体を伴う補修もしくは、部材が川船6に転用される前の接合状況を

留めたと推定される釘穴列カ・キがある。

釘穴列カは釘穴列アと船外側で並列する。接合方法はB1c類で、釘穴の間隔は22cm台を中心とするが、ややばらつく。並列する釘穴列アには船釘が残存するのに対して、釘穴列カの船釘はほとんど残っていない。釘穴列カは、川船6の解体を伴う補修もしくは、材3が川船6とは別の川船の部材として利用されていた際の痕跡の可能性はある。

釘穴列キは釘穴列ウと並行する。接合方法はA3b類で、釘穴の間隔は21cm台を中心とするが、ややばらつく。並列する釘穴列ウには船釘が残存するのに対して、釘穴列キの船釘は全く残らず、ガケも破損している。さらに、並列する釘穴列ウの縫釘の打ち込みが、オモキ様の刳材（欠損材）から側板（材3）方向である理由として、側板側ではすでに釘穴列キのガケが大破しており、新規のガケを彫り込むことが困難であったからと推察する。釘穴列キも、川船6の解体を伴う補修もしくは、材3が川船6とは別の川船の部材として利用されていた際の痕跡と考えられる。

7) 川船7

諸元：残存長約4.3m、残存幅約0.4mある。3つの部材で構成されており、2つの釘穴列を確認した。部材を接合する船釘は縫釘が出土した。

釘穴列：部材は上位・中位・下位の3材があり、上・中位の材は胴敷板、下位の材はオモキ様の刳材と考えられる。

上位と中位の材の接合部にある釘穴列は、胴敷板を接合する。縫釘の打ち込み間隔は約22.5cmである。接合方法はA1a類である。

中位と下位の材の接合部にある釘列は、胴敷板とオモキ様の刳材を接合する。縫釘の打ち込み間隔は約20.5cmである。接合方法はA2a類である。釘は胴敷板から打ち込む。

小結：部材の小端同士を接合するものがある。

部材の小端同士が接合した状態で出土したものは、①胴敷板を接合したA1a類、②胴敷板とオモキ様の刳材を接合したA2a類がある。

8) 川船8

諸元：残存長約0.6m、残存幅約0.2mある。1つの部材に1つの釘穴列を確認した。

釘穴列：胴敷板の表面に同一方向のガケを2箇所確認している。釘穴の間隔は22.5cmである。接合方法はA5d類である。

(3) 出土した川船の接合技法（図49）

今回出土した川船7艘を検討した結果、造船にかかる各部材の接合について、定型化した接合技法があることがわかった。以下、船体幅方向の接合、船体深さ方向の接合、船体長さ方向の接合、その他部位の接合、補修痕跡の順に、検討した結果を述べる。

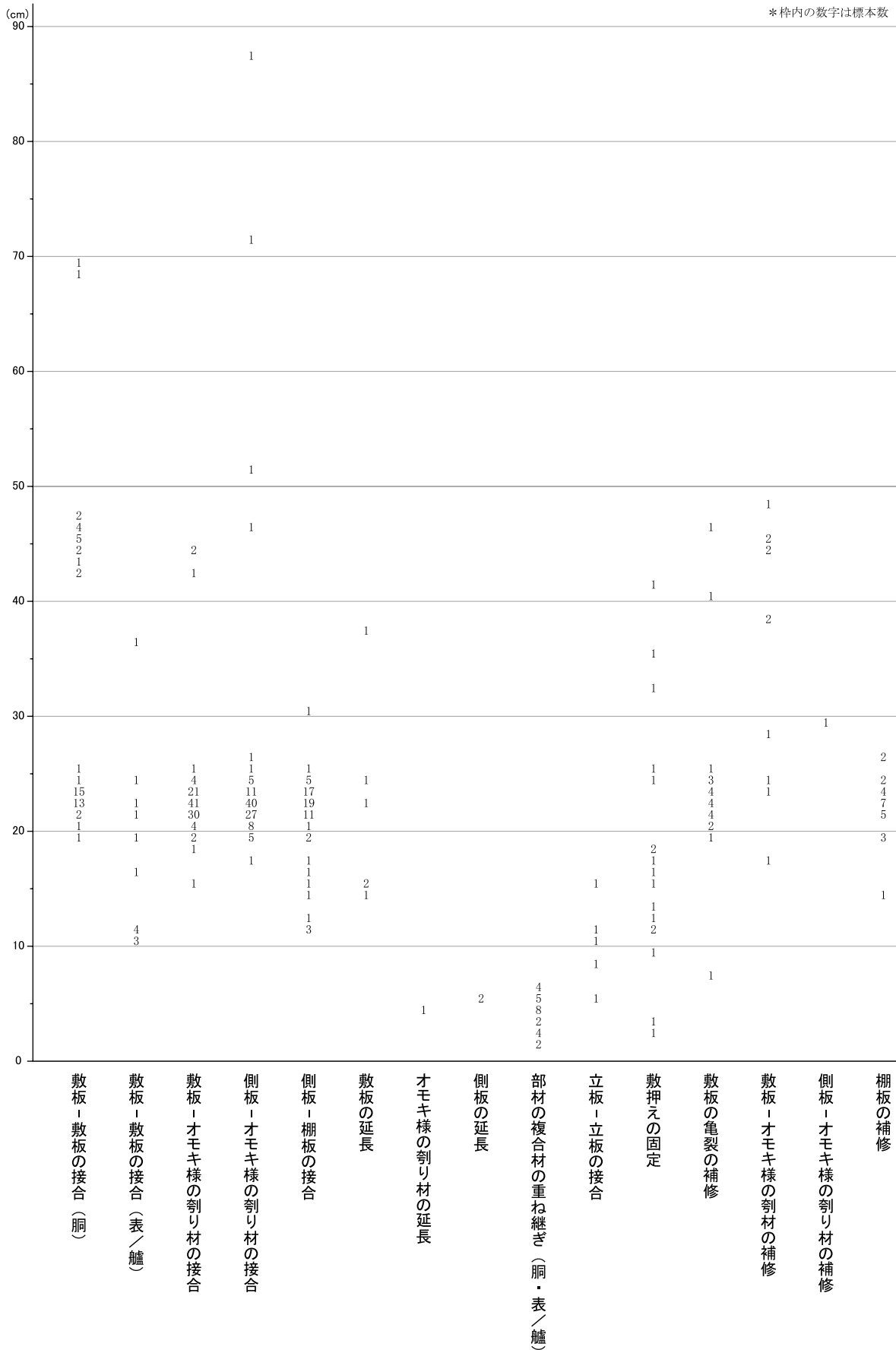


図49 釘穴間隔度数分布

1) 船体幅方向の接合

敷板と敷板の接合：部材が揃う事例には、胴はA1a類が4例ある。欠損材を含むが船体構造の復元から推測した事例には、胴のA1a類1例、表もしくは艫のA3b類1例・A5a類が2例ある。そのうち、A5a類の1例はA1a類の可能性が高いことを指摘した。A3b類ともうひとつのA5a類は、表もしくは艫の敷板である三角板・斜め板を接合するものである。

胴敷板における釘同士の間隔の標本数は52例あり、最小値19.8cm、最大値69.1cm、最頻値23.0cm、平均値31.5cm、中央値23.4cm、標準偏差12.86031である。釘同士の間隔には①19.8～25.4cm (n = 34)と②42.4～47.2cm (n = 16)、③68.1～69.1cm (n = 2)のまとまりがあり、①が最も多い。標本数が最も多い①は平均値22.8cm、中央値22.95cm、標準偏差0.985388である。②が①のほぼ2倍、③が①のほぼ3倍の値を示すことから、釘同士の間隔は22～23cm台が主体と考えられる。これは、各釘穴列での計測結果と矛盾しない。

表もしくは艫敷板における釘同士の間隔の標本数は13例あり、最小値10.5cm、最大値36.2cm、最頻値11.7cm、平均値16.9cm、中央値11.7cm、標準偏差7.739451である。釘同士の間隔には①10.5～11.7cm (n = 7)と②17.2～24.9cm (n = 5)、③36.2cm (n = 1)のまとまりがあり、①が最も多い。標本数が最も多い①は平均値11.2cm、中央値11.5cm、標準偏差0.541603である。次に標本数が多い②は平均値21.0cm、中央値21.1cm、標準偏差2.874891である。これは、各釘穴列での計測結果と矛盾しない。

まとめると、胴の敷板と敷板の接合はA1a類にほぼ限定される。釘同士の間隔は22～23cm台である。一方、表もしくは艫の敷板である三角板・斜め板を接合については、今回出土した部材からは、縫釘を用いる以外の傾向は認められない。釘同士の間隔は胴棚板の接合よりも小さい傾向があり、10～11cm台が主体を占める。

敷板とオモキ様の刳材の接合：部材が揃う事例には、胴ではA2a類が4例、表および艫ではA2a類が2例ある。欠損材を含むが船体構造の復元から推測した事例にはA2a類が2例ある。

釘同士の間隔の標本数は108例あり、最小値15.7cm、最大値44.6cm、最頻値22.8cm、平均値22.8cm、中央値22.5cm、標準偏差3.756145である。釘同士の間隔には①15.7cm (n = 1)、②18.9～25.1cm (n = 104)、③42.6～44.6cm (n = 3)のまとまりがあり、②が最も多い。標本数が最も多い②は平均値22.3cm、中央値22.45cm、標準偏差1.055739である。③が②のほぼ2倍の値を示すことを考えると、釘同士の間隔は22cm台が主体と推定できる。これは、各釘穴列での計測結果と矛盾しない。

まとめると、敷板とオモキ様の刳材の接合は、A2a類にほぼ限定される。釘同士の間隔は22cm台である。

側板とオモキ様の刳材の接合：部材が揃う事例には、胴ではA3b類が5例ある。欠損材を含むが船体構造の復元から推測した事例には、胴ではA3b類が3例、表もしくは艫ではA3b類が1例ある。

釘同士の間隔の標本数は103例あり、最小値17.8cm、最大値87.0cm、最頻値22.6cm、平均値23.8

cm、中央値22.4cm、標準偏差8.826407である。釘同士の間隔には①17.8～26.6cm (n = 99)、②46.1～51.2cm (n = 2)、③71.4cm (n = 1)、④87.0cm (n = 1) のまとまりがあり、①が最も多い。標本数が最も多い①は平均値22.1cm、中央値22.1cm、標準偏差1.30844である。②が①のほぼ2倍、③が①のほぼ3倍、④が①のほぼ4倍の値を示すことを考えると、釘同士の間隔は22cm台が主体と推定できる。これは、各釘穴列での計測結果と矛盾しない。

まとめると、側板とオモキ様の刳材の接合はA3b類に限定される。釘同士の間隔は22cm台である。

2) 船体深さ方向の接合

側板と棚板の接合：部材が揃う事例には、胴ではB1c類が2例ある。欠損材を含むが船体構造の復元から推測した事例には、胴ではB1c類が2例ある。

釘同士の間隔の標本数は65例あり、最小値11.1cm、最大値30.3cm、最頻値23.3cm、平均値21.6cm、中央値22.4cm、標準偏差3.331456である。釘同士の間隔には①11.1～12.7cm (n = 4)、②14.9～17.5cm (n = 4)、③19.6～25.0cm (n = 56)、④30.3cm (n = 1) のまとまりがあり、③が最も多い。標本数が最も多い③は平均値22.5cm、中央値22.1cm、標準偏差1.102347である。釘同士の間隔は22cm台が主体と推定できるが、①は③のほぼ半分の値、②は④のほぼ2倍であり、船体幅方向の釘穴の間隔とくらべると傾向が読み取りにくい。

まとめると、側板と棚板の接合はB1c類に限定される。釘同士の間隔は22cm台を主体とする。

3) 船体長さ方向の接合

敷板の延長：胴敷板を延長する事例にはA5a類が1例ある。

釘同士の間隔の標本数は6例あり、最小値14.6cm、最大値37.3cm、平均値21.7cm、中央値19.1cm、標準偏差8.67331である。釘同士の間隔には①14.6～15.7cm (n = 3)、②22.5～22.4cm (n = 2)、③37.3cm (n = 1) のまとまりがある。船体の幅・深さ方向の接合で認められた釘同士の間隔と同じか、やや狭い。

オモキ様の刳材の延長：胴のオモキ様の刳材を延長する事例にはB2a類が1例ある。釘同士の間隔は4.5cmである。

側板の延長：胴の側板を延長する事例にはB1a類が1例ある。釘同士の間隔は5.0cmと5.4cmである。

まとめると、上記の傾向から復元できる船体の延長方向の接合技法には、敷板のみを延長するものと、部材の複合材を重ね継ぎして延長するものがある。

部材の複合材の重ね継ぎ：胴を構成する部材と表もしくは艫を構成する部材の接合にはB1a類とB2d類が1例ずつある。

釘同士の間隔の標本数は25例あり、最小値1.6cm、最大値6.2cm、最頻値6.0cm、平均値4.3cm、中央値4.8cm、標準偏差1.424102である。釘同士の間隔には①1.6～2.9cm (n = 6)、②3.5～6.2cm (n

= 19) のまとまりがあり、②が最も多い。標本数が最も多い②は平均値4.95cm、中央値4.9cm、標準偏差0.826215である。船体の幅・深さ方向の接合で認められた釘同士の間隔よりも狭く、密に打ち込まれる傾向がある。

4) その他部位の接合

立板と立板の接合：部材が揃う事例としてA2a類が1例、A5d類が1例ある。釘同士の間隔の標本数は5例あり、最小値15.9cm、最大値25.7cm、平均値20.3cm、中央値20.2cm、標準偏差3.716584である。遺存状態が悪く、縫釘を用いること以外の傾向を読み取ることは難しい。

敷板と敷押えの接合：部材が揃う事例としてCa類が3例、Cc類が1例ある。皆折釘を用いており、船内側から釘を打ち込む傾向がある。

釘同士の間隔の標本数は17例あり、最小値2.8cm、最大値46.9cm、最頻値18.6cm、平均値18.7cm、中央値16.7cm、標準偏差11.43595である。数値のばらつきが大きく、船体幅方向の釘穴の間隔とくらべると傾向が読み取りにくい。

5) 補修痕跡

敷板の亀裂の補修：胴ではA2a類3例とA5a類2例、表および艫ではA5a類1例ある。縫釘を船内側から打ち込むものが一般的である。

釘同士の間隔の標本数は22例あり、最小値7.1cm、最大値46.5cm、最頻値21.8cm、平均値23.7cm、中央値22.6cm、標準偏差7.40883である。釘同士の間隔には①7.1cm (n = 1)、②19.2～25.7cm (n = 19)、③40.5～46.5cm (n = 2) のまとまりがあり、②が最も多い。標本数が最も多い②は平均値22.5cm、中央値22.3cm、標準偏差1.632133である。船体幅方向の接合で認められた釘穴の間隔と近い傾向を読み取ることができる。

敷板とオモキ様の割材の補修：A5c類が1例とCc類が1例ある。A5c類の釘同士の間隔は10.1cmである。Cc類の釘同士の間隔の標本数は11例あり、最小値17.6cm、最大値48.4cm、平均値36.2cm、中央値38.9cm、標準偏差10.70555である。数値のばらつきが大きい。

側板とオモキ様の割材の補修：A5c類が1例ある。釘同士の間隔は29.3cmである。

棚板の補修：A4c類が1例ある。他の出土船では認められない部材の接合であるため、補修痕跡に含めた。釘同士の間隔の標本数は24例あり、最小値14.7cm、最大値26.5cm、最頻値19.5cm、平均値22.3cm、中央値22.35cm、標準偏差2.460293である。船体幅方向の接合で認められた釘穴の間隔と近い傾向を読み取ることができる。

(4) おわりに

検討の結果、出土した川船の船体幅・船体深さ・船体長さ方向の接合について、定型化した部材の接合技法があったことが明らかとなった。

①船体幅方向の接合技法 (図50)

敷板同士の接合技法：胴敷板については、部材の小端同士を合わせ、合わせ目を挟んで船内側から双方向にガケを彫り込み、縫釘を交互に22～23cm台の間隔で打ち込む。一方で表もしくは艫敷板については、事例が少ないものの、部材となる三角板や斜め板の小端同士を合わせ、合わせ目を挟んで船外側と船内側それぞれ交互にガケを彫り込み、縫釘を10～11cm台の間隔で打ち込む事例がある。胴敷板の接合よりも手間のかかる技法といえる。

敷板とオモキ様の刳材の接合技法：敷板とオモキ様の刳材の小端同士を合わせ、合わせ目を挟んで敷板の船内側にガケを彫り込み、オモキ様の刳材に向かって縫釘を22cm台の間隔で打ち込む。

側板とオモキ様の刳材の接合技法：側板とオモキ様の刳材の小端同士を合わせ、合わせ目を挟んで側板の船外側と船内側それぞれ交互にガケを彫り込み、オモキ様の刳材に向かって縫釘を22cm台の間隔で打ち込む。

②船体深さ方向の接合技法（図50）

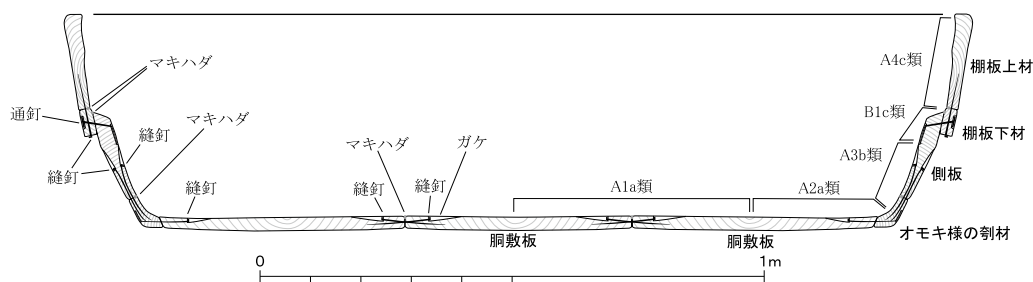
側板と棚板の接合技法：側板の上端の面と、棚板の下端の面を合わせる。そして棚板の船外側に釘の頭を収めるための方形彫り込みを設け、船外側から側板に向かって通釘をおおよそ22cm台の間隔で打ち込むが、船体幅方向の接合における釘の間隔よりもややばらつきがある。棚板の船内側には貫通した釘の先端（尾）を収めるための台形彫り込みを設け、貫通した部分を折り曲げて収める。

③船体長さ方向の接合技法

敷板同士の接合技法：胴敷板を延長する技法である。つなぎ合わせる部材が接する部分をそれぞれ斜めに切り欠き、船内側から縫釘を15～25cm間隔で打ち込む。船体の幅・深さ方向の接合で認められた釘同士の間隔と同じか、やや狭い。釘の打ち込み方法も今回の資料では傾向を読み取ることが難しい点から、補修痕跡に近い傾向を読み取ることができるかもしれない。

部材の複合材の重ね継ぎ：複数の部材を接合した部位同士を重ね継ぎして船体を延長する技法である（図29）。重ね継ぎにあたって、まず部材同士の接合面に段差が生じないように、船内側にあたる部材の小口を一部切り欠き、船外側にあたる部材の小口は端部に向かって緩やかに厚みを薄くするように削る。

次に部材の小口の加工した部分を重ね合わせる。船内側に釘の頭を収めるための方形彫り込みを設け、通釘を5cm前後の間隔で打ち込む。船外側に貫通した釘の先端（尾）を収めるための台形



※復元は、すべての出土船が、ほぼ同じ船幅・船高であるという仮定のもとで行っている。船幅は、川船3をもとに復元した。船高は、川船6と、護岸A-A'セクション(図版37)から推定できる川船3の深さをもとに復元した。部材の位置や釘の使い方など構造に関する点は、主に川船3・6をもとに復元した。

図50 川船断面復元図（1：15）

彫り込みを設け、貫通した部分を折り曲げて収める。

④その他の部位の接合技法

立板の接合技法：残存状況が悪く部位の認定も不明瞭であるため、今回の事例からは傾向を読み取ることができなかった。

敷板と敷押えの接合：オモキ様の刳材に設けた通し柄に敷押えを嵌め込み、主に船内側の敷押えから敷板に向かって皆折釘を打ち込む。釘の間隔は11～25cmのものが多いが、ばらつきが大きい。

⑤補修痕跡

敷板の亀裂の補修：船内側から縫釘を22cm台の間隔で打ち込むものが主体である。釘の打ち込み間隔にややばらつきが認められるが、船体幅方向の接合で認められた技法に近い傾向を読み取ることができる。

敷板とオモキ様の刳材の補修：オモキ様の刳材の船外側から皆折釘を打ち込むもので、釘の間隔はばらつきが大きい。出土時には欠損している胴敷板との結合を補強した可能性も考えられる。

棚板の補修：幅5.5cmの棚板下材と幅19.8cmの棚板上材を縫釘で接合したもの。釘の間隔は20cm台にまとまり、船体幅方向の接合で認められた釘穴の間隔と近い傾向を読み取ることができる。しかし、縫釘を下材の小端から上材に向かって打ち込む際にガケを設けないこと、当初から幅5.5cmの部材を棚板下材として用いる理由が不明であるなど、例外的な接合方法であることから、今回は補修痕跡として扱った。

⑥船釘の打ち込み間隔

船釘の打ち込み間隔を分析した結果、㊦船体幅・深さ方向(①・②)の接合と、④船体長さ方向(③)の接合で傾向が異なることがわかった。

㊦船体幅・深さ方向の接合における船釘の打ち込み間隔は21～24cm台に集中しており、特に22～23cm台(7.3～7.6尺)にピークを持つものが多い(図49)。標準偏差の値を見る限り、データのばらつきも小さく、高い規格性を認めることができる。

④船体を延長させる、船体長さ方向の接合における船釘の打ち込み間隔は1～6cm台であり、特に3～6cm台(1～2尺)が主体となる。総じて㊦よりも狭い間隔で密に通釘を打ち込んでいる。

以上が今回の分析で明らかとなった川船の接合技法である。5章では、これまで淀川流域では確認されていなかった敷板と側板をつなぐ刳材の存在が判明した一方で、南山城地域の木造船に特徴的な敷板の使用、そして出土した船釘やガケ、マキハダと、現在使用されるものとの形態・特徴における共通性を指摘した。今回の検討結果は、当地域における造船技術の歴史的な変化を考える上で、重要なものと考えられる。

なお、川船6の釘穴列カ・キのように、川船のライフサイクルを考える上で重要な部材の転用・補修痕跡についてもデータを得たが、今回は十分に検討を加えることができなかった。今後の課題としたい。

付表1 土器一覧表

() は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存率	色調	胎土	備考
1	古式土師器	甕	第10面相当堆積層	20.7	(21.4)		口縁部1/2	10YR7/3	長石、石英、チャート、赤色粒子	布留式
2	須恵器	杯H	河岸法面		(4.8)		1/4	N6/0	長石、石英、黒色粒子	
3	土師器	皿	溝6130-II(古)	10.0	2.5		3/5	7.5YR8/4	長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子	乙訓在地形
4	土師器	皿	溝6130-II(古)	13.2	2.3		1/3	2.5Y6/1	長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子	乙訓在地形
5	土師器	皿	溝6130-II(古)	14.0	2.7		4/5	2.5Y7/2	長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子	乙訓在地形
6	輸入磁器	椀	溝6130-II(古)	6.0	(2.1)		口縁部1/4	釉:N8/0 胎:N8/0		白磁
7	輸入磁器	椀	溝6130-II(古)		(3.9)	4.8	底部1/1	釉:2.5GY7/1 胎:N7/0	長石、黒色粒子	青磁
8	焼締陶器	甕	溝6130-II(古)		(6.6)		口縁部破片	7.5YR4/1 ~5YR5/2	長石、石英	備前産
9	焼締陶器	播鉢	溝6130-II(古)		(5.6)		口縁部破片	5YR5/2	長石、石英、チャート、黒色粒子、赤色粒子	備前産
10	土師器	皿	溝6394(古)	10.0	1.6	5.6	1/4	10YR8/3	長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子	乙訓在地形
11	土師器	台付皿か	溝6394(古)		(2.4)	6.8	底部1/4	10YR7/4	長石、石英、チャート、赤色粒子	
12	輸入磁器	皿	溝6394(古)	11.8	3.4		2/5	釉:10Y6/2 胎:N7/0	黒色粒子	青磁
13	土師器	皿	溝状遺構6550	6.2	1.4		1/3	10YR6/2	雲母、赤色粒子	乙訓在地形
14	土師器	皿	溝状遺構6550	7.2	1.7		2/5	7.5YR7/3	雲母、赤色粒子	乙訓在地形
15	土師器	皿	溝状遺構6550	8.2	1.9		1/1	5YR7/4	雲母、赤色粒子	乙訓在地形
16	土師器	皿	溝状遺構6550	10.3	1.5		9/10	2.5Y7/1	長石、金雲母	乙訓在地形
17	土師器	皿	溝状遺構6550	8.8	2.2		1/4	10YR5/2	雲母	乙訓在地形
18	土師器	皿	溝状遺構6550	9.8	2.1		1/1	7.5YR8/2	長石、金雲母、赤色粒子	乙訓在地形
19	土師器	皿	溝状遺構6550	10.3	2.2		1/2	10YR8/2	長石、雲母、赤色粒子	乙訓在地形
20	土師器	皿	溝状遺構6550	13.8	2.1		1/6	7.5YR7/3	雲母、赤色粒子	乙訓在地形
21	土師器	小杯	溝状遺構6550	7.5	4.5		2/5	10YR7/1	雲母	内面スス付着
22	土師器	小杯	溝状遺構6550	8.2	4.7	4.0	2/5	2.5Y8/1	長石、金雲母	
23	土師器	羽釜	溝状遺構6550	20.0	(17.3)		口縁部1/6	2.5Y8/1	長石、石英、チャート、黒色粒子	大和型
24	瓦器	火鉢	溝状遺構6550	10.0	(5.4)		1/6	N7/0	雲母	スタンプ文あり
25	瓦器	羽釜	溝状遺構6550		(18.0)		破片	10YR7/1	長石	山城型
26	輸入磁器	椀	溝状遺構6550		(4.7)		3/5	釉:5GY5/1 胎:N7/0	黒色粒子	青磁
27	焼締陶器	播鉢	溝状遺構6550	15.2	(5.9)		破片	5Y4/2	白色砂粒	備前産
28	土師器	皿	溝6130-II(新)		1.3		1/4	2.5Y7/2	長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子	乙訓在地形
29	土師器	皿	溝6130-II(新)	6.5	1.8		ほぼ完形	10YR7/3	長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子	乙訓在地形
30	土師器	皿	溝6130-II(新)	8.2	2.7		2/5	10YR7/3	長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子	乙訓在地形
31	土師器	羽釜	溝6130-II(新)	12.1	(11.5)		口縁部破片	10YR7/2	長石、石英、雲母、赤色粒子	スス付着
32	瓦器	羽釜	溝6130-II(新)	26.6	(17.0)		口縁部7/10	N4/0	長石、石英、チャート	大和型

() は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存率	色調	胎土	備考
33	輸入磁器	椀	溝6130-II (新)	4.5	(3.5)		底部 1/2	釉:10Y6/1 胎:N7/0	長石	青磁
34	焼締陶器	播鉢	溝6130-II (新)		(9.4)		口縁部 破片	10YR5/1	長石、石英、黒色粒子	
35	焼締陶器	播鉢	溝6130-II (新)		11.3		破片	5YR5/2	長石、石英	
36	土師器	皿	溝6394(新)	6.1	1.3		3/5	10YR8/3	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	乙訓在地形
37	土師器	皿	溝6394(新)	6.5	1.3		9/10	10YR8/3	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	乙訓在地形
38	土師器	皿	溝6394(新)	6.7	1.5		ほぼ 完形	10YR8/3	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	乙訓在地形
39	土師器	皿	溝6394(新)	6.9	1.8		4/5	10YR8/3	長石、石英、チャート、 赤色粒子	乙訓在地形
40	土師器	皿Sh	溝6394(新)	8.0	1.6		1/2	10YR8/2	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
41	土師器	皿	溝6394(新)	14.4	2.5		1/4	2.5Y8/1	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	乙訓在地形
42	土師器	三足釜	溝6394(新)	6.0	(5.4)		1/5	2.5Y8/2	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
43	土師器	羽釜	溝6394(新)	19.0	(5.9)		口縁部 1/6	2.5Y7/2	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	スス付着
44	土師器	鍋	溝6394(新)	35.0	(12.2)		9/10	10YR8/2	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
45	瓦器	火鉢	溝6394(新)	30.6	(12.8)		口縁部 1/3	N3/0	長石、黒色粒子	スタンプ文
46	瓦器	火鉢	溝6394(新)	49.6	(20.2 +16.8)	36.0	口縁部 3/8	N3/0 ~N8/0	長石、石英、黒色粒子	
47	輸入磁器	椀	溝6394(新)	7.9	3.2	3.1	1/2	釉:5Y8/1 胎:N8/0	黒色粒子	白磁
48	焼締陶器	播鉢	溝6394(新)		9.1		口縁部 破片	2.5YR5/3	長石、チャート、 黒色粒子	
49	土師器	皿N	溝6582	5.0	1.4		3/7	10YR7/3	長石、石英、雲母	
50	土師器	皿N	溝6582	5.6	1.4		2/5	10YR7/3	長石、石英、チャート、 雲母	
51	土師器	皿N	溝6582	6.6	1.4		1/5	2.5Y7/3	長石、石英、チャート、 雲母	
52	土師器	皿N	溝6582	7.4	1.3		1/4	10YR7/3	石英、雲母、黒色粒子	
53	土師器	皿N	溝6582	5.4	1.3		1/2	10YR7/3	石英、雲母、黒色粒子	
54	土師器	皿N	溝6582	5.6	1.3		1/3	10YR7/3	長石、石英、チャート、 雲母	
55	土師器	皿N	溝6582	5.8	1.4		1/3	10YR7/4	長石、石英、チャート、 雲母	
56	土師器	皿N	溝6582	6.2	1.2		4/5	10YR7/3	長石、チャート、雲母	
57	土師器	羽釜	溝6582	21.6	17.6		4/5	10YR8/2	長石、石英、チャート	大和型
58	土師器	皿	溝6130-I	7.1	1.7		9/10	10YR8/3	長石、石英、チャート、 赤色粒子	乙訓在地形
59	焼締陶器	播鉢	溝6130-I		(6.2)		口縁部 破片	N6/1 ~7.5YR6/3	長石、石英	備前産
60	土師器	皿	溝6225	7.7	1.8		11/12	10YR8/3	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	乙訓在地形
61	土師器	皿	溝6225	7.9	1.8		4/5	10YR8/3	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	乙訓在地形
62	土師器	皿	溝6225	9.8	2.0		1/4	10YR6/1	長石、石英、チャート、 赤色粒子	乙訓在地形
63	土師器	皿	溝6225	10.0	1.6		1/4	10YR7/2	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	乙訓在地形
64	土師器	皿	溝6225	10.0	2.2		1/4	10YR7/3	長石、石英、チャート、 雲母、赤色粒子	乙訓在地形

() は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存率	色調	胎土	備考
65	土師器	羽釜	溝6225	20.0	(4.9)		2/3	10YR8/3	長石、石英、黒色粒子	大和型
66	土師器	羽釜	溝6225	19.4	(7.8)		口縁部 4/5	10YR8/3	長石、雲母、赤色粒子	大和型
67	土師器	羽釜	溝6225	16.4	(12.5)		2/3	10YR7/3	長石、石英、チャート	大和型
68	瓦器	茶釜	溝6225		(13.5)		4/5	N4/0	長石、石英、チャート、 赤色粒子	スス付着、羽部径:28.0
69	瓦器	火鉢	溝6225	10.8	(4.4)	8.8	体部 1/4	N5/0	長石、石英、黒色粒子	スタンプ文、底部被熱
70	土師器	皿N	河川堆積 6656	5.2	1.1		7/8	10YR7/3	長石、石英、チャート	スス付着
71	土師器	皿Sb	河川堆積 6656	9.2	2.4		2/3	7.5YR6/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
72	土師器	皿S	河川堆積 6656	10.8	1.9		1/4	7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
73	土師器	皿S	河川堆積 6656	11.8	2.1		1/4	10YR7/3	長石、石英、チャート	
74	土師器	皿S	河川堆積 6656	13.8	(3.2)		1/4	10YR8/2	長石、石英、チャート	
75	土師器	台付皿か	河川堆積 6656		(2.8)	6.0	1/4	10YR8/3	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
76	土師器	羽釜	河川堆積 6656	20.0	(13.8)		4/5	10YR8/3 ~7.5YR7/4	長石、石英	大和型、型成形か
77	土師器	炮烙	河川堆積 6656	28.2	(6.4)		1/4	7.5YR7/2	長石、石英、チャート	型作り
78	瓦器	炉状製品	河川堆積 6656		(4.1)		1/3	N4/0	長石、石英、黒色粒子	
79	瓦器	瓦灯	河川堆積 6656		(13.1)		1/4	N4/0	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
80	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	11.0	2.9	4.1	2/5	釉:5Y6/2 胎:7.5YR7/3	長石、黒色粒子	砂目積み
81	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	11.1	2.7	3.8	3/5	釉:5Y6/2 胎:5Y7/1	長石、石英、チャート	砂目積み
82	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	11.1	3.2	4.0	3/5	釉:2.5Y6/2 胎:5YR5/4	長石	砂目積み
83	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.5	3.3	4.5	ほぼ 完形	釉:5Y4/2 胎:10YR6/1	長石	砂目積み
84	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.5	3.5	4.2	4/5	釉:7.5Y7/1 胎:7.5Y7/1	長石、赤色粒子、 黒色粒子	砂目積み
85	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.5	3.5	4.2	2/5	釉:5Y6/2 胎:5Y7/1		砂目積み、墨書
86	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.6	3.8	4.0	3/5	釉:5Y6/1 胎:5Y7/1	長石	砂目積み
87	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.6	3.4	4.3	ほぼ 完形	釉:5Y7/2 胎:7.5YR5/3	長石、石英	砂目積み
88	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.6	4.5	4.6	1/1	釉:5Y7/1 胎:10YR7/3	長石、黒色粒子	砂目積み
89	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.7	3.0	3.6	1/3	釉:2.5Y7/2 胎:2.5Y8/1	長石、黒色粒子	砂目積み
90	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.8	3.4	4.9	2/5	釉:2.5Y6/2 胎:2.5Y7/1	長石、チャート	砂目積み
91	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.8	3.8	4.8	1/5	釉:5Y6/2 胎:10YR7/3	長石、黒色粒子	砂目積み、墨書
92	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.8	2.6	4.0	1/4	釉:5Y6/2 胎:2.5Y7/1	長石、黒色粒子	砂目積み、墨書
93	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.9	3.6	5.0	4/5	釉:2.5Y6/3 胎:10YR6/3	長石	砂目積み
94	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	13.0	3.0	4.3	1/6	釉:2.5Y7/2 胎:10YR7/3	長石、黒色粒子	砂目積み、墨書
95	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	13.1	3.5	4.6	9/10	釉:10YR8/4 胎:10YR8/1	長石	砂目積み
96	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	13.2	3.2	4.5	2/5	釉:7.5Y7/2 胎:N6/0	長石	砂目積み

() は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存率	色調	胎土	備考
97	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	13.3	4.5	3.6	3/5	釉:2.5Y7/2 胎:10YR8/2	長石、黒色粒子	砂目積み
98	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	13.4	3.1	4.7	2/5	釉:10YR8/2 胎:10YR8/1	長石	砂目積み
99	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	13.7	4.2	5.1	1/5	釉:2.5Y7/2 胎:2.5Y8/1	長石、黒色粒子	砂目積み
100	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	13.9	4.1	4.6	ほぼ 完形	釉:5Y6/2 胎:7.5YR7/3	長石、赤色粒子	砂目積み
101	施釉陶器	皿	河川堆積 6656		(2.9)	5.0	1/3	釉:7.5Y5/2 胎:5YR6/6	長石、黒色粒子	砂目積み、墨書
102	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.6	2.8	5.8	11/12	釉:7.5Y6/2 胎:2.5Y8/2	長石、石英、黒色粒子	輪ハゲ
103	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	13.3	2.9	3.3	完形	釉:5Y7/2 胎:2.5Y8/2	長石、黒色粒子	輪ハゲ
104	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	14.4	3.5	7.5	7/8	釉:5Y5/3 胎:10YR7/2	長石、黒色粒子	輪ハゲ
105	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	11.4	2.3	7.0	完形	釉:5Y7/1 胎:5Y8/1	長石、黒色粒子	胎土目積み
106	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	10.8	2.4	7.8	3/4	釉:2.5Y8/2 胎:2.5Y8/1	長石、黒色粒子	胎土目積み、 内面鉄絵(笹文)
107	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	11.1	2.3	6.6	9/10	釉:2.5Y8/2 胎:2.5Y8/1	長石、赤色粒子	胎土目積み、 内面鉄絵(笹文)
108	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	12.2	2.6	6.4	9/10	釉:2.5Y8/2 胎:2.5Y8/1	長石、赤色粒子	胎土目積み、 内面鉄絵(唐草文)
109	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	6.6	3.1	3.2	5/6	釉:7.5Y6/1 胎:10YR7/3	長石、石英、黒色粒子	ハナレ砂付着
110	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	8.2	3.1	4.4	1/2	釉:2.5Y5/1 胎:2.5Y6/1	長石、黒色粒子	
111	施釉陶器	皿	河川堆積 6656		(3.1)		破片	釉:2.5Y8/2 胎:7.5YR6/3	長石、黒色粒子	
112	施釉陶器	皿	河川堆積 6656	20.3	(4.8)		1/8	釉:2.5Y6/2 胎:7.5YR6/4	長石、石英、黒色粒子	
113	施釉陶器	椀	河川堆積 6656	10.0	7.1	4.0	1/2	釉:2.5Y8/1 胎:2.5Y8/1	長石、赤色・黒色粒子	
114	施釉陶器	椀	河川堆積 6656	10.1	7.3	3.8	3/5	釉:7.5Y7/1 胎:7.5YR6/3	長石	
115	施釉陶器	椀	河川堆積 6656	10.6	7.3	3.6	2/3	釉:5Y7/2 胎:5Y7/2		
116	施釉陶器	椀	河川堆積 6656	12.0	7.9	4.4	2/5	釉:2.5Y8/4 胎:2.5Y8/2	長石	乾燥台痕
117	施釉陶器	椀	河川堆積 6656	9.3	4.8	4.2	11/12	釉:2.5Y8/2 胎:2.5Y8/1	長石、赤色粒子	胎土目積み
118	施釉陶器	天目椀	河川堆積 6656	10.4	6.6	4.4	3/5	釉:7.5YR4/2 胎:2.5Y8/2	長石、黒色粒子	
119	施釉陶器	天目椀	河川堆積 6656	11.0	7.6	4.1	11/12	釉:7.5YR4/3 胎:2.5Y8/3	長石、黒色粒子	
120	施釉陶器	天目椀	河川堆積 6656	11.2	6.9	4.7	7/8	釉:7.5YR3/4 胎:10YR8/2	長石、石英、チャート	
121	施釉陶器	天目椀	河川堆積 6656	12.0	7.9	4.8	1/5	釉:7.5Y8/1 胎:2.5Y8/2	長石、黒色粒子、 チャート	段付白天目
122	施釉陶器	火入	河川堆積 6656		(5.4)	6.6	底部 3/5	釉:N9/0 胎:5YR5/4	長石、黒色粒子	被熱
123	施釉陶器	瓶	河川堆積 6656	3.0	9.3	4.4	11/12	釉:5YR2/1 胎:5YR5/3	長石、石英、赤色粒子	
124	施釉陶器	瓶	河川堆積 6656		(6.5)	8.8	1/3	釉:5YR3/1 胎:5YR5/3	長石、石英、チャート	内面同心円文当て具痕
125	磁器	小杯	河川堆積 6656		(1.0)	2.1	1/6	N9/0	長石、石英、赤色粒子	染付、墨書(花押)
126	磁器	小杯	河川堆積 6656	5.4	4.1	2.2	1/2	N8/0	黒色粒子	染付
127	磁器	小杯	河川堆積 6656	6.1	4.4	3.2	9/10	釉:7.5Y7/1 胎:N8/0	黒色粒子	
128	磁器	小杯	河川堆積 6656	5.5	3.7	2.7	1/3	N8/0	黒色粒子	染付

() は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存率	色調	胎土	備考
129	磁器	椀	河川堆積 6656	8.0	(4.6)		1/3	N8/0	黒色粒子	染付
130	磁器	椀	河川堆積 6656	11.3	6.6	5.4	ほぼ 完形	釉:5GY8/1 胎:2.5Y8/2		染付、ハナレ砂付着
131	磁器	椀	河川堆積 6656	11.2	7.6	5.3	3/5	2.5Y8/1	黒色粒子	染付
132	磁器	皿	河川堆積 6656	11.8	2.6	6.4	1/4	釉:5Y8/1 胎:5Y8/1	黒色粒子	
133	輸入磁器	皿	河川堆積 6656		(1.9)	12.8	1/4	N8/0	黒色粒子	染付、ハナレ砂付着
134	焼締陶器	建水	河川堆積 6656	12.8	9.4	14.2	1/4	2.5YR5/6	長石、石英、黒色粒子	
135	焼締陶器	播鉢	河川堆積 6656	30.0	14.9	13.0	ほぼ 完形	5YR5/4	長石、石英	
136	焼締陶器	播鉢	河川堆積 6656	33.0	15.0	13.6	3/5	2.5YR5/4	長石、石英、チャート	
137	焼締陶器	播鉢	河川堆積 6656	34.2	(14.8)		口縁部 2/5	7.5YR4/2	長石、石英、チャート	
138	土師器	皿S	土留6300		(2.3)		破片	7.5YR7/3	長石、石英、赤色粒子	内外面に油煙あり
139	土師器	皿S	土留6300	11.8	(2.1)		1/8	7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
140	施釉陶器	皿	土留6300	11.0	3.1	4.6	4/5	釉:5Y5/3 胎:7.5YR6/2	長石、石英、チャート、 黒色粒子	
141	施釉陶器	皿	土留6300	24.5	(5.6)		1/6	釉:2.5Y6/2 胎:7.5YR6/3	長石、黒色粒子	
142	土師器	皿N	土留6301	8.0	(2.1)		3/4	10YR7/2	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
143	土師器	皿S	土留6301	9.4	1.9		1/4	7.5YR7/3	長石、石英、チャート	
144	土師器	皿S	土留6301	9.8	2.3		1/5	7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
145	土師器	皿	土留6301	11.3	1.9		1/3	7.5YR7/3	長石、石英、チャート	伏見の在地形か
146	施釉陶器	皿	土留6301	10.7	4.0	3.7	1/3	釉:5Y6/2 胎:10YR6/1	長石、黒色粒子	胎土目積み
147	施釉陶器	皿	土留6301	10.9	3.2	3.0	1/4	釉:5Y6/2 胎:7.5YR5/3	長石、石英、黒色粒子	砂目積み
148	磁器	皿	土留6301	11.0	2.9	6.6	1/10	釉:5GY 胎:N8/0	黒色粒子	ハナレ砂付着
149	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	8.2	2.7	4.4	2/5	釉:2.5Y6/1 胎:2.5Y6/1	長石	胎土目積み
150	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	7.8	3.4	3.8	1/2	釉:5Y6/3 胎:N7/0	黒色粒子	砂目積み
151	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	9.5	4.1	3.6	1/3	釉:5Y6/1 胎:7.5YR5/3	長石、黒色粒子	胎土目積み
152	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	9.8	2.9	3.6	2/5	釉:2.5GY6/1 胎:N5/0	長石	胎土目積み
153	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	10.3	2.7	4.8	2/5	釉:2.5Y8/2 胎:5YR7/6	長石、チャート	砂目積み
154	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	11.4	3.4	4.0	3/5	釉:2.5Y6/3 胎:2.5Y7/3	長石	胎土目積み
155	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	11.8	3.6	4.2	2/5	釉:N7/0 胎:N7/0	長石、石英	砂目積み
156	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	12.0	3.8	4.2	1/3	釉:N7/0 胎:7.5YR6/4	長石、チャート、 赤色粒子	砂目積み
157	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	11.8	2.6	7.5	ほぼ 完形	釉:5Y8/3 胎:2.5Y8/1	長石、チャート	胎土目積み
158	施釉陶器	皿	石組遺構 6010	12.6	2.8	7.6	9/10	釉:2.5Y8/2 胎:2.5Y8/1		胎土目積み
159	施釉陶器	椀	石組遺構 6010	10.5	6.8	4.9	7/10	釉:10Y7/2 胎:N6/0	長石、石英、チャート	胎土目積み、ハナレ砂付着
160	瓦器	火鉢	石組遺構 6010	15.6	(7.8)	12.5	1/4	10YR6/1	長石、石英	ハナレ砂付着

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存率	色調	胎土	備考
161	瓦器	瓦灯	石組遺構 6010	17.2	5.9	16.6	1/3	N3/0	長石、石英、チャート	
162	土師器	皿S	石組遺構 6100	10.9		1.8	1/4	7.5YR8/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	成形台痕
163	土師器	皿S	石組遺構 6100	10.9		2.1	2/5	7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	スス付着
164	土師器	皿S	石組遺構 6100	10.9	2.1		1/2	7.5YR8/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
165	施釉陶器	椀	石組遺構 6100	10.8	7.2	5.0	1/3	釉:7.5YR4/3 胎:5Y8/1	長石、チャート、 黒色粒子、赤色粒子	
166	施釉陶器	皿	石組遺構 6100	11.4	3.1	3.3	3/5	釉:5Y7/1 胎:5Y8/1	長石、黒色粒子	砂目積み
167	施釉陶器	皿	石組遺構 6100	12.5	3.2	4.3	11/12	釉:7.5Y6/1 胎:7.5YR6/3	長石	砂目積み
168	施釉陶器	皿	石組遺構 6100	12.5	3.5	4.0	完形	釉:10YR8/2 胎:10YR8/1		砂目積み
169	施釉陶器	皿	石組遺構 6100	13.6	3.4	4.4	11/12	釉:2.5Y6/3 胎:7.5YR7/4	長石	砂目積み
170	磁器	小杯	石組遺構 6100	6.8	4.3	2.8	1/2	釉:N8/0 胎:N8/0	黒色粒子	白磁
171	磁器	椀	石組遺構 6100		(2.6)	5.2	底部 3/5	N8/0	黒色粒子	染付、漆継ぎ痕
172	輸入磁器	小杯	石組遺構 6100	7.0	4.6	4.2	4/5	釉:7.5Y8/1 胎:2.5Y8/1	黒色粒子	白磁、砂目積み
173	輸入磁器	皿	石組遺構 6100		(0.4)		破片	N8/0		染付
174	土師器	皿	石組遺構 6385	6.3	1.4		1/3	7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	乙訓在地形
175	土師器	皿S	石組遺構 6385	9.4	2.1		7/8	7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
176	土師器	皿S	石組遺構 6385	9.8	2.3		2/3	7.5YR7/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
177	土師器	炮烙	石組遺構 6385	29.9	(6.5)		1/3	10YR8/2	長石、石英、赤色粒子	内外面スス付着、型成形
178	瓦器	火鉢	石組遺構 6385	16.2	(5.1)	15.0	1/6	N3/0	長石、石英、黒色粒子	コンパス文、 脚部の剥離痕あり
179	施釉陶器	皿	石組遺構 6385	11.0	2.2	7.2	1/3	釉:5YR4/3 胎:2.5Y8/1	黒色粒子	胎土目積み、鉄絵
180	施釉陶器	皿	石組遺構 6385	12.4	2.5	4.3	3/4	釉:2.5Y7/1 胎:10YR8/4	長石、黒色粒子	砂目積み
181	施釉陶器	皿	石組遺構 6385	12.7	2.7	4.1	1/6	釉:2.5Y7/1 胎:2.5Y8/1	長石、黒色粒子	砂目積み
182	施釉陶器	皿	石組遺構 6385	13.8	3.8	4.9	1/2	釉:5Y6/1 胎:2.5Y7/1	長石、黒色粒子	砂目積み
183	施釉陶器	椀	石組遺構 6385	13.3	(6.4)	4.9	1/4	釉:7.5Y7/1 胎:N7/0	長石、黒色粒子	ハナレ砂付着
184	施釉陶器	天目椀	石組遺構 6385	10.3	6.3	4.7	3/5	釉:7.5YR3/4 胎:10YR8/2	長石、黒色粒子	
185	焼締陶器	茶入	石組遺構 6385	3.1	6.7	1.9	11/12	7.5YR6/3	長石、石英、チャート、 黒色粒子	肩衝、窯印・火捺あり
186	焼締陶器	建水	石組遺構 6385	12.3	6.3	10.6	1/6	5YR5/4	長石、石英、黒色粒子	
187	焼締陶器	甕	石組遺構 6385		(4.1)		破片	2.5YR4/3	長石、石英、黒色粒子	窯印あり
188	土師器	皿Sb	護岸6136	7.8	1.5		1/4	10YR8/2	長石、石英、チャート	
189	土師器	皿S	護岸6136	11.6	1.8		1/5	10YR7/3 ~10YR4/1	長石、石英、チャート、 黒色粒子	
190	磁器	椀	護岸6136	10.6	(6.0)		2/5	釉:7.5GY8/1 胎:N9/0		染付
191	磁器	仏飯器	護岸6136	4.0	(4.4)		2/3	釉:5GY8/1 胎:2.5Y8/2	黒色粒子	染付
192	土師器	皿	護岸6102	9.9	(2.0)		口縁部 2/5	7.5YR7/4 ~5YR7/6	長石、石英、チャート	型作りか

() は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存率	色調	胎土	備考
193	磁器	皿	護岸6102	13.0	3.1	7.0	1/5	釉:5GY8/1 胎:N9/0		染付、コンニャク印版
194	焼締陶器	瓶	護岸6102		(2.2)	5.8	底部 1/1	5YR5/1		墨書、刻印
195	焼締陶器	播鉢	護岸6102	41.8	15.3	20.8	1/3	2.5YR5/6	長石	
196	土師器	皿	高まり6002	6.6	1.3	3.6	4/5	釉:7.5YR7/8 胎:10YR8/3	長石、赤色粒子	褐釉を施す、 回転系切り未調整
197	土師器	皿	高まり6002	9.9	1.5		3/5	10YR8/2 ~7.5YR4/4	長石、石英、雲母、 赤色粒子	回転系切り未調整
198	磁器	椀	高まり6002	5.5	(5.0)		口縁部 1/3	N8/0		コバルト釉
199	磁器	鉢	高まり6002		(8.3)	8.1	底部 1/1	N8/0		染付、輪トチン痕
200	土師器	皿S	石積6001	9.6	(1.7)		2/5	5YR6/6	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
201	土師器	皿	石積6001	12.0	2.7	7.2	3/5	7.5YR8/2	石英、チャート、 赤色粒子	回転系切り未調整
202	土師器	植木鉢	石積6001		(7.6)	13.6	底部 1/3	7.5YR7/6	長石、石英、赤色粒子	
203	土師器	炮烙	石積6001	30.2	(6.5)		口縁部 1/6	10YR7/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子、雲母	スス付着
204	磁器	皿	石積6001	12.6	2.9	7.8	2/5	釉:10GY8/1 胎:N9/0		染付、コンニャク印版、 焼き継ぎあり
205	磁器	皿	石積6001	10.2	2.1	7.0	ほぼ 完形	N9/0		型打ち
206	磁器	小杯	護岸6005	5.9	2.5	2.6	1/4	N9/0		
207	磁器	椀	護岸6005	10.4	4.2	3.4	9/10	N9/0		印版手(銅板刷り)
208	磁器	椀	護岸6005	10.7	4.9	3.4	3/5	N9/0		コバルト釉
209	磁器	火入	護岸6005	14.8	8.0	9.4	7/10	N9/0		色絵、墨書、ハナレ砂付着、 焼き継ぎあり
210	焼締陶器	播鉢	護岸6005	22.7	8.9	11.1	2/5	2.5YR6/8	長石、石英	
211	土師器	皿	水制6101	5.5	1.0		1/3	釉:5YR6/6 胎:7.5YR8/4	長石、赤色粒子	褐釉を施す、 回転系切り未調整
212	土師器	皿S	水制6101	8.2	(1.4)		1/4	7.5YR7/4	石英、チャート、 赤色粒子	スス付着
213	土師器	皿	水制6101	9.7	2.0		1/3	10YR8/3	長石、石英、チャート、 赤色粒子	伏見の在地形か
214	土師器	皿	水制6101	9.8	2.0		1/4	5YR6/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	型作りか
215	土師器	皿S	水制6101	9.9	1.7		1/6	5YR6/4	長石、石英、チャート、 赤色粒子	
216	施釉陶器	灯明皿 受け	水制6101	6.1	1.1	2.6	ほぼ 完形	釉:2.5Y7/2 胎:5YR6/4	長石、赤色粒子	スス付着
217	施釉陶器	土瓶	水制6101	10.8	(13.9)		口縁部 1/3	釉:2.5Y5/4 胎:10YR8/4	長石、赤色粒子	スス付着、文様(イッチン)
218	施釉陶器	播鉢	水制6101	38.7	(9.7)		口縁部 1/6	釉:7.5YR4/6 胎:N8/0	長石、石英、チャート	
219	磁器	紅皿	水制6101	6.8	2.1	2.2	1/2	N9/0		型打ち
220	磁器	椀	水制6101	9.0	4.8	3.4	1/3	釉:10GY8/1 胎:N9/0		ハナレ砂付着、 文様(プリント)
221	磁器	椀	水制6101	9.7	5.5	3.8	9/10	N9/0		染付、型打ち、焼き継ぎあり
222	磁器	椀	水制6101	9.9	4.8	3.3	ほぼ 完形	N9/0		印判手(型紙刷り)
223	磁器	椀	水制6101	9.9	4.3	3.6	2/5	N9/0		染付、型打ち
224	磁器	小杯	水制6101	8.3	4.0	2.8	2/5	N9/0		染色体文、コバルト釉

()は残存値、単位はcm

No.	器種	器形	遺構名	口径	器高	底径	残存率	色調	胎土	備考
225	磁器	椀蓋	水制6101	10.1	2.4		ほぼ 完形	N9/0		染付、印判(銅板刷り)
226	輸入磁器	皿	土坑6245		3.3	(1.9)	底部 10/12	釉:N8/0 胎:N8/0	黒色粒子	白磁、墨書あり
227	磁器	皿	柱穴6263	10.4	2.7	4.8	4/5	10YR8/2		染付、墨書
228	施釉陶器	皿	粗朶沈床状 遺構6036		(2.7)	3.0	底部 1/1	釉:2.5Y7/2 胎:2.5Y8/2	長石	砂目積み、墨書
229	輸入磁器	皿	IV期整地層		(1.6)	3.8	底部 1/1	釉:5Y8/2 胎:2.5Y8/2	長石、黒色粒子	白磁、墨書「十二」
230	磁器	椀	土坑6260		(2.3)	4.8	底部 1/2	釉:N8/0 胎:N8/0	黒色粒子	墨書「十」か
231	施釉陶器	皿	集石6003	12.4	2.8	3.2	11/12	釉:2.5Y8/2 胎:2.5Y8/1	長石、赤色粒子	砂目積み、墨書
232	輸入磁器	皿	粗朶沈床状 遺構6036	24.1	4.0	14.1	1/12	N8/0	黒色粒子	染付、ハナレ砂付着

付表2 土製品一覧表

()は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	備考
土1	つぼつぼ	石組遺構6385	2.1	2.3					土師質
土2	つぼつぼ	柱穴6184 (建物6184)	1.8	(2.2)					土師質
土3	つぼつぼ	土坑6386	2.2	2.5					土師質
土4	ミニチュア容器	調査区東部	3.2	2.8	5.0				土師質
土5	笛	調査区東部				4.7	2.3	2.8	土師質
土6	土錘	溝6130-I				3.8	(3.6)		土師質 胎土に雲母、赤色粒子含む
土7	土錘	溝6130-I				(4.7)	(3.7)	(1.4)	土師質
土8	土錘	溝6550-II (新)				6.1	5.2	5.1	土師質
土9	塩壺	石積6001	7.2	1.7					土師質
土10	塩壺	護岸6102	6.2	11.8	6.3				土師質
土11	将棋駒	井戸6025				1.8	1.4	0.5	磁器製
土12	像台座	高まり6002							磁器製

付表3 石製品一覧表

()は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	長	幅	厚	重量(g)	備考
石1	基石	Ⅱ期整地層	1.9	1.8	0.8	3.8	黒色
石2	硯	溝6225	(9.3)	(5.0)	(0.7)	22.1	
石3	硯	水制6101	18.5	7.9	2.7	625.5	線刻「高島本石」
石4	五輪塔	集石6003	20.1	13.9		5110.0	花崗岩製
石5	墓石	集石6003	(24.0)	14.6	9.9	7340.0	花崗岩製

付表4 木製品一覧表

()は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	口径	器高	底径	長	幅	厚	備考
木1	綱	水制6101				(12.8)	(3.1)	1.4	
木2	漆器椀	溝6130-Ⅱ (古)	14.0	5.7	7.0				
木3	漆器椀	河川堆積6656		(4.0)					草木文
木4	護符	調査区東部				18.7	3.3	0.15	墨書「蘇民将来子孫也☆」
木5	箸	溝6394(新)				22.7	0.8	0.6	燃えさし転用
木6	方形板	溝6130-Ⅱ (古)				9.1	2.7	0.15	墨画
木7	チキリ	石組遺構6385				8.4	5.7	1.4	
木8	円板	土留6300				13.4	13.4	0.75	墨書「十」「(花押)」
木9	用途不明板	溝6130-Ⅱ (新)				22.6	5.6	1.6	
木10	弓	護岸6102				30.4		2.2	
木11	杖	護岸6102				103.9		(頭部)2.8 (体部)2.2~2.8	

付表5 川船一覧表

()は残存値、単位はcm

船No.	材No.	部位(推定)	長さ	幅	厚さ	樹種	木取り	(図上での)末口の方
川船1	材1	胴敷板	(101.3)	(9.2)	0.8	マツ属複維管束亜属	(不明)	(不明)
	材2	胴敷板	(152.3)	33.1	1.9	マツ属複維管束亜属	(不明)	(不明)
	材3	胴敷板	(169.3)	39.8	1.8	マツ属複維管束亜属	板目(船内が木表か)	右か
	材4	胴敷板	(196.1)	(36.6)	3.0	マツ属複維管束亜属	(不明)	(不明)
	材5	オモキ様の刳材	(270.0)	14.0	3.0	ヒノキ	(不明)	(不明)
	材6	側板	(232.2)	(7.9)	2.3	ヒノキ属(サワラか)	(不明)	(不明)
	材7	(不明)	(145.0)	(29.1)	-	マツ属複維管束亜属	(不明)	(不明)
	材8	(不明)	(68.9)	(6.7)	-	サワラ	(不明)	(不明)
川船2	材1	胴敷板	526.2	48.7	3.4	マツ属複維管束亜属	板目(船内が木表)	左
	材2	オモキ様の刳材	(523.5)	19.7	3.3	ヒノキ属(サワラか)	追柁(船内が木表)	(不明)
	材3	側板	442.0	14.3	3.9	ヒノキ	板目(船内が木表)	(不明)
	材4	棚板下材	(136.9)	(14.8)	4.0	サワラ	(不明)	(不明)
	材5	表敷板or艫敷板	(132.5)	31.4	3.1	マツ属複維管束亜属	板目	(不明)
	材6	オモキ様の刳材	(154.0)	19.9	5.3	ヒノキ科(アスナロか)	(不明)	(不明)
	材7	側板	(79.8)	(6.4)	3.5	ヒノキ属(サワラか)	(不明)	(不明)
	材8	(不明)	(32.5)	6.3	2.3	ヒノキ科(アスナロか)	(不明)	(不明)
	材9	(不明)	(34.2)	6.4	2.5	ヒノキ科(アスナロか)	(不明)	(不明)
	材10	死節埋木	11.6	3.6	0.5	-	板目	(不明)
川船3	材1	胴敷板	(514.0)	46.5	3.2	マツ属複維管束亜属	板目(船内が木裏)	右
	材2	胴敷板	(510.0)	46.8	2.2	マツ属複維管束亜属	板目(船内が木裏)	右
	材3	オモキ様の刳材	(491.1)	13.3	2.9	ヒノキ属(サワラか)	追柁(船内が木表)	右
	材4	表敷板or艫敷板	111.0	36.0	2.7	マツ属複維管束亜属	板目(船内が木裏)	右
	材5	表敷板or艫敷板	178.3	41.8	3.0	マツ属複維管束亜属	板目(船内が木裏)	左か
	材6	オモキ様の刳材	171.8	12.5	4.2	ヒノキ	追柁(船内が木裏)	(不明)
	材7	立板	(68.9)	6.8	-	サワラ	(不明)	(不明)
	材8	立板	(60.4)	(11.3)	7.8	ヒノキ	(不明)	(不明)
	材9	立板	(60.1)	(13.2)	-	サワラ	(不明)	(不明)
	材10	(不明)	(15.2)	(6.3)	-	-	(不明)	(不明)
	材11	敷押え	(91.5)	10.6	7.2	ヒノキ	板目か	(不明)
	材12	敷押え	(97.8)	11.3	1.3	マツ属複維管束亜属	板目か	(不明)
	材13	敷押え	(107.0)	8.9	3.8	ヒノキ属(サワラか)	板目	(不明)
	材14	敷押え	(80.3)	9.7	4.7	ヒノキ科(アスナロか)	板目	(不明)
	材15	(不明)	(71.0)	10.8	3.6	ヒノキ科	(不明)	(不明)
川船4	材1	側板	(381.7)	20.5	4.3	サワラ	板目(船内が木表)	左
	材2	オモキ様の刳材	(199.5)	(7.7)	3.8	ヒノキ科(ヒノキか)	(不明)	(不明)
川船5	材1	側板	(477.1)	21.4	4.3	サワラ	追柁(船内が木裏)	右
	材2	オモキ様の刳材	(501.0)	16.5	4.3	ヒノキ	追柁(船内が木裏)	右
川船6	材1	棚板上材	(587.7)	19.8	4.2	ヒノキ	板目(船内が木裏)	右
	材2	棚板下材	(440.1)	5.5	3.8	ヒノキ	追柁(船内が木裏)	右
	材3	側板	188.3	15.4	4.7	サワラ	板目(船内が木裏)	(不明)
	材4	側板	607.9	19.5	4.5	ヒノキ	板目(船内が木裏)	左
	材5	オモキ様の刳材	609.2	12.0	4.2	ヒノキ	追柁(船内が木裏)	左
	材6	(不明)	13.2	2.8	4.3	ヒノキ	(不明)	(不明)

※木材の腐朽が進み、厚さを計測できない部材、及び詳細な樹種識別が困難な部材があった。

付表6 金属製品一覧表

()は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	長	幅	高	厚	重量(g)	備考
金1	船釘	石組遺構6004	7.9	1.3		0.5	30.4	縫釘
金2	船釘	調査区東部	8.9	1.2		0.5	19.9	縫釘
金3	船釘	調査区東部	7.9	1.0		0.4	10.0	縫釘
金4	船釘	調査区東部	(4.1)	2.2		0.4	10.4	縫釘
金5	船釘	石組遺構6385	11.2	1.3		0.5	24.1	縫釘
金6	船釘	調査区東部	11.4	1.2		0.6	28.3	縫釘
金7	船釘	調査区東部	14.0	2.3		0.4	29.0	縫釘
金8	船釘	攪乱	14.2	2.0		0.7	42.3	縫釘
金9	船釘	調査区東部	(4.7)	3.9		0.3	10.0	通釘 マキハダ遺存
金10	船釘	調査区東部	14.7	4.7		0.3	32.7	通釘
金11	船釘	調査区東部	14.1	4.9		0.6	32.8	通釘
金12	和釘	石組遺構6385	6.4	1.2		0.5	7.6	皆折釘
金13	和釘	水制6101	9.8	2.0		0.9	20.6	皆折釘
金14	和釘	調査区東部	5.4	1.1		0.3	2.8	頭巻釘
金15	和釘	溝6225	7.8	1.5		0.3	5.5	頭巻釘
金16	和釘	調査区東部	(9.3)	2.7		0.7	23.0	頭巻釘
金17	和釘	調査区東部	3.9	0.7		0.3	1.1	頭巻釘
金18	楔	石組遺構6010 検出時	5.7	1.4		0.8	23.3	
金19	鑿状工具	Ⅲ期整地層上面 検出時	(15.4)	2.7		2.7	132.6	
金20	釘締め	護岸6102	9.5	2.5		2.1	83.7	
金21	錠	調査区東部	6.7	14.7		1.1	138.9	
金22	鉤状製品	石組遺構6100	(7.0)	7.5	(5.0)		53.7	
金23	鉤状製品	護岸6005	22.0	13.0	13.4		356.5	
金24	煙管	調査区東部	(4.5)	1.4	(3.0)		4.5	雁首部
金25	煙管	調査区東部	5.4	1.3	2.6		6.3	雁首部
金26	煙管	調査区東部	6.1	1.5	2.8		5.8	雁首部
金27	煙管	高まり6002	(5.1)	1.5	1.5		8.2	吸口部
金28	煙管	調査区東部	7.2	1.1	0.7		4.0	吸口部
金29	指貫	水制6101	2.0	2.0	1.1		2.3	
金30	和鉄	調査区東部	(13.5)	(2.3)		0.5	11.0	
金31	鋳	水制6101	2.2	0.8		0.2	0.9	
金32	簪	高まり6002	(2.6)	(0.8)		(0.3)	1.1	

() は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	長	幅	高	厚	重量(g)	備考
金33	鉄砲玉	柱穴6079 (柱穴列6078)					5.8	直径1.2~1.3
金34	火打金	第1面 掘り下げ時	3.1	(7.7)		0.4	9.1	
金35	輪花皿	調査区東部			2.3	0.1	21.8	口径6.9
金36	小柄	調査区東部	(16.1)	1.4		0.6	21.3	
金37	小柄	調査区東部	12.1	1.6		0.45	29.8	
金38	小柄	集石6003	(10.0)	1.3		0.3	13.8	
金39	小柄	調査区東部	(9.5)	1.5		0.5	16.8	
金40	刀子	溝6550-II (新)	(5.3+2.6)	1.3		0.5	9.8	
金41	杓子	集石6003	(25.0+8.7)	4.9		0.2	30.8	
金42	鉤針	石積6001	5.6	3.8			3.7	
金43	V字形金具	水制6101	2.6	5.8		(0.4)	2.5	
金44	毛垂	調査区東部	14.5	2.8		0.8	31.5	
金45	包丁	調査区東部	23.0	8.7		4.0	141.8	
金46	和錠	水制6101		19.0	6.9	2.5	538.0	
金47	蓋	水制6101			1.8	0.1	53.2	口径10.1
金48	蓋	護岸6102			4.4	0.1	140.9	口径12.0
金49	不明鉄製品	土坑6294		9.8	(3.0)	0.3	22.1	
金50	不明鉄製品	集石6003		(11.4)	(3.4)	0.3	42.1	
金51	不明鉄製品	調査区東部	(18.9)	(8.1)	(19.0)		61.7	
金52	滓	水制6101	3.5	2.1		2.1	12.4	
金53	滓	土坑6425	4.3	3.1		2.0	6.1	
金54	滓	溝6130-I	4.2	3.5		2.8	32.3	
金55	滓	河岸法面	6.0	5.1		2.2	69.5	
金56	滓	調査区東部	8.6	6.0		3.2	117.3	
金57	滓	調査区東部	9.3	7.9		4.6	234.0	

付表7 銭貨一覧表

()は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	縦	横	厚	重量(g)	初鋳年	備考
銭1	開元通寶	ピット6079	2.45	2.4	0.1	2.9	621	
銭2	貞元重寶	検出時	2.3	2.3	0.1	2.2	758	
銭3	淳化元寶(真書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.1	990	
銭4	至道元寶(行書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.4	995	
銭5	至道元寶(行書)	石組遺構6004検出時	2.4	2.4	0.1	2.0	995	
銭6	至道元寶(草書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.2	995	
銭7	咸平元寶(真書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	2.8	998	
銭8	景德元寶(真書)	調査区東部	2.45	2.45	0.1	3.1	1004	
銭9	祥符元寶(真書)	調査区東部	2.45	2.45	0.1	3.0	1009	
銭10	祥符通寶(真書)	第2面掘り下げ時	2.4	2.4	0.1	1.6	1009	
銭11	天禧通寶(真書)	調査区東部	2.5	2.5	0.1	3.3	1017	
銭12	天聖元寶(真書)	調査区東部	2.45	2.45	0.1	3.8	1023	
銭13	天聖元寶(真書)	検出時	2.45	2.45	0.1	3.0	1023	
銭14	天聖元寶(篆書)	調査区東部	2.45	2.45	0.1	3.5	1023	
銭15	景祐元寶(真書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.3	1034	
銭16	皇宋通寶(真書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.0	1038	
銭17	皇宋通寶(真書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	2.4	1038	
銭18	皇宋通寶(篆書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.0	1038	
銭19	至和元寶(真書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.0	1054	
銭20	至和元寶(篆書)	調査区東部	2.35	2.35	0.1	3.7	1054	
銭21	嘉祐元寶(真書)	調査区東部	2.3	2.3	0.1	3.4	1056	
銭22	嘉祐通寶(篆書)	溝6394	2.3	2.3	0.1	2.3	1056	
銭23	治平元寶(真書)	調査区東部	2.3	2.3	0.1	3.3	1064	
銭24	治平元寶(篆書)	調査区東部	2.35	2.35	0.1	3.2	1064	
銭25	治平通寶(真書)	第3面検出時	2.4	2.4	0.1	2.6	1064	
銭26	熙寧元寶(真書)	溝6130-II(古)	2.4	2.4	0.1	3.8	1068	
銭27	熙寧元寶(篆書)	調査区東部	2.35	2.35	0.1	3.3	1068	
銭28	熙寧元寶(篆書)	調査区東部	2.45	2.45	0.1	4.0	1068	
銭29	元豊通寶(行書)	調査区東部	2.35	2.35	0.1	3.5	1078	
銭30	元豊通寶(篆書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.6	1078	
銭31	元祐通寶(行書)	石組遺構6004検出時	2.35	2.35	0.1	2.1	1086	
銭32	元祐通寶(篆書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.6	1086	

()は残存値、単位はcm

No.	種類	遺構名	縦	横	厚	重量(g)	初鑄年	備考
銭33	元祐通寶(篆書)	調査区東部	2.4	2.35	0.1	2.5	1086	
銭34	紹聖元寶(行書)	調査区東部	2.35	2.35	0.1	2.8	1094	
銭35	紹聖元寶(行書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	3.3	1094	
銭36	紹聖元寶(篆書)	調査区東部	2.35	2.35	0.1	2.9	1094	
銭37	元符通寶(篆書)	土留6300	2.3	2.3	0.1	2.5	1098	
銭38	聖宋元寶(行書)	石組遺構6004検出時	2.4	2.4	0.1	2.3	1101	
銭39	聖宋元寶(篆書)	調査区東部	2.4	2.4	0.1	2.2	1101	
銭40	大觀通寶	溝6130-II(古)	2.4	2.4	0.1	2.8	1107	
銭41	政和通寶(分楷)	石組遺構6010	2.4	2.4	0.1	3.2	1111	
銭42	皇宋元寶	ピット6079	2.4	2.4	0.1	3.2	1253	
銭43	乾隆通寶	水制6101	2.5	2.5	0.1	3.6	1736	
銭44	寛永通寶(古)	石組遺構6385	2.45	2.45	0.1	3.2	1636	
銭45	寛永通寶(新)	水制6101	2.2	2.2	0.1	1.5	1668	背:元
銭46	寶永通寶	高まり6002	3.65	3.65	0.15	8.8	1708	十文銭
銭47	寛永通寶	護岸6005	2.8	2.8	0.1	4.2	1768	背:波 四文銭
銭48	文久永寶(真文)	調査区東部	2.6	(2.5)	0.1	2.6	1863	背:波
銭49	二銭銅貨	水制6101	3.1	3.1	0.2	13.6	1873	
銭50	模鑄銭	第1面検出時	2.2	2.2	0.08	1.7	—	祥符元寶(真書)
銭51	模鑄銭	第1面検出時	2.35	2.35	0.1	3.0	—	政和通寶(分楷)
銭52	模鑄銭	土留6300	2.25	2.25	0.05	0.9	—	政和通寶(篆書)
銭53	雁首銭	石組遺構6004検出時	1.5	1.9	0.2	1.6	—	

圖 版

報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあと・よどみずたれおおしもづちょういせき							
書名	長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2024-8							
編著者名	中谷俊哉・中谷正和							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2025年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 よどみずたれおおしもづちょう 淀水垂大下津町 いせき 遺跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よどみずたれちょう 淀水垂町地先	26100	3 1214	34度 54分 37秒	135度 42分 58秒	2023年11月 6日～2024 年5月28日	1,900m ²	河道拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 淀水垂大下津町 遺跡	都城跡	室町時代中葉 ～後葉	溝	土師器、輸入陶磁器		江戸時代前半から 明治時代にかけて の淀城城下町を検 出した。 江戸時代前半から 現代にかけての護 岸を検出した。 江戸時代前半の川 船が船体構造を保 った状態で複数出 土した。		
	集落跡	室町時代後葉 ～安土桃山時代	建物、礎石列、柱 穴列、石組遺構、 溝	土師器				
		江戸時代前半	建物、礎石列、柱 穴列、土留、石組 遺構、護岸	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、磁器、川船、 金属製品、銭貨				
		江戸時代後半 ～明治時代	建物、礎石列、粗 朶沈床状遺構、溝、 集石、護岸、水制	土師器、磁器、金属製 品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2024-8
長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡

発行日 2025年12月28日

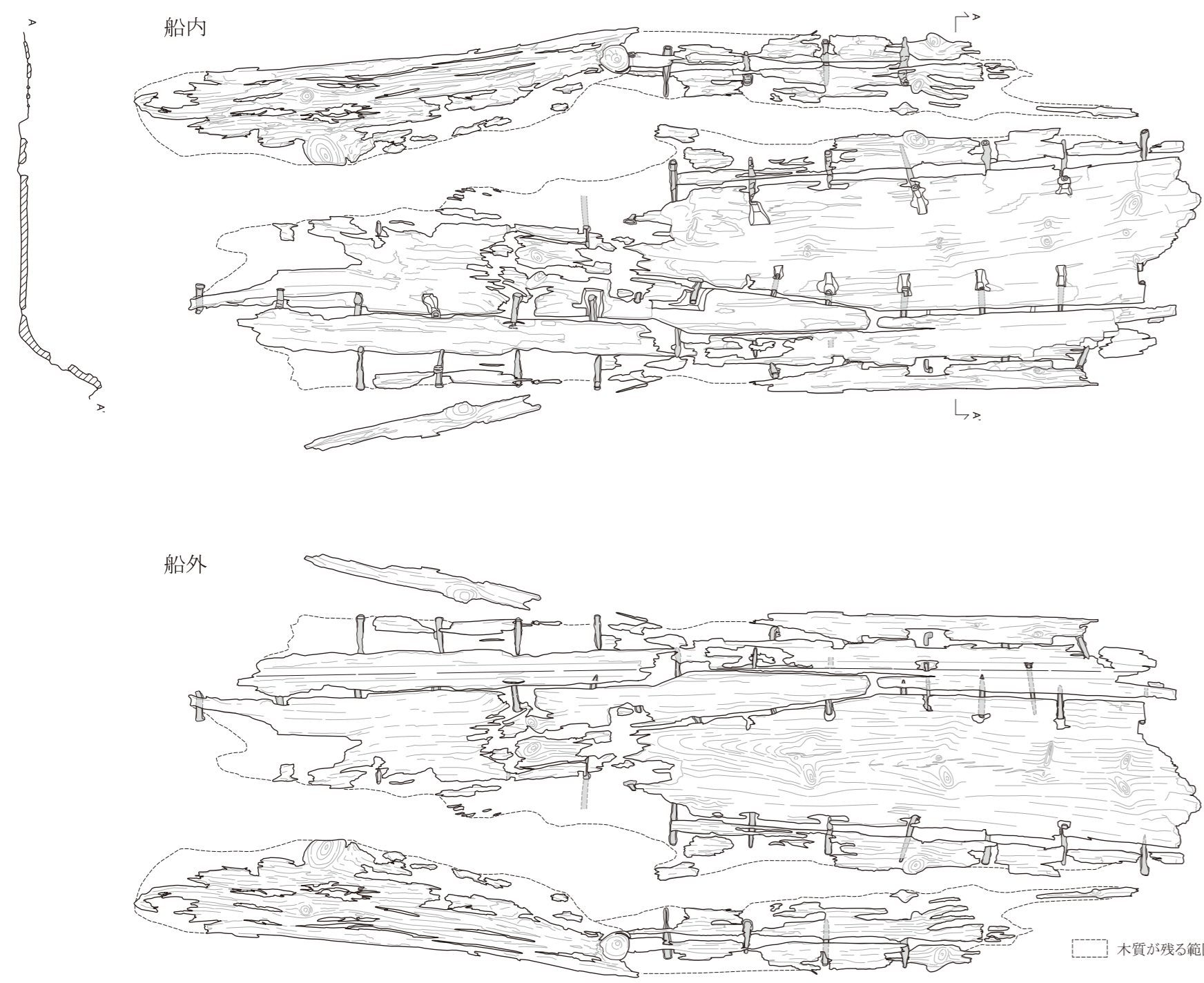
編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

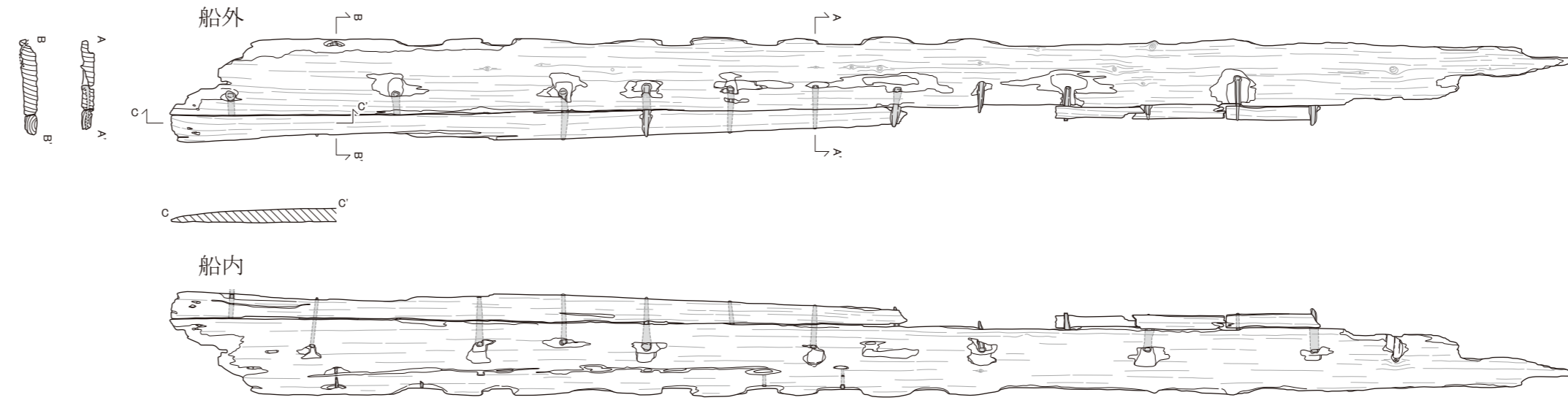
印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273番
〒602-8358 TEL 075-467-5151

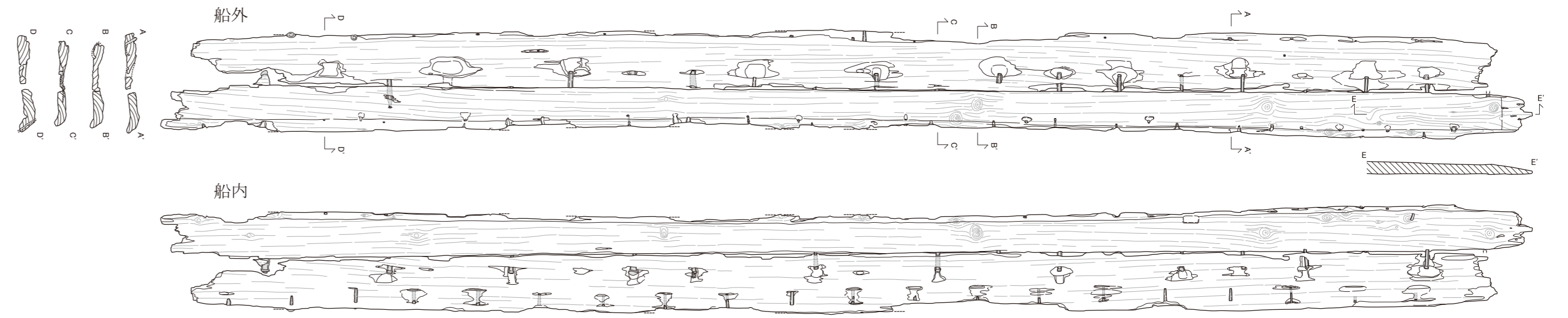
川船1



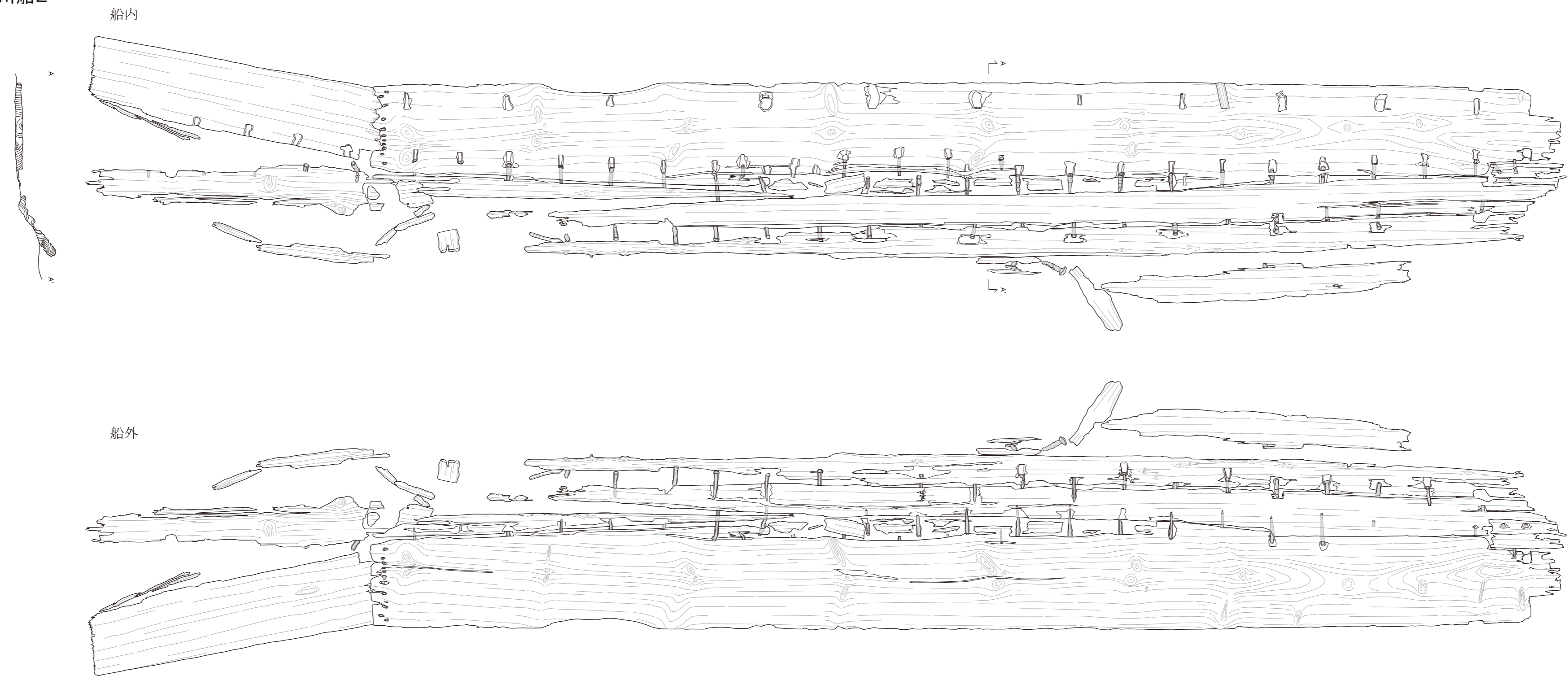
川船4



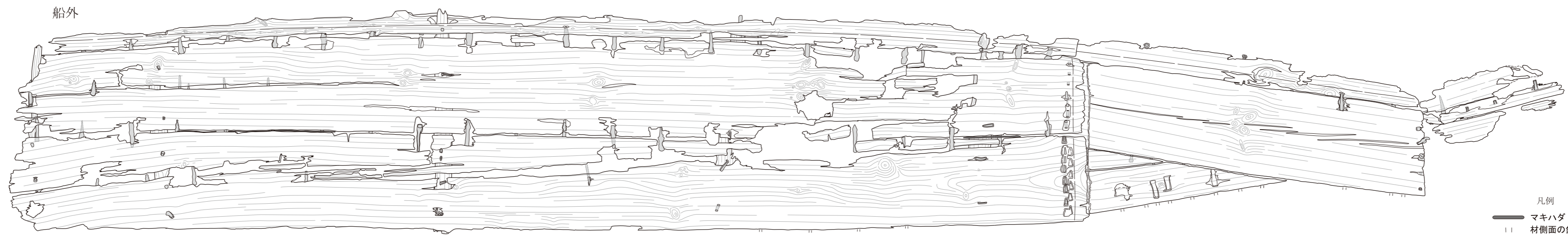
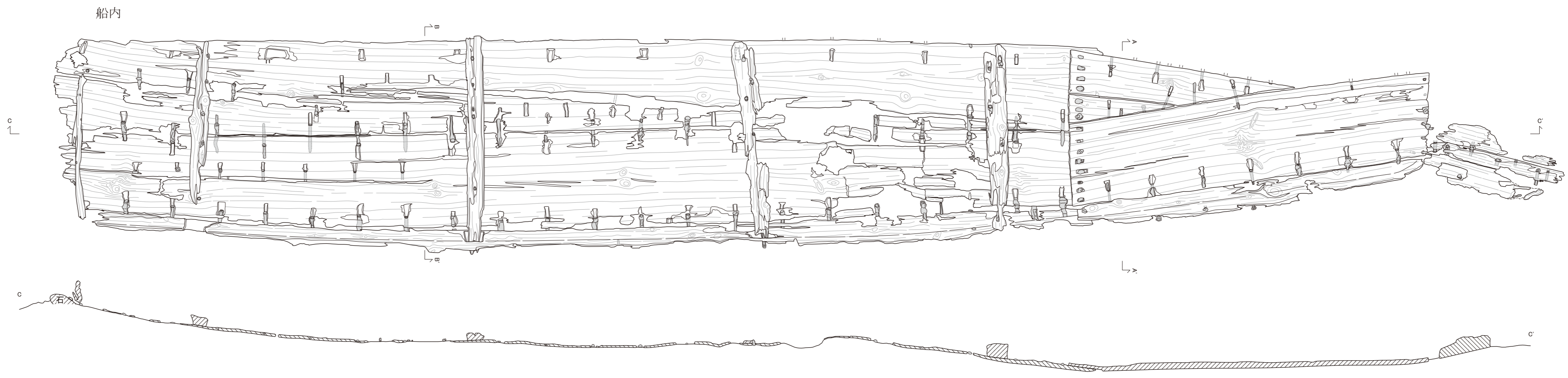
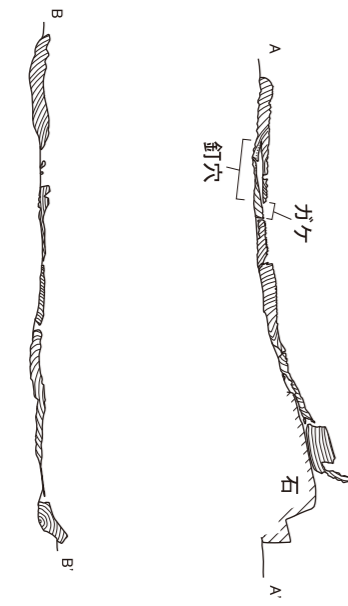
川船5



川船2

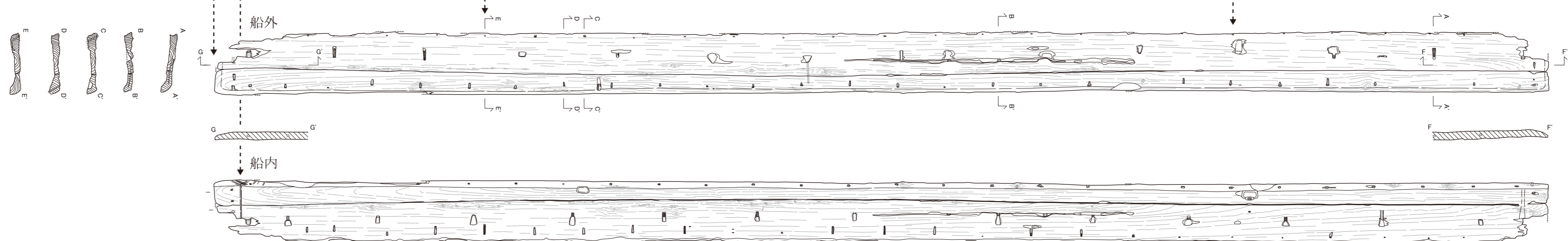
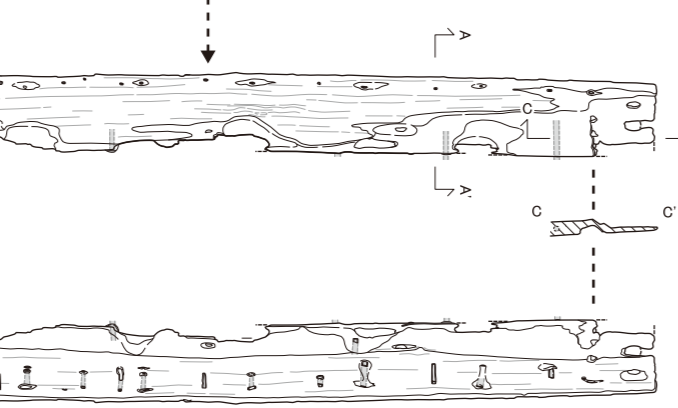
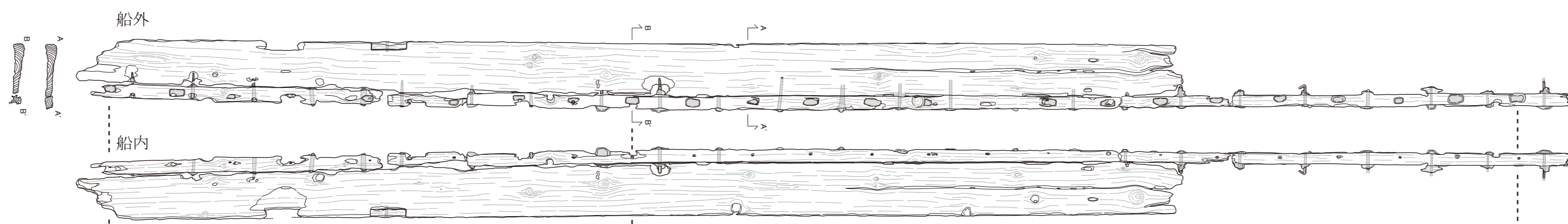
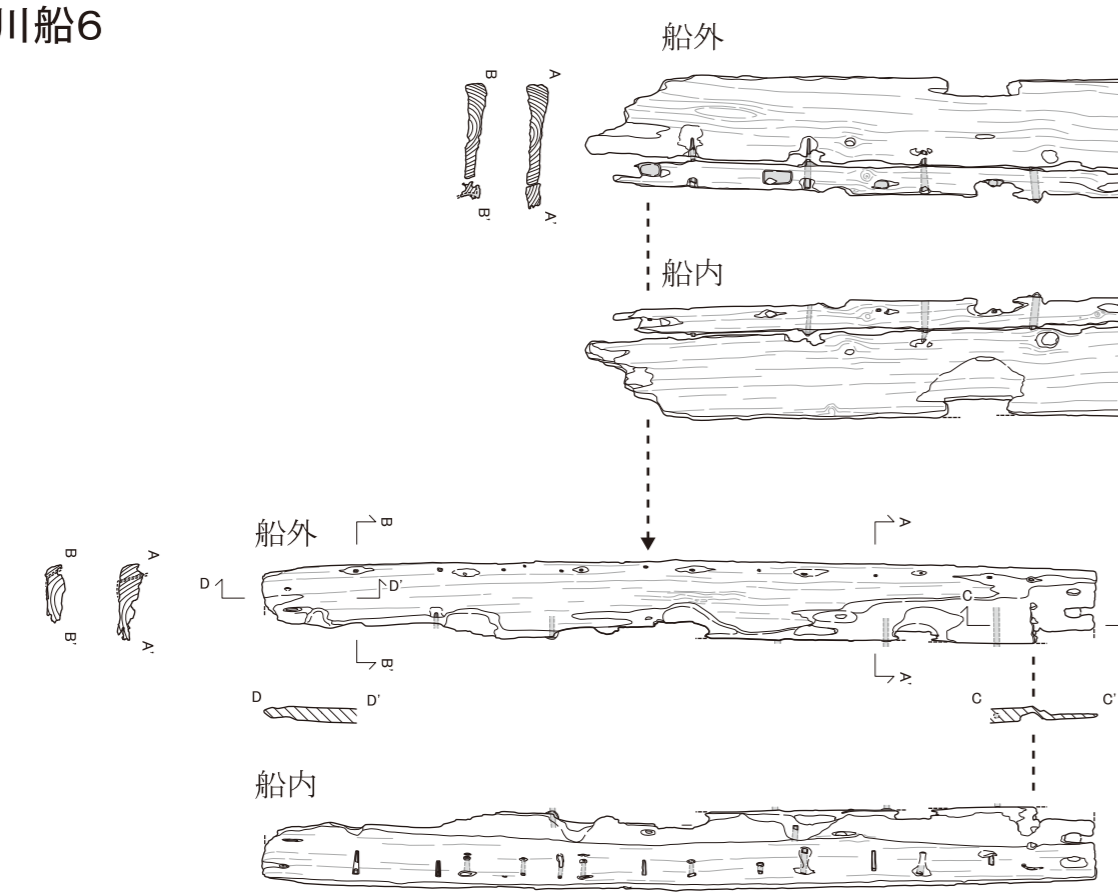


川船3

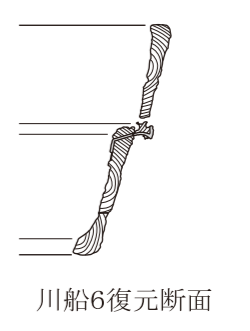


凡例
 マキハダ
 材側の釘穴位置

川船6



断面B-B'
 断面E-E'
 土留6300
 エレベーション
 部材どうしの接合角度
 (土留6300エレベーションを手がかりに)



凡例
 マキハダ

